

平成 27 年度指定 スーパーグローバルハイスクール

# 研究開発実施報告書

## 第 4 年次



平成 31 年 3 月

岩手県立盛岡第一高等学校



# 岩手県立盛岡第一高等学校スーパーグローバルハイスクール（SGH）研究開発構想

◆目的 グローバル課題を発見し、原因を探り、解決法を探究・議論し、その成果を本国のみならず、世界のパイロットモデルとして発信する一連の取り組みを通して、21世紀の理想的なグローバル社会を開拓し得る人材の育成を目指す。

◆目標 ・グローバル課題の解決方法を探究し、その成果を世界へ向けて発信するとともに主体的に課題解決に向けた実践を行う姿勢を養う。  
 ・世界の諸国・諸地域の実態と抱える課題への関心を高めるとともに、論理的思考力、課題解決能力、積極性、行動力を養い、主体的な学びを醸成する。  
 ・他者との相互理解・協業に必要な傾聴力、共感力、質問力、説得力を育成し、自分の考えを分かりやすくかつ説得的に伝える力を身に付ける。  
 ・上記3つの目標を十分に達成するに足る実践的な英語力を習得する。



## イーハトーブ世界の開拓者の育成

◆東日本大震災からの復興  
 ・著しい高齢化  
 世界各地で発生が懸念されるグローバル課題が先鋭的に存在  
 ・ILC誘致活動  
 宇宙の誕生の解明

SG課題研究Ⅲ（3年普通科全員）  
 ・岩手から国内および海外へ研究成果を発信  
 ・英文による論文作成 ・ 英語による成果発表

SG課題研究Ⅱ（2年普通科全員）

・論理的思考力、問題解決能力の育成  
 ・課題研究のテーマ『岩手が抱える6分野の諸問題をグローバルな視点で解決する探究活動』

① 21世紀型地方都市の探究  
 ② ローカルな魅力を活かしたグローバル観光モデルの探究  
 ③ “Made in Iwate”ブランドの確立へ向けた探究  
 ④ グローバルスタンダード教育モデルの探究  
 ⑤ グローバルな知の拠点の創造へ向けた探究  
 ⑥ 世界を支える地域医療の探究

・課題研究発表会  
 ・連携大学や企業との共同研究  
 ・SG海外研修（台湾）  
 ・SG講演会

SG課題研究Ⅰ（1年全員）  
 ・問題発見能力、コミュニケーション能力の育成  
 フィールドワーク、グループワーク、ディベート、プレゼンテーションという一連の取り組みを通じてグローバル課題の抽出からその解決法の模索までの探究活動

・実践的な英語力の育成  
 「グローバルコミュニケーション英語」  
 ・国際時事問題に対する関心と専門性の育成  
 「グローバル現代社会」

岩手大学、岩手医科大学、東北大学 など  
 ・指導プログラム開発への助言  
 ・講義（講師派遣、サテライト授業）  
 ・TA（大学生、大学院生の派遣）  
 ・留学生とのディスカッション  
 企業、国際機関、海外の大学  
 海外の高校 など

◆これまでの取り組み  
 ◇国際交流事業（S55～）  
 ・海外派遣研修（のべ483名）  
 ・外国人高校生受入（のべ232名）  
 ◇理数科振興プログラム  
 ・課題研究（連携：岩手大学等）  
 ・つくば研修  
 ・施設見学実習

海外派遣研修  
 「白聖の翼」  
 ・約1か月の本校独自の海外派遣事業  
 グローバル研究会  
 外国人高校生招致  
 SGH、SSH校との合同発表会  
 英語版学校案内  
 英語部の活動充実  
 外国大学進学研究

課題研究以外の取り組み



台湾での街頭アンケート調査（大安森林公園）



I L C推進校成果交流会での発表（盛岡・I L Cラボ）

はじめに

「スーパーグローバルハイスクール事業 ～4年目を終えて～」

岩手県立盛岡第一高等学校  
校長 川上圭一

本校が平成27年度に文部科学省からスーパーグローバルハイスクール事業（以下「SGH事業」）の指定を受け4年が経過いたしました。この間、本校は「イーハトーブ世界（万民の幸福を追求するグローバル社会）の開拓者の育成」を研究開発名として、本県が抱える6分野の諸課題（21世紀型の都市、観光、地元ブランド、教育、ILC誘致に伴う知の拠点化、地域医療）をグローバルな視点から解決する探求活動SG課題研究と海外フィールドワークをその中心に据え研究開発に取り組んで参りました。

更に昨年度からは、地元盛岡市と提携し、地域をフィールドとしたグローバル課題の探求プログラムの開発にも着手し、本年度はその充実を図るべく、これまでの提言に留まらず、生徒自らがアクションを起こすことを目標に取り組を推進いたしました。

その甲斐あって、本年度は自分たちの研究テーマに基づく地域社会への提言を実際に盛岡市議会や岩手県議会に陳情するグループも現れ、議会に招かれ生徒自らが主旨説明をする機会を得るなど、学校外で生徒が活躍する場面が見られるようになりました。

また、本年度は海外フィールドワークの派遣先もポストSGHを見据え、アメリカ合衆国ボストンからわが国と同様のグローバル課題を抱える台湾に変更いたしました。これにより生徒の費用負担が大幅に削減されたほか、現地の高校生や大学生とのフィールドワークやディスカッション等を通じて、これまで以上に探究活動の深化を図ることができたものと捉えております。更に今回の訪問先の学校と継続的な関係を構築する見通しが立ったことも今後に向け大きな収穫となりました。

さて、いよいよ次年度は指定最終年度を迎えることとなります。今後は事業のまとめと課題である成果の普及に努めるとともに、これまで積み重ねてきた実績を指定終了後、本校の教育課程にどう位置付けるか、海外フィールドワークをいかに継続すべきか、新学習指導要領において重視される探求活動にどう結びつけるか等々について、新たに組織を立ち上げ1年をかけて検討することとしております。

結びに、本事業に真剣に取り組んでくれた本校の生徒諸君並びに指導に当たった教職員の奮闘に敬意を表するとともに、本校のSGH事業にご支援をいただいた岩手県教育委員会をはじめ、関係の皆様衷心より感謝申し上げます。今後もより一層のご支援、ご指導を賜りますようお願い申し上げ巻頭のご挨拶といたします。

# 平成 30 年度スーパーグローバルハイスクール 研究開発実施報告書・4年次 平成 31 年 3 月 岩手県立盛岡第一高等学校

巻頭言

目 次

I	平成 30 年度岩手県立盛岡第一高等学校 SGH 事業概要	1
II	SG 課題研究 I	9
III	SG 課題研究 II	22
IV	SG 課題研究 III	33
V	SG 海外フィールドワーク	43
VI	グローバルコミュニケーション英語	60
VII	グローバル現代社会	66
VIII	SGH と ICT	68
IX	英語ディベート	70
X	生徒海外派遣事業「白壁の翼」	71
XI	運営指導委員会議事録	73

巻末資料

(別紙様式3)

平成31年3月20日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 岩手県盛岡市内丸10-1  
管理機関名 岩手県教育委員会  
代表者名 教育長 高橋 嘉行 印

平成30年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

平成30年4月2日(契約締結日)～平成31年3月29日

2 指定校名

学校名 岩手県立盛岡第一高等学校

学校長名 川上 圭一

3 研究開発名

「イーハトーブ世界の開拓者の育成」

4 研究開発概要

本校の研究開発は、大きく分けて、グローバル・リーダーに求められる諸資質の涵養を目指し、1年生から3年生の3年間にわたり、総合的な学習の時間を活用して探究的学習に取り組むSG課題研究(海外フィールドワークもその一環とする)と、それを教科の面から補完する科目としての「グローバルコミュニケーション英語」・「グローバル現代社会」の2つの柱からなる。今年度から、海外フィールドワーク先をボストンから台湾に変更し、生徒個々が取り組む課題研究とより密に連動した海外における現地調査を実施した。また、現地高校生と共通のグローバル課題の探究をテーマにディスカッションを行ない、関係を深めることができた。次年度以降も海外協力校として継続的な関係を構築する見通しが立ったことは大きな収穫である。

課題研究を通して、国内外の多様な機関と協力、連携が進んでおり、また地域の既存の教育資源も大いに活用できた。この関係はSGH指定終了後も、本校の探究的学習において大いに役立っていくと思われる。

5 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
学校訪問	○		○			○					○	
文科省 会議参加			○									
運営指導 委員会											○	
行事視察等			○								○	○
課題研究支援			○								○	

(2) 実績の説明

4月23日（月）学校訪問（今年度SGH事業運営について管理職・担当者と協議）

6月6日（水）運営指導委員の今年度委嘱及び委嘱状送付

6月28日（木）盛岡一高SG課題研究英語発表会対応（発表会の視察、指導助言等）

6月29日（金）第1回SGH連絡協議会・連絡会参加（盛岡一高担当者と同行）

9月3日（月）学校訪問（英語授業参観、研究協議の実施）

2月19日（火）盛岡一高SGH1学年課題研究発表会対応（発表会の視察、指導助言等）

2月25日（月）盛岡一高SGH2学年課題研究発表会対応（発表会の視察、指導助言等）

2月25日（月）盛岡一高SGH運営指導委員会対応

3月23日（土）第3回東北地区SGH課題研究発表フォーラム参加（盛岡一高担当者と同行）

※ 上記の他にも、電子メールや電話等により連絡をとり対応したもの。

6 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
SG課題研究Ⅰ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
SG課題研究Ⅱ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
SG課題研究Ⅲ	○	○	○	○	○	○						
グローバルコミュニケーション英語	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
グローバル現代社会	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○



(2) 実績の説明

	1 学年≪SG 課題研究Ⅰ≫	2 学年≪SG 課題研究Ⅱ≫	3 学年≪SG 課題研究Ⅲ≫
4 月	11 日 エンカウンター① 12 日 エンカウンター② 24 日 エンカウンター③	18 日 課題研究Ⅱガイダンス① 25 日 課題研究Ⅱガイダンス② (3 年生による発表)	19 日 ガイダンス
5 月	1 日 SG 講演会、海外派遣報告 8 日 SG 講演会 2 29 日 地方創生プログラム フェイズ 1	2 日 グローバルセミナー①医療	10 日 各班打合せ、英語論文提出 18 日 英語プレゼンテーション 講習会 24 日 コース別リハーサル 31 日 コース別リハーサル
6 月	5 日 地方創生プログラム フェイズ 2・3 12 日 地方創生プログラム フェイズ 4	7 日 グローバルセミナー②地方創 生(2 時間) 13 日 グローバルセミナー③貿易・ 教育(2 時間) 27 日 グローバルセミナー④観光・ ILC(2 時間)	7 日 コース別英語発表会 28 日 SG 課題研究英語発表会
7 月	3 日 GTEC for STUDENT 受検 10 日 フィールドワーク事前準備	3 日 GTEC for STUDENT 受検 4 日 グローバルセミナー⑤ 9 日 前期探究① 11 日 前期探究② 18 日 前期探究③	3 日 GTEC for STUDENT 受検 23 日 台湾留学セミナー
8 月	夏季休業期間 フィールドワーク		
	21 日 フィールドワークのまとめ	22 日 前期探究④	
25 日・26 日 文化祭におけるポスター発表			
9 月	4 日 ポートフォリオ作成	5 日 前期探究の成果共有 24 日 中間発表会	
10 月	2 日 地方創生プログラムのまとめ 16 日 関西フィールドワークガイダ ンス 23 日 関西フィールドワーク事前準備 1 30 日 関西フィールドワーク事前準備 2	3 日 グループ再編(2 時間) 9 日 後期探究① 17 日 後期探究②(2 時間) 31 日 後期探究③(2 時間)	
11 月	10 日～24 日 SG 海外フィールドワーク		
	6 日 関西フィールドワーク事前準備 3 14 日 SG 講演会 3 27 日 関西フィールドワーク事前準備 4	14 日 SG 講演会 村尾隆介氏	
12 月	3 日 関西フィールドワーク(研修旅 行) 11 日 ポートフォリオ作成	5 日 後期探究④(2 時間) 14 日～15 日 関東フィールドワー ク、SGH 全国フォーラム参加	

1月	15日 発表会ガイダンス 18日 キャリアアップ講演会 29日 SG課題研究Iテーマ別発表会	5日 TOLIC コンソーシアム参加 16日 後期探究⑤ 23日 クラス別発表会(2時間)	
2月	19日 SG課題研究I全体発表会	5日 盛岡市議会参加 19日 ILC 成果交流会主催 25日 SG課題研究発表会	
3月		22-24日 SGH 甲子園参加 23日 東北地区SGHフォーラム参加	

※対象生徒数 1学年：7クラス 283名 2学年：6クラス 242名 3学年：6クラス 237名  
(表中に人数の特記がない場合、上記の学年毎生徒数全員を対象としたものである。)

## 7 目標の進捗状況、成果、評価

本校では事業の進捗・成果を評価するために、課題研究に関連する各種行事及び年度末に際しルーブリックによる自己評価・相互評価を行っている。また「目標設定シート」における調査項目に関連する事項について、全校を対象とした意識調査を1月に実施した。さらに技能別の英語能力の推移については全校受検を開始したGTEC for STUDENTを指標としている。本項では特に目標設定シートの調査項目に関する経年変化について述べる。

評価項目	H26	H27	H28	H29	H30	到達目標
(凡例)	全校 840名中	上段=SGH対象生徒≒760名中 下段=SGH対象外生徒≒80名中				
(1)自主的に社会貢献や自己研鑽に取り組む生徒数	82人	209人 30人	210人 26人	263人 30人	322人 24人	152人 8人
(2)自主的に留学または海外研修に行く生徒数	22人	40人 6人	36人 6人	25人 5人	45人 6人	30人 5人
(3)将来留学をしたり仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合	52%	54% 67%	47% 51%	46% 42%	49% 55%	70% 60%
(4)公的機関から表彰された生徒数、グローバルな社会またはビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における入賞者数	13人	43人 8人	50人 7人	103人 16人	68人 5人	15人 5人
(5)卒業時における生徒の4技能の総合的な英語力としてCEFRB1~B2レベルの生徒の割合	61%	63% 66%	16% 25%	12% 25%	12% 25%	70% 65%
(6)課題解決のための探究的な学習を好む生徒の割合	53%	68% 89%	68% 87%	70% 85%	71% 85%	70% 55%
(7)課題研究に関する国外の研修参加者数	10人	10人	10人	10人	12人	20人
(8)課題研究に関する国内の研修参加者数	320人	561人	563人	559人	565人	560人
(9)課題研究に関する連携を行う海外大学・高校等の数	0校	1校	6校	9校	4校	3校
(10)課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画した延べ人数	8人	17人	55人	36人	98人	32人

(11)課題研究に関して企業または国際機関等の外部人材が参画した延べ人数	3人	5人	92人	265人	421人	6人
(12)グローバルな社会またはビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数	29人	39人	70人	72人	45人	39人
(13)帰国・外国人生徒の受入れ者数（県内留学生を含む）	3人	9人	2人	7人	12人	14人
(14)先進校としての研究発表回数	2回	3回	6回	9回	13回	5回
(15)外国語によるホームページの整備状況	未整備	一部整備	一部整備	整備済	整備済	整備済
(16)国際的素養を高めるための講演会の実施回数	2回	5回	7回	8回	15回	5回

(1)自主的に社会貢献や自己研鑽に取り組む生徒数

2年続けて好ましい回答が大幅に増えてきている。全体に対し社会課題解決のためのアクションを促した結果、課題研究を通して主体的な態度が身についてきたと考える。「利他性」を研究開発の柱に掲げる本校にとって、何より好ましい成果の一つである。

(2)自主的に留学または海外研修に行く生徒数

一昨年、昨年と卒業した生徒3名が台湾の大学へ進学した。また、高校在学中に海外を体験したいという生徒が多く、各種の海外派遣事業に積極的に挑戦した。SGH 指定期間で、最も多くの生徒が海外研修を経験した。

(3)将来留学をしたり仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合

指定期間を通じてほぼ5割前後で推移している。本校の目標値からはまだまだ遠い状況であるが、実際に在学中に留学する生徒は増えてきている。全生徒の意識を高めることを、指定最終年の目標とした。

(4)公的機関から表彰された生徒数、グローバルな社会またはビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における入賞者数

昨年度と比べて減少したものの、目標値は大きく超えている。SGH の成果を活用した大会にも、昨年同様積極的にエントリーしている。

(5)卒業時における生徒の4技能の総合的な英語力としてCEFRB1～B2レベルの生徒の割合

昨年度と同様の結果となった。当初の目標を達成するには一層の努力が必要であり、ディベートの積極的な導入など、引き続き全校で英語指導の一層の充実をはかっていく。

(6)課題解決のための探究的な学習を好む生徒の割合

本校ではSGHの課題研究に取り組みながら、探究活動を好む意識が生徒の間でも定着してきている。また、研究成果を外部で発表することにより、自己肯定感を抱く生徒が増えてきた。

(7)課題研究に関する国外の研修参加者数

SGH 予算の縮小に伴い、生徒の研修費の負担軽減を図るとともに、SGH 指定終了後も継続的に海外研修を実施できる環境を模索した結果、今年度から研修地をボストンから台湾へ変更し、12名の生徒が参加した。海外研修の質を高めながら次年度も参加者数を目標に近づけていきたい。

(8)課題研究に関する国内の研修参加者数

1・2年生全員が一度は国内研修（フィールドワークを含む）に参加することを念頭に置き目標値を設定し、計画どおりに実施できている。本校の研修スタイルとして定着した。独自に県内外の複数箇所へ自主的に赴く研究グループもかなり増えてきており、延べ人数はかなりの増加が見られる。

(9)課題研究に関する連携を行う海外大学・高校等の数

本項目では、今年度の海外フィールドワークで実際に訪問し、生徒達がプレゼンテーションと議論及び交流を行なった台北の政治大学、政治大学附属高級中学、花蓮の東華大学、慈済大学附属高級中学の4機関を計上した。現地高校生及び大学生と、共通のグローバル課題をディスカッションした他、帰国後も情報交換するなど、一過性ではない継続的な関係を構築できた。

(10)課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画した延べ人数

前年度に比べ大幅に増加し、目標値を上回っている。今年度は生徒と岩手大学の学生及び留学生との交流の機会を多く設けたことにより数字が増えた。また、岩手医科大学、岩手大学、東北大学の教員が直接本校を訪れて指導していただいた回数も増えた。

(11)課題研究に関して企業または国際機関等の外部人材が参画した延べ人数

今年度も、課題研究において企業や公的機関等、外部の方に関わっていただいた。昨年度から新たに始めた盛岡市との共同プログラム、夏季休業中と関西フィールドワークで直接出向いて調査を行った際に、応じていただいた数値、及び2年生のアクション遂行上の提携先を中心に計上している。

(12)グローバルな社会またはビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数

昨年度よりは減少したものの、今年度も目標値を上回っており高い水準を維持している。マイプロジェクトアワード2018、SGHフォーラム、SGH甲子園、東北地区SGH課題研究発表フォーラム、英語ダイアログ大会、科学の甲子園などに応募した。

(13)帰国・外国人生徒の受入れ者数（県内留学生を含む）

留学生の受け入れを、今以上に増やす必要がある。特に台湾の高校生との関係では相互交流の観点からも積極的に増やす必要がある。グローバルに開かれた学校環境整備に努めたい。

(14)先進校としての研究発表回数

1, 2学年の文化祭、課題研究発表会、3年生の英語プレゼンテーションコンテスト、またSGHフォーラム、東北地区SGH課題研究発表フォーラム、ILC推進校成果交流会など計12回計上した（主なものに限る）。また、高校をはじめとする県内教育機関を対象に、いわてのキャリア教育実践研修講座、岩手県教育研究会において発表し、成果の普及と共有をはかった。

(15)外国語によるホームページの整備状況

昨年度からSG課題研究の内容だけでなく英語専用の学校ホームページを整備した。今後も生徒の課題研究の成果について英語を用いて公開し、国際的な発信力を一層高めていく予定である。

(16)国際的素養を高めるための講演会等の実施回数

学年単位で行った校内講演会として以下の15回を計上した。この他コースやグループ単位でも専門家からまとまった時間の講義や指導を受けている。

- |                                    |                    |
|------------------------------------|--------------------|
| 1年生：達増拓也氏（岩手県知事・元外交官）              | 澤口たまみ氏（作家・エッセイスト）  |
| 出野紀子氏（東北芸術工科大学講師）                  | 渡邊 洸氏（NPO 法人カタリバ）  |
| 村尾隆介氏（スターブランド株式会社）                 |                    |
| 小川宏満氏（内閣官房・東京オリンピックパラリンピック推進本部事務局） |                    |
| 2年生：齋野朝幸氏（岩手医科大学教授）                | 林篤志氏（ネクストコモンズ代表）   |
| 吉川博史氏（JETRO 盛岡所長）                  | 山崎友子氏（岩手大学名誉教授）    |
| 成田晋也氏（岩手大学教授）                      | 廣田淳氏（盛岡商工会議所参与）    |
| 南正昭氏（岩手大学教授）                       | 村尾隆介氏（スターブランド株式会社） |
| 3年生：村尾隆介氏（スターブランド株式会社）             |                    |

## 8 次年度以降の成果と課題および今後の展望

### (1) SG 課題研究

#### [課題]

- ・1年生で行った地方創生と課題研究Ⅱを無理に接続しようとするとうグローバル性が薄れる。また、アクションを重んじる余り、先行研究の調査等、学術研究の基礎的な所がおろそかになる。アクションが困難なテーマを敬遠するといった弊害も生じた。
- ・課題研究Ⅲでは課題研究Ⅰ・Ⅱで一旦完成した課題研究をもう一度焼き直す形の英語発表になっており、モチベーションの維持が難しく、研究やプレゼンテーションのブラッシュアップまでできなかった班が多くあった。また、英語発表の英語の部分のレベル確保について考慮する必要がある。

#### [改善点]

- ・大学での研究への橋渡しとして、英語で論文を書きプレゼンテーションすることの意義を、生徒が実感できるような手立てが必要である。
- ・課題研究Ⅰ・Ⅱは外部の協力者も増え、年々研究内容も充実しているものの、その分の外部での発表の場も増え、その指導に当たっては担当者の負担が増す一方である。指定期間終了も迫っており、今までのシステムでは対応しきれなくなる。指定終了後は正副担任を指導教官とし、内容・メンバーについても相当度自由に設定できるゼミ形式に移行することも検討したい。特に対外的な発表活動については委員会や部活等への措置を行い、予算・人員を確保しないと継続は非常に困難である。
- ・今年度は本校が掲げる6つの課題研究のカテゴリーのうち、「グローバルな知の拠点の創造へ向けた探究」の中でILCを題材として、SSH校を含む6校との成果交流会を行なったが、来年度もこの成果交流会を継続する。

### (2) 海外フィールドワーク

#### [課題]

- ・特に英語を母語としない国での実施なので、対象を吟味しないと英語でプレゼンテーションする意義がなくなってしまう。
- ・今度は受け入れ側として、国際交流に積極的にかかわる必要があると考える。また、台湾の協力関係校とは姉妹校関係への発展を考えていくべき。

#### [改善点]

- ・慈済大附属高級中学との交流を深化させるべき。政治大については研究室との連携を深め、そこだけで完結する独自のプログラムを作っていく。1、2年の課題研究と連動させる仕掛けが必要。
- ・SG 海外フィールドワークにとどまらず、今年度は白雲の翼でも、生徒達がSG 課題研究で取り組んできた課題を深める機会として、イギリスの地方都市及びロンドンという大都会でもフィールドワークを実施するよう、計画を立てている。

### (3) 授業のSGH化

#### [課題]

- ・グローバル社会で求められる交渉力や傾聴力については、ディベートなどの評価基準を洗練していくことによって定量的に評価することができてきている。しかしながら、協働性を数値化するには、今のところ授業者の観察に依存するところが大きいため、観察における客観的な評価指標を設ける必要性を感じている。

#### [改善点]

- ・SGH 事業を通して生まれた留学生との日常的交流を継続し、その成果を日々の普通教科の指導にも還元していく。

- ・SGH 化を、グローバル人材の育成と考えたとき、大学や社会での研究および実践への準備という面をもっと強調していくべき。

#### (4) 英語の活用

##### [課題]

- ・模擬国連ディスカッションドラマを、今年度も台本を事前に作成して、ドラマをパフォーマンスとして実施したが、可能であれば台本無しで、模擬国連を実施したい。

##### [展望]

- ・現1年生は次年度、模擬国連ディスカッションドラマを早めに導入し、最後の学期に台本無しの模擬国連に挑戦したい。

#### (5) カリキュラム開発

##### [課題]

- ・時数不足。現行時数の中では、一定以上の水準を求めると消化し切れない。各自が自分の時間の中で行うには、強い動機付けが必要。
- ・指定期間満了後どうすべきか、全体でより確固たるコンセンサスを形成する必要がある。

##### [改善点]

- ・31年度のできるだけ早い段階で、校務運営会議などの場でポストSGHの総合学習のあり方について方向性を確認する。規模縮小して継続するのであれば、当該年度内に必要不可欠な事業項目をリストアップし、年度内に予算措置について見通しをつける必要がある。

#### (6) 進路

##### [課題]

- ・ポートフォリオの様式を洗練する。
- ・自分の進路実現とSG課題研究の連動については、一層の改善の余地がある。
- ・3年次では、発表会が主な動機づけである。研究活動そのものが進路と結びつくのは1、2年次までである。進路となんらかの形でつなげることが課題。

##### [展望]

- ・来年度でSGHの指定期間は終了する。本校が掲げた6つのテーマにしばられることなく、自分の進路研究と連動したテーマ設定をさせる必要がある。

#### 【担当者】

担当課	SGH推進課	TEL	019-623-4491
氏名	佐藤 幸久	FAX	019-654-4227
職名	教諭	e-mail	ptf2-yukihisa-sato@iwate-ed.jp

## I SG 課題研究 I

### 1 はじめに

今年度の活動の重点は、昨年度から始めた盛岡市との連携による地方創生プログラムと関西フィールドワークを通じてアクションプランを措定、実践に繋げるという大きな枠組みを踏襲しながら、マイナーチェンジを試みて改善の方策を探ることが一点。また、次年度本格的な課題研究に臨む際、アクションをふんだんに盛り込んだ形で\*PDCA サイクルを何度も回せるように、今年度の内からアクションの重要性和アクションプランの具体化に関する生徒の意識を高める点、そして効果的に生徒の活動を記録できるポートフォリオの様式の開発と運用の3点に置いた。

\*PDCA サイクル: Plan (計画) → Do (実行) → Check (評価) → Action (改善) の4段階を繰り返すことによって、業務を継続的に改善する手法。

### 2 活動報告

SG 課題研究 I は1学年が総合的な学習の時間(以下、「総合学習」)を活用して、1年間をとおして取り組む探究的学習である。3年間にわたり展開するSG 課題研究の導入に当たる本取組では、とりわけ「課題の発見」を重視し、本校が所在する岩手県というローカルな視座からグローバル課題をめざし、それに関わる社会人と交わることを通じ、課題発見から調査、そして解決策のプレゼンテーションという一連の探究のメソッドを習得することを目的としている。

昨年度、取り組み内容を抜本的に見直し、以下のような流れを新しい枠組みとして再構築している。

#### (1) 地方創生プログラム

[フェイズ1] 平成30年5月29日

地方創生をテーマとした探究学習への導入として、基調講演とトークセッションを行い、今後1年間かけて展開する探究学習のレディネス形成をはかった。

まずコミュニティ・デザインを専門とする東北芸術工科大学講師の出野紀子氏より、日本や地域が抱える課題に対して視点を深めていただき、「地方創生」に取り組む高校生の具体的な実践事例をご紹介いただいた。

また、トークセッションでは昨年度フードバンク

でのボランティアに参加した先輩の発表を聴いた後、OBの高橋和氣さんや菊地類さんからキャリア形成や課題研究に取り組む意義、自ら仮説を立て検証していく中で育まれるものが社会に出た後にどれくらい意義深いのか、といった話を、ご自身の体験を通じてお話いただいた。

出野さんの円滑で建設的な進行のおかげで、1年生の生徒達からも言葉足らずで拙いながら、視点の鋭い良い質問がたくさん生まれ、会場は大きな盛り上がりを見せた。

特に質疑応答の中で2年生の先輩から出た言葉、「最初は人並みに課題研究をこなそうと思っていた。けれど実際にフードバンクでボランティアをした後、周りとはひと味違うものを作りたいと思うようになった。それから、SG 課題研究が面白いと感じるようになった。」という言葉は、盛岡市の抱える課題の一つを「自分事」として捉え、その解決に向けて自分なりに行動していることへの誇りや、主体性、積極性が感じられ、1年生の生徒達にとって素晴らしいロールモデルとなった。

[フェイズ2] 平成30年6月5日

続くフェイズ2では、盛岡市を拠点として「地方創生」に向けた様々な取組に実際に携わられている社会人の方々をゲストスピーカーとしてお迎えし、8つのテーマからなる分科会を開催した。人選や内容に係るコーディネイトは盛岡市による。生徒は1人当たり2つのテーマを選びミニ講義を聴講する。昨年度は生徒が関心を抱くテーマを選んで聴講したが、今年度は無自覚な関心を掘り起こしたいという意図から、機械的に各生徒にミニ講義をあてがった。

開講したテーマは以下のとおりである。

結婚・子育て支援 / 子どもの貧困対策 / 働き方改革 / 仕事とキャリア形成 / 食と農の連携 / 盛岡ブランド・交流人口対策 / 移住・定住促進 / 共生社会と国際化社会

「仕事とキャリア形成」は昨年度「企業の魅力発信」というテーマであった。同様に「共生社会と国際化社会」は昨年度「地域福祉と共生社会」であった。コーディネーターを務めてくださっている盛岡市の佐藤俊治さんと相談し、前者については「魅力発信」の側面だけにとらわれず、広く職業観を形成

してもらおうとテーマを拡大した。また後者についても、「福祉」という限定をはずし、幅広く現在の社会を俯瞰できるようなテーマ設定とした。

分科会では、講師の方々の熱意のこもった講義のおかげで、生徒達は盛岡市が抱える課題を共有し、高校生として自分にできることはないか、と主体的に考えるきっかけを得られた。しかしながら、振り返りを行った際「機械的にミニ講義をあてがわれたことが、多少モチベーションを下げることにつながった」と生徒から正直な言葉があった。これは大きな反省点として認識しておかなくてはならない。探究的な活動は、どんな活動であっても、生徒の内在的な関心を元に始めなくては、推進力が生まれないことを痛感した。

今年度ミニ講義を受け持っていたいただいたのは次に掲げる方々である。

一般社団法人日本結婚支援協会（田口智之さん） / 特定非営利活動法人いなほ（佐藤昌幸さん） / 特定非営利法人フードバンクいわて（阿部知幸さん） / 一般社団法人子どものエンパワメントいわて（松岡あゆみさん） / 株式会社岩手日報社（上中美穂さん） / 株式会社ブイキューブ（菊地類さん） / 富士通株式会社 エバンジェリスト弓田光正さん / ジョブカフェいわて プロジェクトマネージャー 牛崎志緒さん / ふじむら農園（藤村真哉さん） / 株式会社いわて若江農園（若江俊英さん） / もりおかワカものプロジェクト（皆川麻梨子さん） / 東家・映画の力プロジェクト・紺屋町かいわい町並み協議会等（高橋大さん） / 岩手移住計画、岩手×東京会議主宰（高橋和氣さん） / SoRa Stars 株式会社（山崎智樹さん） / フキデチョウ文庫（沼田雅充さん） / 岩手と世界をつなぐコミュニティ” Bridge”主宰（櫛引亮さん）

[フェイズ3] 平成30年6月12日

本日は各教室で、前回ミニ講義で学んだ内容を共有し、その後で班毎に夏季フィールドワークで取り扱いたいテーマの一つにしぼる話し合いを行った。

機械的にミニ講義を各自にあてがったため、この共有作業は盛り上がった。元々聴きたいと思っていた内容を聴けなかった班員のために、ミニ講義の内容を紹介する生徒は責任をもって伝えなくてはならない。時折質問も出され、深い学びが生まれた。

フェイズ2と3を通じて、実際に「地方創生」に向けた取組に関わっている方々からお話を聞くことで、現在の盛岡が抱える課題が浮き彫りとなった。その解決策を模索すべく、夏季休業期間を利用して続くフェイズ4に当たるフィールドワークを行う運びとなる。

[フェイズ4] 夏季休業中

フェイズ2・3で取り扱った8つのテーマの中から、グループ毎に最も関心を持ったものを一つ抽出し、班毎に独自に設定した課題を解決すべく、夏季休業中にフィールドワークを行った。

昨年度同様、フィールドワークでは全てのカテゴリに通底する基幹テーマとして「地域創生」を掲げたほか、調査先の斡旋と、内容の調整を盛岡市に担当していただいた。事前に先行研究調査として、自分達が選んだテーマについて、昨年度のSG課題研究Iで先輩達が研究した内容を読み、発展深化させたい項目を精選していたため、フィールドワーク先でのインタビューにも熱が入った模様。訪問先は以下の通り。

放課後児童クラブ サンガキッズ山岸 / 有限会社サンファーム / annecco. / ふるさとアンバサダーキッズ / IGRいわて銀河鉄道株式会社 / NPO法人未来図書館 / SoRa Stars / 赤坂さんさ / オークフィールド八幡平 / オガグラフィックス / 子育てあんしん課 / 子ども青少年課 / さわや書店 / ジョブカフェいわて / 特定非営利法人いなほ / フキデチョウ文庫 / ふじむら農園 / まちの編集室 / 盛岡生活文化研究室 / もりおかワカものプロジェクト / わらしゃん井（子ども食堂） / 安比高原ふるさと倶楽部 / 一般社団法人ドリームプロジェクト / 一般社団法人子どものエンパワメントいわて / 一般社団法人日本結婚支援協会 / 株式会社アイカムス・ラボ / 株式会社いわて若江農園 / 株式会社ブイキューブ働き方改革推進室長 / 株式会社岩手日報社 / 株式会社恵 PCM / 岩手移住計画 / 社会福祉法人盛岡市社協福祉協議会 / 盛岡夜回りグループ - step - / 地域おこし協力隊 / 東家・映画の力プロジェクト・紺屋町かいわい町並み協議会 / 特定非営利法人インクルいわて / 特定非営利法人フードバンクいわて



[フェイズ1~4のまとめ] 平成30年10月2日

この日は地方創生プログラムや夏季フィールドワークでお世話になった方々をお招きし、地方創生プログラムから夏季フィールドワークにわたるこれまでの取り組みを総括するため、中間まとめ発表会を行った。テーマ別に教室に分かれ、夏季フィールドワークの成果をまとめたポスターを用いてプレゼンテーションを行い、ゲストからは主に関西フィールドワークに向けた指導助言をいただいた。

報告した内容は、夏季FWの概要、夏季FWで気付いたこと、関西FWの方針の三点。

ゲストのコメントによって、生徒達はこれまでの探究活動を批判的に振り返り、また関西フィールドワークに向けてより効果的、実践的な計画を練るための材料を得られた様子で、大きな学びの機会となった。お招きしたゲストは以下の通り。

フードバンク岩手 阿部知幸さん、昆志織さん / ジョブカフェいわて 牛崎志緒さん、高橋牧子さん / 岩手移住計画 高橋和氣さん / ソラカフェ 山崎智樹さん / ふるさとアンバサダーキッズ 安部由利子さん / もりおかワカものプロジェクト 皆川麻梨子さん / 盛岡生活文化研究会 大森不二夫さん

同日夜には、盛岡市と盛岡第一高校連携による地方創生に向けた課題探究型教育プログラムについて、成果と課題を明らかにし、今後につなげるための交流会が開催された。市職員や、これまでのプログラムに参画していただいた方々約10名と、本校1学年で有志の生徒約20名が、プログラムの率直な感想と、改善に向けた提案について議論した。予定を大きく超過し、話し合いは2時間にもわたったが、大人と率直に意見を言い合う環境は生徒達には新鮮だったようで、大いに盛り上がった。学校と地域社会が接続するまたとない機会になった。

## (2) 関西フィールドワーク

平成30年11月30日(金)から4日(火)にかけて、1学年が広島及び関西地区をフィールドとする研修旅行を実施した。昨年度から、これまで盛岡市と連携して取り組んできた「地方創生」をテーマとしたフィールドワークを、関西地方においても実施している。

事前学習として、生徒達は県内で行った夏季フィールドワークの成果と課題を踏まえ、昨年度の先行研究に目を通した上で、適切な訪問先を検討し、調査受入の可否を打診した。多くの機関や事業所、専門家の方々に快くご協力いただき、充実したフィールドワークを遂行することができた。

新規に開拓したフィールドもあったが、昨年度もお世話になったところも多く、打診中に先方がインタビュー内容について「昨年度から大きく変わったわけではないので、新しいことは言えないと思いますが」と心配される声も聞かれた。しかしながら、生徒達にとっては先方との初めての出会い、お話の受け止め方や考察の仕方は、聞き手によって大きく異なる。その点をお伝えして、承諾いただいた。

大都市圏を数多く有する関西地方において、関連する事例について調査を行うことで、岩手県内における調査を通じて模索した地方創生に関わるアクションプランについて相対化し、より地方に寄り添った提言をする手がかりを得られたようだ。また、関西地方で先進的に行われているアクションプランについても知ることができ、生徒達はそれを地方に適合させた形で実践するアイデアも数多くいただいた。

なお、関西フィールドワークは夏季フィールドワークと同じメンバーからなる70のグループで行い、下記の50の受入先にご協力いただいた。ここに訪問先を記して、お礼にかえたい。

株式会社bit / 和みダイニングD-Light / 西日本旅客鉄道京都支社 / 京の食文化ミュージアムあじわい館 / 嵐山子ども食堂 / ヴォイスアカデミア京都 / 大阪市教育委員会 / オムロン株式会社 / 勸修寺観光農園 / ぎおん徳屋 / 京セラ株式会社 / 京都府健康福祉部子ども総合対策課きょうと婚活支援センター / 京都市子ども若者はぐくみ局子ども若者未来部育成推進課 / 京都市子ども若者はぐくみ局子ども若者未来部子ども家庭支援課 / 京都市移住サポートセンター / 公益社団法人京都市観光協会 / 京都市山王児童館 / 京都市社会福祉協議会 / 京都市行政財局人事部人事課 / 京都市ソーシャルイノベーション研究所 / 京都市文化市民局共同参画社会推進部男女共同参画推進課 / 京都市都市計画局都市計画部都市計画課 / 京都市福祉ボランティアセンター / 京都市南青少年活動センター /

京都府農林水産部経営支援・担い手育成課 / 京都府農業会議農村創生部移住促進課 / 京都府健康福祉部家庭支援課 / 京都府健康福祉部子ども総合対策課 / 京都府商工労働観光部観光政策課 / 京都府農林水産部食の安心安全推進課 / 京野菜レストラン梅小路公園 / じねんと市場 / 株式会社島津製作所 / 辻利兵衛本店 / 株式会社ディアライブ / 有限会社昇苑くみひも / 京都八百一本館 / 京のふるさと産品協会 / 誠光社 / 抹茶館京都河原町店 / みのる食堂高島屋京都 / 宮脇賣扇庵 / 特定非営利活動法人山科醍醐こどものひろば / 株式会社リーフ・パブリケーションズ / ローム株式会社 / 株式会社ロマンライフ / 甘春堂東店 / 亀屋良長

### (3) SG 講演会 (プレゼンテーションについて)

平成 30 年 11 月 15 日 (水) にプレゼンテーションに関する 1・2 年生対象に講演会を催した。講師には、過去 2 回、3 年生が SG 課題研究英語発表会に臨むにあたり、英語プレゼンテーションに関する講演をお願いしてきた、希望郷いわて文化大使の村尾隆介様、原三由紀様 (スターブランド株式会社) をお迎えした。

この講演会は、昨年度卒業生が残した言葉、「もっと早くに村尾さんの講演を聴きたかった。そうすれば、これまでの日本語のプレゼンテーションにも活かすことができたはずなのに。」を受けて実現したものである。また、昨年度の本項目にある反省「一方前年度までも課題として挙げられていたプレゼンテーション力については、依然不得手と捉える生徒の割合が高い。… 3 年生の SG 課題研究Ⅲでは、プロによる本物のプレゼンテーションを示すことで、生徒たちのプレゼンテーションに対する認識が大きく変容した。同様の仕掛けを早い段階から設けることを検討していきたい」への対策として実験的に行った。

早い学年で村尾さんとの邂逅を実現するにあたって設定した目的は以下の通り。

(i) SG 課題研究を進める上では主体的に課題を捉え、革新的なアイデアを模索し、実際に行動に移す実践力が求められる。多彩な経歴を持ち、数多くの企業や地方自治体のブランディングに貢献されてきた村尾氏から、岩手をグローバル化するためにどのような実

践を行っているのか紹介していただき、生徒達が課題研究に取り組む動機付けを高めていただく。

(ii) 年度末に実施予定の各学年の SG 課題研究発表会および ILC 推進モデル校交流会における成果発表に向けて、村尾氏にプレゼンテーションに関してご講演いただく。

当日は各学年 50 分ずつと時間が短いため、これまで 3 年生向けに 100 分で講演いただいた内容を、村尾さんにエッセンスを抽出していただいた。講演していただいた内容は以下の通り。

- 1) プレゼンとは?
- 2) スライドの作り方 (写真を使う、フォント)
- 3) 心を揺さぶる話し方 (数字のトリビア、ジェスチャー)
- 4) 岩手や盛岡を世界にプレゼン (ピクトグラム)

教えていただいたプレゼンテーションのティップスだけでなく、生徒一人ひとりの中にグローバル・リーダーに繋がる、大事なものを芽生えさせていただいた。

### (4) SG 課題研究 I 発表会

平成 31 年 1 月 29 日 (火) 5, 6 校時にテーマ別発表会及び代表選考会を実施。昨年度はクラス別に実施したが、今回は夏季フィールドワークから関西フィールドワークを経て得られた知見をもとに、アクションプランを提案するという発表内容の性質上、テーマを同じくする他の班の発表を聴き評価する機会、また各班が提案したアクションプランに対するゲストの方々の指導助言も自らのアクションプランに対するフィードバックとして共有できるという利点に鑑み、テーマ別に会場を設定し、発表を行った。

今回はこれまで地方創生プログラムや夏季フィールドワークでお世話になった盛岡市内の方々をゲストにお迎えした。また、東日本大震災をきっかけに、困難な環境にいる子ども達に学習支援を長年行い、現在は高校生が地域の課題に取り組む「マイプロジェクト」を手がけ、高校生の探究活動を支えリードしている NPO 法人カタリバさんの協力を得て、アクションプランのブラッシュアップに関するワークショップも開催した。

前半はテーマ別に 9 つの会場に分かれ、各班がアクションプランを発表した。ゲストの皆さんやカタ

リバの皆さんにも各会場に分かれていただき、各班の提案に対して、適切にフィードバックしていただいた。

先日開催したプレゼンテーションに関する講演会で、村尾さんから教えていただいたプレゼンテーションのティップスに、生徒達は一年生ながら懸命に挑戦していた。写真やユーモアがふんだんに盛り込まれたスライド資料はもちろんのこと、聴衆を惹きつけるように問かけやジェスチャーを取り入れたデリバリーは、過去数年間の一年生の発表の中では白眉とも言えるものだった。

後半は白聖ホールに全員が集合し、カタリバさんに進行をお譲りし、アクションプランを洗練するためのワークショップを開催した。カタリバの鈴木さんの円滑な進行のもと、ワークショップは盛り上がりを見せた。

最初は、弘前医療福祉大学短期大学部に所属し、来年度から地元の大船渡地区消防組合で救急救命士として勤務されることが決まっている橋本陸さんから短い講演をいただいた。橋本さんは高校生の時に心肺蘇生法の講習会を地元大船渡市で何度も開催し、救急救命のメソッドを地域に広めるプロジェクトを行った、マイプロジェクトOBである。そのプロジェクトに携わったきっかけは、橋本さんのおばあさんが突如意識を失ってしまった際、適切な処置をできなかったというつらい経験に端を発していること。課題研究 [マイプロジェクト] とは、自分がやりたいと思うことをやるべきということ。思いっきり取り組むことで、課題研究がどんどん楽しくなっていくこと。その一連の過程が、自分自身の進路意識を高めるだけでなく、周囲を巻き込み協働する大きなうねりとなって、地域を動かしていくことを教えていただいた。

その後は鈴木さんにファシリテーションしていただき、先ほどの発表会でゲストの皆さんにいただいた指導助言をもとに、班毎にアクションプランをブラッシュアップする話し合いを行った。カタリバの皆さんにはその話し合いに自由に混ざっていただき、良いアイデアには承認の後押しを、具体性を欠くものには助言をいただいた。生徒達は今春取り組むアクションプランをしっかりと肉付けし、明確な方針を得られたようだ。

今回ご協力いただいたのは、以下に掲げる方々です。この場をおかりして、心からお礼申し上げます。

NP0 法人いなほ 佐藤昌幸さん / ジョブカフェ岩手  
牛崎志緒さん / 岩手移住計画 高橋和氣さん / ソラカフェ  
山崎智樹さん / もりおかワカものプロジェクト  
皆川麻梨子さん / ふるさとアンバサダーキッズ  
安部由利子さん / 盛岡生活文化研究会  
大森不二夫さん / 盛岡市のみなさん / 認定特定非営利活動法人カタリバの皆さん

今回8つのテーマとそれに収まらない「その他」の計9つのテーマに別れ発表会を実施したが、下記ルーブリックに基づきそれをピア評価（生徒同士で相互に評価を行うこと）し、テーマ毎の代表9班が選考された。

平成31年2月19日（火）6, 7校時には、代表班により成果の共有をはかる、全体発表会を実施した。ここでも岩手県教育委員会や保護者の方々に一年間の成果を見ていただき、一年間の活動の総決算とした。

発表順及びテーマは、以下の通り。

テーマ	班名	タイトル
結婚・子育て	141	子育てサービスの需要増加
働き方改革	145	京セラから学ぶ働き方改革とは
食と農の連携	175	京都の農業と京都ラーメンの関連性
仕事とキャリア	166	魅力発信についての研究
子どもの貧困	133	子どもの貧困とその対策
盛岡ブランドの形成	177	和菓子の研究
移住・定住促進	129	地域活性化 ～移住定住者を増やすには～
共生・国際化社会	163	共生の矯正
その他	162	企業の魅力発信

### 評価基準（ルーブリック）

※1 基準 A ~ F は、他の班の発表を評価する際に使用します。良い点・改善点をコメント欄に記入しましょう。

※1 基準 A ~ F は、他の班の発表を評価する際に使用します。良い点・改善点をコメント欄に記入しましょう。

※2 基準 G, H は、自己評価に使用します。

基準	極めて良好である	概ね良好である	改善の余地がある	一層の努力を要する
点数	4	3	2	1
A [課題発見力] テーマ設定	17SDGs*に関連しており、具体的なテーマ設定である。また、独自性や先進性が感じられる。	17SDGsに関連しており、具体的なテーマ設定である。しかし、既存研究にありそう。	17SDGsに関連しているが、テーマが概論的である。	17SDGsに無関係だ。
B [探究の深度 1] 先行研究・行動力	指導者や専門機関、現地等を訪れ、調査活動を効果的に実施できた。	アンケートやインタビューといった調査活動を、効果的に実施できた。	先行研究を進展させている。	インターネットや図書室で得られる先行研究を踏まえている。
C [探究の深度 2] 論理的発展性	十分な証拠を挙げ、適切に情報を分析し、その分析結果を総合できている。	十分な証拠を挙げ、適切に情報を分析できているが、分析結果を総合できていない。	証拠を挙げているが、適切に情報が分類されず、単発の証拠として使われている。	主張を述べるだけで、根拠がない。
D [探究の深度 3] 計画性	フィールドワーク先がテーマと適合している。また、その成果を複数想定し、相対的に考えられている。	フィールドワーク先がテーマと適合している。しかし、その成果を一つしか想定していない。	フィールドワーク先がテーマと適合している。しかし、インタビューを行うだけで、その成果を想定していない。	そのテーマでなぜそこに行くのか、フィールドワークを行う意義が感じられない。
E [発信力 1] スライド作成	右に加えて、効果的に聞き手を惹きつける工夫をスライドに凝らしている。	右に加えて、効果的に図・表が用いられている。	スライドがシンプルでわかりやすく、構成も整理されている。	スライドが文字ばかりでわかりにくく、構成も整理されていない。
F [発信力 2] デリバリー	右に加えて、質問を投げかけるなど、聞き手を惹きつける工夫を発表に凝らしている。	右に加えて、効果的にジェスチャーやボディラングエージを用いている。	聞き手の方を見て発表しており、声量も充分である。	ただ原稿を読み上げており、声量も不充分である。
G [傾聴・共感] 班員との共感	発表を理解できた。 共感的に理解できた。 批判的に考えられた。	発表を理解できた。 共感的に理解できた。 他の可能性や改善点を考えながら聴いていない。	発表を理解できた。 当事者意識「自分だったらこうする、こう思う」がない。	聴いていない。 理解していない。
H [協働性] 関心・意欲・態度	全員に役割があり、全員が思考し、発言をしている。誰が代表になっても発表が可能だ。	全員に役割があり、全員が思考し、発言をしている。しかし、分担した仕事以外ではできない。	全員に役割がある。思考や発言をしない班員もいたが、活動に参加するよう促した。	一部の班員のみで作業を行い、消極的な班員は面倒なので放置した。

\*17SDGs: 2015年に国連で採択された『我々の世界を変革する: 持続可能な開発のための2030アジェンダ』で、具体的な行動指針として示された17の「持続可能な開発目標 (Sustainable Development Goals, SDGs)」

1. 貧困を終わらせる	7. 持続可能な現代的エネルギー	13. 気候変動対策
2. 飢餓を終わらせる	8. 持続可能な雇用と経済成長	14. 海洋の持続可能な利用
3. 健康的な生活	9. インフラストラクチャー構築、イノベーション	15. 陸地の持続可能な利用
4. 質の高い教育	10. 不平等の是正	16. 平和と正義
5. ジェンダー平等	11. 持続可能な都市および人間居住	17. 持続可能な開発のための実施手段とグローバル・パートナーシップ
6. 水と衛生の利用と管理	12. 持続可能な生産と消費	

### 3 成果と課題

「1 はじめに」で掲げた3点に依って、今年度の活動を振り返る。

「1. 昨年度来の大きな枠組みを踏襲しながら、マイナーチェンジを試みて改善の方策を練ること」については、プレゼンテーションに関しては大きな改善を見ることができた。これは定量的に見ても正しいと言える。テーマ別発表会におけるピア評価の内、ルーブリックの項目 [E 発信力 1 スライド作成] では全ての班の平均得点が最高4点の内3.5点と非常に高く、[F 発信力 2 デリバリー] でも3.18点と高得点となっている。

テーマ別発表会及び選考会でのピア評価の結果  
(全ての班の平均点、4点満点)

A【課題発見力】	B【先行研究・行動力】	C【論理的発展性】	D【計画性】	E【スライド作成】	F【デリバリー】
3.6	3.5	3.5	3.5	3.5	3.2

しかしながら、「踏襲」という言葉が持つ怖さを知った一年間でもある。中間反省の際に生徒から直接言われた言葉の中に、それが端的に示されている。今年度、地方創生プログラムのフェイズ3と4の合間、夏季フィールドワークの計画を練る場面で、昨

年度先輩が作成した夏季フィールドワーク報告書を見せる機会を設けた。こちらの意図としては、昨年度と似たようなテーマ設定をする場合は、先輩の達成度を知り、そこを出発点にして研究を深めてもらいたい、というものであったが、実際の反応の中には、次のようなものもあった。「先輩の成果物を先行研究調査として見たときに、ここまでやればいいのね、と正直思った。」まだまだ探究活動に対する動機付けが不十分な段階で、生徒自身がこうした活動の面白さを感じる以前、むしろ協働的な活動に対して「面倒だ」といったネガティブな感情やピアプレッシャーの方が大きい段階で、一つの達成目標を示すことが、徒となってしまった点である。今年度は、ピアプレッシャーの弊害をうまく取り除くことができなかったというのが大きな反省である。次年度は班を解体し、むしろ個人での探究活動も認めることで、解決の糸口としたい。また、テーマについても自由度を高め、より主体的に取り組めるような環境作りを心がけたい。

「2. 次年度PDCAサイクルを何度も回せるように、今年度の内からアクションの重要性とアクションプランの具体化について意識を高める」については、年度末にカタリバさんの協力を得ることで、かなりの部分達成できたのではないだろうか。今年度は盛岡市や岩手県が抱える地域課題を、それに懸命に取り組む大人達の傍らに立って、高校生なりにできることを考え、実践してみるという過程を通じて、探究のイロハ、アクションのイロハを心身に浸透させることが大きな目的の一つだった。取り扱った地域課題はいずれも難しいテーマだったため、うまく自分事にすることができなかった生徒も、たくさんいた。しかしながら、この一年で身につけた探究と実践のメソッドは、次年度自らテーマを見つけた時こそ発揮されるものである。テーマ別発表会で実施したアクションプランをブラッシュアップするワークショップを通じて、今春の生徒達のアクションプラン実践と、その振り返りが次年度の最初ではとても重要になる。

次に「3. 効果的に生徒の活動を記録できるポートフォリオの様式の試作と実践」について述べる。まずはポートフォリオの定義を共有しよう。

「ポートフォリオとは、書類入れやファイルを意

味する言葉である。総合的な学習の評価方法として、近年注目されている外来語である。… ポートフォリオ評価は、単なる記録ではなく評価なので、学習の過程で創出されたものすべてを保存するのではないとの考え方が一般的である。すなわち、残す意味があるものを選んで子ども自身の目の前でファイルすること… 何を残して学習成果を最大限にアピールするか、という意味で、証券ポートフォリオ（連動しない証券の組み合わせ）と底通する用法である。」

鈴木克明（2000）「中学校での総合的な学習の時間を考える（3）：総合的な学習の時間をどう評価するか～ポートフォリオ、フィードバック、アカウントビリティ～」『放送教育』2000年6月号（第54巻6号）

生徒の活動を全て記録するには膨大な容量が必要であり、またそれを進路指導に活用する際にはその膨大な記録を整理する必要がある。今年度は、成果物として残る「夏季FW 報告書」と「関西FW 報告書」の二つを基軸とし、ポートフォリオはその二つの成果物の間を埋める、探究活動を通じて得られた生徒

自身の「気づき」を文章化したものと捉えて、様式を開発した。

試作にあたって留意したのは以下の点である。

- ・成果物とポートフォリオを通読した後、第三者でも当該生徒の一年間の探究活動の流れと成長のストーリーを容易に理解できるか。
- ・生徒の「気づき」が「見える化」されているか。
- ・空欄を埋めれば、勝手にPDCAサイクルが回るように。
- ・3年次、調査書作成の際に加工しやすいよう、電子データで保存したい。

こうしてできあがったのが、次の様式である。

平成30年度SG課題研究Iポートフォリオ #1（様式）

班名		
班員		
テーマ		
1.研究仮説 草案 (FWに赴く前、 どう考えていたか)	原因	
	問題	
	実書	
	対策	
2.夏季FWで 得られた知見	記述すべき項目	私達は自分達の研究仮説を検証するために、平成30年度夏季休業中の(1).....
	1) 日時とFW先	へ夏季FWに赴いた。そこで(2)..... さんから実際にお話を伺いと、
	2) Interviewee	(3) 及び(4).....
	3) 研究仮説の 含っていた点	.....
	4) 研究仮説の 誤っていた点(気づき)	と考えていたが、それだけでは根本的な解決にならないと気付いた。(5).....
	5) 改善の方針	ことに対して、私達が高校生としてできることをやってみようと考えようになった。夏季FWを踏まえて、私達は「研究仮説」を以下のように作り直した。12月の研修旅行では「研究仮説改訂版1」を検証するため、(6).....
3.研究仮説 改訂版1	原因	
	問題	
	実書	
	対策	

前記様式に記載例を入力したものを生徒に提示した。

平成 30 年度 SG 課題研究 I ポートフォリオ #1 (例)

班名		101
班員		1142 千條 惇 1242 酒井 典生 1342 小野塚 正樹 1442 日當 貴志 1542 椛本 康平
テーマ		盛岡市内の貧困家庭の子どもを救う
1.研究仮説 草案 (FWに赴く前、 どう考えていたか)	原因	盛岡市内でシングルマザーが増加している。
	問題	盛岡市内で貧困家庭が増加している。
	実害	盛岡市内の貧困家庭で、たくさん子ども達が十分な食事を得られていない。
	対策	フードバンクでボランティアをする。
2.夏季 FW で 得られた知見	記述すべき項目	私達は自分達の研究仮説を検証するために、平成 30 年度夏季休業中の (1) 8 月 5 日 (日) 15:00 にフードバンクへ夏季 FW に赴いた。そこで (2) 代表の阿部知幸さんから実際にお話を伺うと、(3) 盛岡市内で貧困家庭が増加している「原因」は、自分達が考えていたようにシングルマザーが増えているだけでなく、(4) 実は三世帯家庭でも貧困家庭になりうることを知った。また、一見すると貧困家庭の子どもには見えないような子ども達も、十分に食べられていないという事実を知った。また、阿部さんは、フードバンクの存在がまだまだ認知されていないこと、貧困家庭の子ども達も家族も、助けを求められないことが大きな原因だと教えてくれた。
1) 日時と FW 先		
2) Interviewee		
3) 研究仮説の合っていた点		
4) 研究仮説の誤っていた点 (気付き)		私達がボランティア活動をすることで、少しでも多くの子どもに食事を提供できれば解決に繋がると思っていたが、それだけでは根本的な解決にならないと気付いた。(5) フードバンクの認知度を上げる
5) 改善の方針		ことに対して、私達が高校生としてできることをやってみようと考えようになった。夏季 FW を踏まえて、私達は「研究仮説」を以下のように作り直した。12 月の研修旅行では「研究仮説改訂版 1」を検証するため、(6) 京都市内のフードバンクを訪問し、お話を伺う中でフードバンク岩手が抱える課題との共通点と相違点を見つけ出し、汎用性の高い解決策を考えるのはもちろん、地域的な特性を踏まえた上で盛岡で認知度を上げるのにより効果的な方法は何かを提案するきっかけとした。
6) 関西 FW の方針		
3.研究仮説 改訂版 1	原因	フードバンクが認知されていない。
	問題	フードバンクに助けを求めることができない。
	実害	盛岡市内の貧困家庭で、たくさん子ども達が十分な食事を得られていない。
	対策	フードバンクの認知度を上げる活動を行う。e.g. フライヤーを作る。ボランティアの体験談を他校の友人に伝える。

以下、ポートフォリオ#1 (地方創生プログラム～夏季 FW)、夏季フィールドワーク報告書、ポートフォリオ#2 (夏季 FW～関西 FW)、関西フィールドワーク報告書の順である班の取り組み事例を掲載する。注目していただきたいのは、「ポートフォリオ」の「対策」が実際には「アクションプラン」にあたるが、

それが徐々に深化発展している点である。ここに PDCA サイクルの循環を見ることが出来る。また、入力については本校情報管理課の協力を得て、「学校生活サポートサイト」という生徒教員が共有するウェブサイトを通じて入力することで電子データ化し、一括管理処理できるような体制を整えた。

大テーマ	班名	班毎のテーマ	1.草案「原因」	1.草案「問題」	1.草案「実害」	1.草案「対策」
(8) 共生社会と国際化社会	153	地域福祉との関わりあい	地域のつながりが希薄になっている。	「無縁社会」	自殺者や孤独死の増加。	世代間の交流の行事や企画。
2.知見(1)日時と FW 先		2.知見(2) Interviewee	2.知見(3)仮説の合っていた点	2.知見(4)仮説の誤っていた点	2.知見(5)改善の方針	2.知見(6)関西 FW の方針
8月6日 盛岡市福祉総合センター 8月7日 仁王児童児童センターとサンガキッズ山岸 8月8日 みたけ地区活動センター		三浦祥吾さんと澤崎かおるさん	現在の孤独の問題は明白で、その対策としてシルバーメイトなどの活動を行なっているが、やはり100%孤独を防げるわけではないことがわかり、孤独死についても様々な対策がとられているとわかった。	世代間の交流が孤独を防ぐ糸口になることを初めて知った。また、孤独を感じている人たちは自分から声を上げにくいことがわかった。そのため、孤独を感じている人々向けの活動では根本的な解決にはならないと気づき、誰でも参加しやすい活動が必要だとわかった。	世代間の交流、3世代交流が地域を繋げると考えたので、私たち高校生、そして中学生や小学生ができることをやってみよう考えるようになった。	夏季FWをふまえて、私たちは「研究仮説」を以下のように作り直した。12月の研修旅行では「研究仮説改訂版1」を検証するため、市役所や地域福祉活動センターなどを訪ね、「文化との関わりの中で、地域のつながりを深めるためにどんな活動をしているのか。」、そしてその成果を調べたいと考えた。
			3.改訂版1「原因」	3.改訂版2「問題」	3.改訂版1「実害」	3.改訂版1「対策」
			地域のつながりが希薄になっている。	「無縁社会」	自殺者や孤独死の増加。	世代間の交流の行事や企画。

ポートフォリオ#1 (地方創生プログラム～夏季 FW)

## 平成30年度1学年SGフィールドワーク報告書

### 地域福祉との関わりあい

#### 1 研究の目的

- ①地域と人のつながりが希薄になっていく無縁社会という日本の現状を改善するために、地元「盛岡」の地域のつながりを調べようと考えたから。
- ②地域と人のつながりはどのように形成されているのか、現在の社会状況を改善するために、どのような取り組みが今後必要となってくるのかを明らかにするため。

#### 2 予備調査

農村社会から急速に都市化・産業化して以来、人と人のつながりや地域のつながりが希薄になった。日本特有の「空気を読む」という文化も助長し、生きづらさや閉塞感を感じやすい社会となった現代日本では、自殺者は年間3万人を超え、孤独死も増加している。そういった無縁社会に起因する問題を社会福祉の観点からみて解決のヒントを得ようと考えた。

#### 3 本調査

盛岡市総合福祉センター、仁王児童センター、放課後児童クラブサンガキッズ山岸、みたけ活動センターの四か所にて、四日間にわたった研修を行った。

##### <1日目> (快人、悠大、深里)

講話中心の活動を行った。遠藤さん、田貝さん、金濱さん、山屋さん、藤澤さんからお話を伺い、ボランティアの定義に触れ、視覚障がい者の生活を知り、全国で展開されるこども食堂の実態を考えた。また、ボランティア活動、二日目以降の事前準備、及び地域で行える行事立案を行った。

##### <2日目>

- ・放課後児童クラブサンガキッズ山岸 (快人、悠大)

NPO 法人が運営しており、就労などの家庭事情によって昼間保護者が家庭にいない児童に対し、放課後や学校休業日に保育を行っている。9時から10時、児童は各自持ってきた宿題を行い、肩を並べ集中して勉強していた。私たちはわからないところなどを教えるなどしてサポートした。12時に昼食をとり、1時間ほど昼寝をし、3時におやつを食べた。

- ・仁王児童センター (深里、今日子)

児童は30人ほどで、9時から10時、児童は勉強をし、私たちはそのサポートをした。その後1時間ほど各自室内で遊び、ホールでドッジボールや一輪車などを時間と場所を交代で使い、それぞれの児童の意思を尊重しながら楽しく遊んだ。

##### <3日目>

- ・みたけ地区活動センター (全員)

3日目と4日目は「サマースクール in みたけ」に参加した。サマースクールは長期休みの間、保護者のいない家庭の子供のための場所の提供、宿題の支援、多世代の交流による、学びの場の提供を目的としている。私たちは登校してくる児童を玄関であいさつをしながら迎え、靴の置き場所や会場の案内をした。1時間それぞれ宿題をしたが、集中が続かず、周りにちょっかいを出してしまう児童がいた。その後、専門の映画技師を招いての映写機投影で「カラスのパン屋さん」を鑑賞した。また、紙飛行機の専門家を招き、自作の紙飛行機でギネスに挑戦したり、染紙や折り紙、将棋やおセロで遊んだりして、年配の方や、地域の大人、中高校生、小学生の間での交流を深めた。正午、帰りの会を行った後、解散し、見送りをして、その日の反省会をボランティア全員で行った。

##### <4日目>・みたけ地区活動センター (全員)

朝の会、帰りの会の司会進行、日程確認、点呼を私たち一高生が行って始まったサマースクール。また、3日目の反省を生かし、学習に集中できるよう、児童と児童の間を開けて座らせ、なるべく私たちがその間に入って勉強をみた。その後、体育館で卓球や、和室で折り紙などの室内遊びを行った。サマースクールの最後、会の進行のお礼に、児童から折り紙で作ったコマをもらい、「受験頑張ってください」と言われ、元気をもらった。



#### 4 考察

福祉とは、地域が活性化し公的なサービスや民間のサービス、地域活動などによって、社会の成員が等しく安心を得られる状態を指し、高齢者介護だけが福祉ではない。では、地域が活性化するためにはどうすればよいのか。地域が活性化していない原因、課題を明確にし、そのための活動を立案、実行することが必要である。そして、課題から工夫と改善を繰り返し、一つずつ課題を減らしていくことが重要だ。

また、ボランティアとは、自分でできることを、自分の意思で、周囲と協力しながら、無償で行う活動のことを言う。そのため、対等な関係で行い、無理や悩みを抱え込まずに行うことが大切である。上下関係や依存的活動による奉仕では、結果的に見返りを求めてしまい、自己への負担が大きい活動では、自分を動けなくし、本末転倒となりうるからである。

今回の放課後児童クラブへの訪問、サマースクールを通して、子供との関係性を考えどうすればもっと楽しんでもらえるのか、その遊びのよさを引き出すなどの様々な経験をした結果、私たちは地域が一体化する早道を三世代交流にあると考えた。高齢者の方々は子供から元気をもらおうとおっしゃり、子供は中高校生や地域の大人に勉強を教えてもらう、または遊んでもらうことによった、気分の高揚が私たちの目から見て感じられたからである。つまり、地域が活性化し、人とのつなが



りを深めるためには、地域が一体となり何らかの活動に参加することが大切であり、三世代での交流がそこに大きくかかわっていると考える。

#### 5 今後の展望

今回の活動で、世代間の交流が地域の活性化に深くかかわっていると考えられた。今後は、日本全体に目を向け、企業、または公共施設が掲げている、地域方針やそのための実施活動によって世代がどのようにかかわっているのか調べたい。

#### 6 参考文献

・ 広井良典「コミュニティを問い直す」筑摩書房 (2009/8/8)

・ デジタル大辞泉

5組153班 佐々木 快人 佐々木 深里  
佐々木 悠大 笹谷 今日子

大テーマ	班名	班毎のテーマ	1.改訂版1「原因」	1.改訂版1「問題」	1.改訂版1「実害」	1.改訂版1「対策」
(8) 共生社会と国際化社会	153	地域福祉との関わりあい	地域のつながりが希薄になっている。	「無縁社会」	自殺者や孤独死の増加。	世代間の交流の行事や企画。
2.知見(1)日時とFW先		2.知見(2) Interviewee	2.知見(3)仮説の合っていた点	2.知見(4)仮説を越えていた点 (気づき)	2.知見(5)改善の方針	2.知見(6)アクションプランの方針
平成30年度研修旅行中の12月3日(月)10:30 京都市社会福祉協議会		代表の高井麻衣子さん	大都市である京都でも、地域の繋がりが希薄であることは問題となっていた。しかし、それに対して、府・市・区・学区の社会福祉協議会でそれぞれしっかり対策がとられていた。また、高齢者の健康や孤独防止、文化伝承のために世代交流の活動も活発におこなわれており、それには学校や高齢者施設の協力が伴っていた。	今回新たに知ることができたこととして、京都では府・市・区・学区にそれぞれ社会福祉協議会を持つことだ。そのため、それぞれの地域ならではの対策や活動が活発に行われていた。また、学区ごとの社会福祉協議会は、市民自らが役員となっているため、住民の関心も深く、積極的に地域について考え、行動している。また、それらは広報にまとめられ、定期的に発行されており、自らの地域はもちろん、他の地域とも共有している。	人口が多く、区をもつ分、京都では市民で運営をうまく行い、その動きや関心はどんどん広がっていた。そこから、市民の積極性や関心は、地域の取り組みに必要な不可欠であり、それは地域の繋がりがを深めることにも同様である。	地域交流として、世代交流を企画したいと思う。また、それも参加しやすくなおかつ、今後も続けられるように、社会福祉協議会に相談して決めていきたい。更に、それを広報紙として、広める。そして、アンケートをとり世代交流の効果と現在の市民の実態を把握することをしていきたい。
			3.改訂版2「原因」	3.改訂版2「問題」	3.改訂版2「実害」	3.改訂版2「対策」
			ネット社会の普及	人と人との繋がりの希薄さ、住民の地域への関心の低さ	孤独死や自殺者の増加、孤独を感じる人の増加	世代交流の企画、地域情報についての広報の発行

# 地域福祉とのかかわりあい

## 1. 研究の目的

- ① 地域と人のつながりはどのように形成されているのか、現在の社会状況を改善するために、どのような取り組みが今後必要となってくるのかを明らかにするため。
- ② 大都市京都では地域のつながりを深めるためにどのような活動を行っているか、世代交流を行っているのか、現状を明らかにするため。

## 2. 予備調査

農村社会から急速に都市化・産業化して以来、人と人のつながりや地域のつながりが希薄になった。その原因として、インターネットとスマートフォンの普及があり、直接顔を合わせなくとも会話ができる社会となったことが考えられる。そのため日本特有の「空気を読む」という文化も助長し、生きづらさや閉塞感を感じやすい社会となった現代日本では、自殺者は年間3万人を超え、孤独死も増加している。そういった無縁社会に起因する問題を社会福祉の観点からみて解決のヒントを得ようと考えた。夏季フィールドワークの時点では、世代間の交流がそのつながりを強くするということが分かった。

そこで、私たちはその課題を積極的に解決しようとしている、孤立や貧困・災害時の支援や地域の絆づくり・住民主体の地域福祉活動を行っているという京都市社会福祉協議会を訪れることにした。京都市社会福祉協議会には様々な部門があり、日々住民の生活の質を向上させるべく活動している。

## 3. 本調査

夏季フィールドワークでは4つの施設を訪れ、三世代交流が地域のつながりを深めることに大きくかかわっていることが分かった。例えば子供たちは自分の祖父母に当たる年齢の方々から昔遊びやお話を聞くことで教養を深めている。さらに親世代は子供たちからエネルギーをもらっている。そのサイクルが人と人とのつながりを強くするものだと確信できた。そこで、大都市である京都で、岩手との地域福祉の共通点と相違点をまとめ、また世代交流に対しどのような考えを持つのか、どんな活動をしているのかを社会福祉協議会でお話を聞くことによって考えた。

私たちは当日、京都市社会福祉協議会を訪れ、高井麻衣子さんからお話を伺った。話を聞いていると、上手く運営できている感じが感じ取れた。その理由として、京都市では、市・区・学区それぞれに社会福祉協議会があり、学区ではその地域の住民自らが運営を行っているようだ。そのため住民が自らの地域のことを地域のために考え、活動を積極的に行っているということが分かった。共通点として、大都市である京都でも岩手と同じように地域のつながりが希薄であることは問題となっていた。しかしながら、それに対してそれぞれの社会福祉協議会で様々な対応が実施されていた。また、高齢者の健康づくりや孤独防止、文化伝承のために世代交流の活動も活発に行われており、学校や高齢者福祉施設の協力も伴っていた。



高井麻衣子さんと対話する様子

## 4. 考察

今回初めて知ったことは、京都には府や市、区や学区に至るまで各々のコミュニティーがそれぞれの社会福祉協議会をもっていたという事である。そのため、それぞれの地域ならではの対策が取られ、活動が活発に行われているのだ。学区ごとの社会福祉協議会では住民自らが役員となっているため、住民目線で自分たちの地域をより良くしようと積極的に地域について考え、実際に活動を行われていた。またそれらは、学区ごとの広報誌にまとめられ、定期的に発行されている。

約150万人と人口が多く、11の行政区を持つ京都市では市民による運営によって、その動きや関心はどんどん広まっていた。そこから、市民の地域の課題の対する積極性や関心は、地域の取り組みに不可欠であり、それは地域のつながりを深めることにも関係しているのである。

## 5. 今後の展望

地域交流として、幅広い年齢層の方々が参加しやすくなるような世代交流を企画したいと思う。また、それも参加したいと思え、なおかつ今後も続けられるようにしたい。また、社会福祉協議会と相談し、より具体的で現実味のあるものとしていきたい。さらに、それを広報誌として発行し、多くの方々に興味を持ってもらえるようにしたい。そして、アンケート調査を実施し世代交流の効果と今現在の市民の実態を把握し、地域のつながりを深めていくことにつなげたい。

1513 佐々木快人 1514 佐々木深里

1515 佐々木悠大 1516 笹谷今日子

「e-ポートフォリオ」の活用が全国的な趨勢となっているが、今後はそれと比較検討し、特に探究活動の定量的な自己評価を盛り込んだ形で、様式を洗練していきたい。

### Ⅲ SG課題研究Ⅱ

#### 1 はじめに

SG課題研究Ⅱは1学年で取り組んだSG課題研究Ⅰに続いて、2学年が総合的な学習の時間(以下、「総合学習」)を活用して行う探究的学習である。3年間にわたり展開するSG課題研究の中核に当たり、外部機関と連携しながら、1年をかけてグローバル課題の解決に真正面から取り組むことになる。

昨年度の実践では、SG課題研究Ⅱにおいて行ったアクションに関するプレゼンテーションにより、一つの探究班が「マイプロジェクトアワード」の全国大会に出場する、市役所において職員と取り組みの成果に関して意見交換を行うなど、着実に探究の

深化が見て取れた。

指定期間も2年を残すばかりとなり、今年度は本取組を一層効果的かつサステナブルなものにすべく、以下の点に特に留意して実践を行った。

#### (1) SG課題研究Ⅰとの接続

本年度SG課題研究Ⅱに取り組む2学年は、前年度に、盛岡市と全面的に連携して行うプログラムを初めて試行した学年であった。詳細については平成29年度の報告書をご参照いただきたいが、この試みは大きな成果を挙げる一方で、地方創生をテーマとしていたため、その成果とグローバル課題との間をいかに架橋していくかという点が新たな課題となる。

回	月	日	内容	時数	備考
1	4	18	課題研究Ⅱガイダンス①	1	HR単位で前年度の振り返り
2		25	課題研究Ⅱガイダンス②	1	3年代表班による模範プレゼン
3	5	2	グローバルセミナー①	1	医療分野
4	6	7	グローバルセミナー②	2	地方創生分野
5		13	グローバルセミナー③	2	貿易・教育分野
6		27	グローバルセミナー④	2	観光・ILC分野
7		4	グローバルセミナー⑤	1	まちづくり分野
8	7	9	アクションプラン立案1	1	グローバルセミナーをふまえ、従来のテーマにグローバル要素を加味したアクションプランを立案
9		11	アクションプラン立案2	1	
10		18	アクションプラン立案3	1	
夏季休業中			アクション	—	グループ毎にプランを遂行
11	8	22	夏季アクションのまとめ	1	ポスターの作成
—		25,6	文化祭におけるポスター展示	—	全グループのポスターを展示
12	9	24	中間発表会	1	ミニポスターセッション
13	10	3	後期探究計画立案	2	グループの再編成を含む
14		9	後期探究①	1	グループ毎に計画に沿ってアクションの準備、その遂行を行う(必要に応じて学校外での活動も可能)
15		17	後期探究②	2	
16		31	後期探究③	2	
17	11	14	SG講演会	1	村尾隆介氏によるプレゼン講座
18	12	5	探究のまとめ①	1	グループ毎に ポスター、スライドの作成 および追加調査
19		12	探究のまとめ②	1	
20		16	探究のまとめ③	1	
21	1	23	クラス別発表会	2	旧クラス毎にプレゼン発表会
22		31	校内理数科課題研究発表会参加	1	2年理数科の研究発表を聴講
23	2	25	SG課題研究発表会	3	公開発表会

表1 SG課題研究Ⅱ 年間計画(総合学習の内、課題研究に関わる時間を抜粋)

## (2) アクションの重視

過去3年間の実践では、アクションプランの提示や、政策提言までは到達するものの、それを具体的な行動に移すことができない探究班が少なからず見られた。

そこで今年度の実践においては、前半の探究において、SG 課題研究 I のまとめとして案出したアクションプランを実行に移し、その結果を検証するところから新たな探究を導き出すような構成とした。

以上の改変に伴い、年度前半の取組においては1年次における探究班を原則的に維持したことも、これまでとは異なる試みである。

## (3) 更なる主体性の引き出し

昨年度の SG 課題研究 I 終了時における自己評価では、プレゼンカに続いて低評価だった項目が主体性であった。指定から3年が経過し、本校においては3年間をかけて SG 課題研究に取り組むのだという雰囲気が醸成される一方で、これまで課題として繰り返し指摘されてきた、いわゆる「フリーライダー」問題のように、なかなか前のめりになれず、受動的・消極的な取組に終始してしまう者も一部にはみられた。

こうした現状を打破するため、これまで6つのグローバルテーマに（場合によっては第二・第三希望のテーマへと回す形で）できるだけ人数が均等になるよう生徒を割り振ってきたものを改め、今年度は人数調整を行わず、全てのグループが最も取り組みたいテーマの一つ抽出することとした。また後半の探究については、それまでのグループを必要に応じて再構成し、同じ志を持つ者同士で存分に活動ができるような土壌を用意した。

以上、i～iiiによって大きく特徴づけられる本年度の実践の経過を以下に詳報していく。

## 2 実践の経過

### i) グローバルセミナー

既に述べたように、今年度の班編成・テーマ設定の特色として、1年次における探究班の踏襲と、第一希望を最優先にしたテーマ設定が挙げられる。とりわけテーマ設定に関しては、例年「まちづくり」「観光」「貿易」「教育」「ILC」「医療」という6つのグ

ローバル・カテゴリに関する漠然としたイメージのみに基づいて一すなわち、それらが具体的な課題意識、問題意識に先行して選択されるケースが散見された。既存のプログラムの中では、事前にそれぞれに関する知識を体系に得る機会は設けられていないので、それもやむを得ないことであった。

そこで、今年度は外部指導者の方々を講師として招き、リレー形式で6つのトピックに関するミニ講義を行っていただき、すべてのトピックに関する基礎知識を学年全体で共有したうえで、1年間かけて探究するテーマを選択する運びとした。

さらに、1年次では地方に留まっていた視座をグローバルなものへと高めていくため、岩手県遠野市に拠点を置きながら、世界を視野に入れたイノベーションを展開しているネクストコモンズ代表の林篤志氏をお招きし、真のグローバルなイノベーションとは何かを主題に講演をしていただいた。

「日本財団特別ソーシャルイノベーター」にも選ばれた林氏の話は、学びのあり方からブロックチェーンの可能性に至るまで多岐にわたり、特に「世界を変えることが難しいならば、手の届く範囲で自分の望むコミュニティを形成していくべきである」という信念に基づき、国内外で展開している新たなコミュニティ形成の試みは、1年次で地方創生をテーマとして探究を行った我々が、その視野を世界に広げていく上で、大いに示唆に富むものであったと思われる。実際に、その後の探究の中で個人的に遠野市のネクストコモンズを訪問したり、SNSを介して林氏と交流したりする生徒が見られたことから、生徒たちがこの講演を通して一過性ではない強い刺激を受けたことがうかがえる。



図1 講演終了後も林氏を囲み意見交換する生徒達

このように、7本のトピックからなるグローバルセミナーを経て、学年全体が同一の、昨年度までより一歩進んだスタート地点から探究課題の模索を開始することが可能となったが、その一方で、第一希望を最優先でテーマを決定した際には、1年次において取り組んだテーマと直接的にリンクさせづらいもの、あるいは高校生が探究の対象とするには敷居が高いと感じられたトピックが敬遠される結果となった。

人数調整のために回された第二・第三希望のトピックに仕方なく取り組むよりも、全ての生徒が真に取り組みたいテーマを定めて探究を行う方が望ましいことは言うまでもないが、たとえば医療のように、医学部志望者が一定数存在するにも関わらず、高校生の探究活動の対象にするのはハードルが高そうだという理由から、挑戦への芽が事前に摘まれてしまうのは避けるべき事態である。

今年度のように、事前に一定の知識を得た上でトピックの選択を行う場合、各トピックに関する基礎的な学術知識の獲得のみならず、それらと高校生がいかに関わっていくべきか、関わるができるか、という視点を持てるようにすることにも十分に意を払った構成を心がけていかなければなるまい。

## ii) 夏季アクションから後期探究へ

グローバルセミナーを経た後、1年次の探究グループ単位で、夏季休業期間を活用して行うアクションのプランを再構成した。

昨年度末にグループ単位で立案したアクションプランを踏襲することを基本としつつ、それに6つのグローバル・カテゴリのいずれか一つを加味して発展させることとした。

その際に生徒に例示した展開可能性は以下のとおりである。

### 1. 結婚・子育て支援 × まちづくり

例) 高齢者と要子育て支援者のマッチング法

### 2. 子どもの貧困対策 × 教育

例) 子ども食堂とコラボした高校生の私塾開設

### 3. 働き方改革 × 教育

例) 高校生が仕掛ける学校・家庭発の働き方改革

### 4. 企業の魅力発信 × 貿易

例) 台湾人向け商品開発・提案

### 5. 食と農の連携 × 観光

例) 食と農を満喫する農家民泊のプロデュース

### 6. 交流人口対策 × まちづくり

例) 高校生による情報誌(電子版)の製作・発信

### 7. 移住・定住促進 × I L C

例) 移住定住ガイド作成を通して検証する対外国人向け移住促進上の課題

### 8. 地域福祉と共生社会 × 医療

例) 部活とコラボした高齢者の健康増進

かくして案出したアクションプランに従って、夏季休業期間にアクションを行い、その結果を検証し、成果と課題をまとめたレポートを文化祭において展示した。

この夏季休業期間におけるアクションの位置づけは、必ずしも成果を求めるものではない。過去3年間のSG課題研究においても、多くの班が一見論理的・実効的なアクションプランや政策を提示することができたものの、果たしてその内のどれほどの生徒がそれを真に自分事として捉え、実現のために他者に働きかけられたかといえ、決してそう多くはないであろう。

こうした反省をふまえ、まずはアクションプランを実行に移すことの難しさ、それに必要な熱量を実感的に学ぶことを目的として、まずはできるところから行動してみることを促した。

結果的に後期の探究の中で本格的なアクションを行っていくに当たっての予備的調査に終始することになったグループもあったが、アクションプランを机上の空論に終わらせず、現実的な目標としてアクションを捕捉できていればそれも可とした。

文化祭での展示を終えた後、作成したポスターを



図2 文化祭において社会実験を行ったグループ

使用して、前期探究のまとめとしてのミニポスターセッションをクラス単位で実施し、グループ毎の成果と課題を共有した。ここでいうクラスとは1年次における所属クラス毎の集団を指す。1年間かけて「失敗のできる場づくり」を行ってきた集団の中であるため、こうしたポスターセッションにおいても関連なやり取りが交わされていた。

かくして自分たちの到達点と課題を再確認した上で、後半の探究へ向けたアクションプランの再構成と、必要に応じたチームのリビルドを行った。

前述のとおり、今年度の新たな試行のポイントの一つが、テーマや構成員の自由化による主体性の引き出しであった。

特に前期探究から後期探究への移り変わりのタイミングで、たとえば共通したテーマに向けて2つのチームがコラボレーションすることで、より高い相乗効果が期待される場合や、志向性を同じくする者同士がこれまで誰も挑戦してこなかった分野の開拓を目指す場合など、チームの再編により、これまで以上に取組の活発化が見込まれる時には、再編前のグループ構成員全員の同意が得られること等の条件を付けたうえでチームの再編を許可した。

どの程度生徒たちが再編を希望するものか、蓋を開けてみなければわからないところもあったが、結果的に5つの探究班が新たに生まれ、その他約60の探究班は基本的に年度当初からのグループおよびテーマを踏襲し、前期探究の成果と課題をふまえた次なる探究を展開していくことになった。

### iii) 探究の展開事例

これまで概説してきた前期から後期にかけての探究の展開の具体的事例をここでいくつか紹介したい。

#### ① トリリンガル育成を目指す児童向け異文化理解プログラムの開発

当該班は男女2名で構成される。両者はいずれも2年生の夏から1年間海外留学をし、翌年一つ下の学年に編入される形で本校2年生後半の生活をスタートした者たちである。

従来のプログラムであれば、両名とも既存のグループのいずれかに配属し、後輩たちが行ってきた活動のサポートをするに留まっていたであろう。しかし今年度は、ちょうど彼らの帰国からそう遠くない

時期にチーム再編を迎えることとなった。もちろん当初からこのような事態を想定してプログラムしたわけではないものの、結果的に有用に機能した事例の一つとなった。

彼らは同様の境遇にある他校の生徒2名とともに、小学生を主たる対象として異文化理解を深める教育プログラムの開発と実践を行う組織 *felice*(イタリア語で幸福の意)を立ち上げた。

彼らのアクションの根底には、自分の留学経験を自分だけで完結させたくないという思いに加え、彼らが留学先で目の当たりにした、異なる文化や言語が当たり前で共存する多言語社会を日本にも根付かせていきたいという希望がある。その実現のため、英語教育が開始される小学校段階から、彼らの留学先であるイタリア、フィジー、フィンランド、ベルギーを中心に、外国の言語や文化に触れる機会を設けることが団体の主たる活動内容となる。

これまでに3回ほど岩手県盛岡市周辺の児童センターにおいてイベントを開催し、いずれも好評を博した。さらにSNSを介して、留学を志している県内の高校生への助言を行うなどその活動の幅を広げている。さらに年度末にはマイプロジェクトアワード岩手県大会に自主的に参加し、夏から冬にかけての活動の成果を発表した。

従来もAFS等を活用して留学を行う生徒は本校においても決して珍しくはなかったものの、ともすれば自己の中で完結しがちな経験を他者にも還元しよう試みは稀有なものであり、SG課題研究IIのプログラムの弾力化もささやかながらそのアクションを駆動する一助になったものと考えられる。



図3 マイプロジェクトアワードにおける発表風景



図4 スタンプラリーの実施風景



図5 釜石で実施した茶会風景

## ②釜石市と連携したインバウンド対策

釜石市はラグビーワールドカップ 2019 の開催地の一つとなっており、少しずつ県内でもその機運が高まってきている。SG 課題研究Ⅱのグローバル・カテゴリーの一つには観光があり、今年度は複数のグループが大会本番へ向け、どのような形で外国人観光客を誘致し、もてなし、リピーターを獲得していくかをテーマに探究を行った。

ここで紹介するグループは、1年次では地元企業の魅力発信や、京都における観光地の魅力発信のあり方をテーマに探究を行った。

その経験に立脚し、釜石におけるインバウンド対策をテーマに探究活動を行った本年、当該班の生徒らが注目したのはスタンプラリーであった。

夏季アクションでは、盛岡市内で地域おこしの一環として行われているスタンプラリーに参加し、ヒアリングを行うことを通して、実施に要するノウハウを吸収するとともに、釜石市内において、提携店舗開拓のための交渉を展開した。

その過程で釜石市オープンシティ推進室の協力を得られることになり、10月21日に開催される釜石まつりにあわせて行われるラグビーワールドカップ2019の宣伝イベントと連動して、スタンプラリーを実施するはこびとなった。今回はターゲットを外国人観光客に限定せず、まつりの機会に釜石を訪れる市外の方々に、スタンプラリーを通じて街の魅力を発信することを目的とし、全10箇所の事業所にスタンプ設置等の協力を得ることで実現を見た。

準備期間、実施期間ともに限られるなか、想定していたほどの集客が得られたとは言い難い結果とな

ったものの、今回の取組の成果と課題を検証することを通して、2019年に迎えるラグビーワールドカップ本番に向け、より効果的な実践へと洗練していくことが可能になるであろう。

さらにこの取組が呼び水となり、他班がやはりオープンシティ推進室と連携して、茶会体験を核とした高校生にもできるインバウンド対策モデルを提案、実施した。こちらのグループは取組の過程で、SG講演会の講師として本校にお招きした希望郷いわて文化大使を務めている村尾隆介氏から多大なるご支援を受け、活動の充実が図られた。

いずれの班についても、オープンシティ推進室や釜石市内の事業所、村尾氏との連携については、教員が指示・仲介することなく、主体的に行われたものである。1年次における、盛岡市、関西地区を舞台にした二度のフィールドワークの経験が糧となり、外部との連携も物怖じせずできるようになった班が多いことは、昨年度以来のプログラムの成果の一つといえよう。

## ③県産木材を活用したアスレチック建設の提案

当該班は1年次において、少子高齢化時代の子育て支援をテーマに、盛岡市・京都府において調査活動を行った。

それをふまえ、世界的に見てもハイペースで高齢化や人口減が進むことが予想される岩手県において、オリジナルな子育て支援・まちづくりの施策を構想するに当たり、彼らが着目したのがアスレチックであった。

大規模かつチャレンジングなアスレチックへ挑戦



する様子を撮影した動画は、近年 YouTube をはじめとする動画投稿サイトでも人気を博しているという。隣県である秋田県には、公営の大規模なアスレチックを伴う公園があり、夏季アクションにおいては実際に現地を調査し、規模や運営状況に関する調査を行った。

さらに岩手県における展開可能性を探る中で、岩手県において県産木材の利用促進をはかる条例（その中では主に若年層を対象とした県産木材と接する機会の増加や、その上で必要に応じた予算措置を行うことがうたわれている）が制定されることを知った彼らは、岩手県議会および盛岡市議会に対し、陳情という形で、2年間の活動の成果を踏まえた、本県の子育て支援、観光、まちづくり対策としてのアスレチック建設について提言を行った。

高校生が議会に対し陳情を行うということは近年例がないということで、盛岡市議会は、関連する委員会に参考人として招待する形で、岩手県議会は5名の議員の方が直接本校に向いてヒアリングを行うという形で、彼らに直接提言の内容をプレゼンする機会を与えていただいた。

いずれの場においても実現可能性を高めるためのご質問・ご助言をいただくとともに、岩手県議会議員の方々からは、ぜひ何かしらの形で実現に向かわせたいという激励の言葉を頂戴した。

過去3年の実践においても、本県のグローバル化について、無数のアクションプランが生徒たちによって示され、盛岡市役所等でそれを発表する機会も頂戴してきたが、今回のように生徒の主体的行動がそうした場の設定に結びついたのは初めての出来事であり、生徒にとっても自分たちの提言を真正面から受け止めていただくことができたことは、何より



図6 盛岡市議会におけるプレゼンテーション

も大きい自信と実現に向けた更なるモチベーションにつながったことと思われる。それが可能になった背景としては、1年次から盛岡市と連携して、地に足をつけたテーマでの探究を重ねてきたことにより、今まで以上に「自分事」として活動に当たれたことが大きいのではなかろうか。

#### ④新たなコミュニティ形成への挑戦

最後に紹介するグループは3名中2名が台湾で行われた海外フィールドワークに参加した生徒であり、チーム再編の際に、同じ課題意識を持つ者同士で新たに結成したものである。

人口減による地域社会の衰退に抗し、新たな地域コミュニティを海外における事例もふまえて創出することを主たるテーマとしていた。

半年間の実践はトライアルアンドエラーの繰り返しとなった。まず公民館における、郷土食の伝承を媒介にした世代間交流の企画は、衛生管理面での難点があり実現に至ることはできなかった。また台湾のフィールドワークにおいては、個人主義的な傾向が強い台湾では、そもそも地域コミュニティという概念自体が希薄であることを思い知らされた。

一方でこのグループは、エラーの都度方向性を再検討し、絶えず新たな試みを模索することを欠かさなかった。特に台湾で得た、地域コミュニティは希薄でも（この点は現代日本にも通ずる）、政治をはじめとする志向性を同じくする集団とは強固な結びつきを形成し得るという知見をもとに、前述のラグビーワールドカップ2019を起爆剤とした、新しい共同体の創出へ向けたチャレンジを開始した。

その方法は、2014年以降世界的なトレンドとなったアイスバケツチャレンジをヒントに、各自が早口言葉など簡単に取り組める挑戦（ラグビーの「トライ」との掛詞になっている）を撮影した動画の特設したSNSのアカウント上にアップし、次の挑戦者へのパスをつないでいくというものである。その背後には、ラグビーワールドカップを一過性のイベントに終わらせるのではなく、それに向けた取組の中で形成された人的交流を持続可能なコミュニティへと昇華させていこうという狙いがある。

持続可能化という点では更なる仕掛けが必要となるであろうが、彼らの試みはラグビーワールドカッ

プ 2019 の開催に向けて現在も継続中である。

このように、今年度は1・2学年ともに、年度途中で行われた海外フィールドワークで得られた知見が速やかに日常の課題研究に反映される例が散見された。同じアジアに属する地域ということで、日本が抱えるグローバル課題と親和性が高いことによるものなのかもしれない。いずれにせよ、海外における調査の成果を一部の班の取組にとどめず、学年全体で共有できる仕組みづくりにも一層注力していく必要があるであろう。

#### iv) まとめと成果発表・共有

12月から1月にかけては、1年間の取組の成果をまとめる段階に入る。例年どおり、プレゼンテーションと、その内容をコンパクトにまとめたポスターを作成するのだが、昨年度の報告書において述べたとおり、1年次のSG課題研究Iでは、プレゼンテーションのデリバリーに難を感じる生徒が多く見受けられた。

そこで今年度はまとめに先立ち、希望郷いわて文化大使を務める村尾隆介氏をお招きし、プレゼンテーションの基礎的手法をご指導いただいた。年間300日ほど日本や世界の各地を飛び回られている村尾氏はプレゼンのプロであるのみならず、プロボノとして幅広く社会貢献されている姿は本校が育成を目指すグローバル・リーダー像を体現しているといっても過言ではない。実際に多くの生徒が僅か1時間の講演にも関わらず、村尾氏から多大なるインスパイアを受け、それが彼らの作るプレゼンにも色濃く反映されていた。

1月23日にはその成果を、まずはクラス単位で共有しあう発表会を実施。ルーブリックを用いた相互評価において最も高評価であった班をクラス代表として選出した。

続いて2月25日には、学年での発表会を外部にも公開して実施した。昨年度同様、ポスターセッションの部とプレゼンテーションの部の二部から構成され、前者は1年生も聴き手として参加した。総勢600名を超える参加者を得た学年発表会は盛会に終わり、一年間の探究活動の結びとなった。

### 3 普通教科との連携

ここでSG課題研究II以外の普通教科において、SGH事業の効果を最大化すべく補助的に行っている取組の一端についても付言しておきたい。

1学年において、グローバルコミュニケーション英語Iおよびグローバル現代社会がSG課題研究Iを補完する役割を担っていることは、他章で詳述するとおりである。

当初は1学年で完結する計画であったが、2学年におけるコミュニケーション英語II、地歴公民科の授業においてもいわゆる「授業のSGH化」は着実に進展している。

コミュニケーション英語IIにおいては、ディベートやプレゼンテーションなどのコミュニケーション活動が一年を通して散りばめられており、その成果は、英語部の英語ディベート県大会優勝や、2年連続の全国大会出場という形で如実に現れている。

一方、地歴公民科では、今年度、岩手大学の留学生をゲストスピーカーとした特別授業を、2学年の全てのクラスを対象に実施した。世界史の枠内（文系においては世界史B、理系においては世界史A）で、留学生の出身国の歴史や地理、現状についてプレゼンテーションを行っていただいた後に、質疑応答を行うというものである。年齢が近いこともあり、プレゼンテーションの後には活発な質問が交わされ、留学生の母国に関する生の情報を得ることができた。この授業が呼び水となり、SG課題研究におけるアクションにもお手伝いいただくなど、継続的な交流へとつながる一面も見られた。

さらに日本史Bの枠内で人文科学的フィールドワークの手法を習得するため、盛岡市内に所在する文化財の調査を行い、得られた情報をポスターにまと



図7 グローバル世界史授業風景

め、ポスターセッションを行い、共有・深化させるという新しい実践も試みられた。その成果については、2019年2月8日に行われた岩手県教育研究発表会において報告を行った。

#### 4 課外活動としての探究活動

課題研究の成果を最大化するためには、意欲のある生徒に対し、教育課程の枠組みの外においても、存分に興味・関心を掘り下げられる環境を整備することが求められる。

当初は、部活動あるいは委員会活動のような形でそのような取組を位置付けていくことを計画していたが、正規の部活動等にすることによって生まれる制約により、かえって活動への参加が阻害されることが懸念された。

そこで本年は盛岡市をはじめとする連携機関の協力を得ながら、通年で様々なプログラムを提供し、学校の内外で探究を深める機会を設けた。以下に特に2年生が参加したものを中心の一部を例示する。

##### (1) 盛岡市福祉人材育成事業

標記は盛岡市が市内の高校生を対象に開講している通年の講座である。活動は月に1回程度のペースで行われ、地域課題を発掘し、社会実験を行い、課題解決へ向けたアクションを立ち上げるという一連の流れで構成されている。本校で行っている課題研究をローカルな視点からトレースするものである。今年度は1年生から3名、2年生から4名が参加し、いずれの生徒も本校ではグループで行っているアクションプラン立案からプレゼンテーションまでを、独力で行うまでに成長を遂げていた。



図8 福祉人材育成事業活動風景

##### (2) 「盛岡という星で」SNS活用講座

標記は盛岡市が関係人口増加を目的として今年度新たに立ち上げたプロジェクトであり、SNSを最大限活用し、効果を挙げている。そのノウハウについて、携わっているクリエイターや技術者の方々から、直接指導を受ける機会を設けていただいた。課題研究におけるアクションの中でも情報発信を重視する班が多い中、非常に有用な情報を提供していただくことができた。

##### (3) 盛岡まなび会議

標記はSGH事業における本校と盛岡市との連携の中から生まれた新たなプロジェクトであり、SGH事業に関わって下さっている大人たちが、高校生と合宿形式でじっくりと議論し、学ぶことの意義を掘り下げることを目的としている。探究的活動を好む生徒はもちろん、そのような活動を含め、学ぶことの意義をなかなか見出せずにいる生徒をむしろ主な対象として想定したものである。

第一回目となる今年度は2019年3月9日、10日の開催を予定しており、その詳細は次年度の報告書において紹介することとしたい。

このように、今年度は多様なプログラムを提供する中で、生徒たちが自分の興味・関心やスケジュールに従って、アラカルト的に課外活動を構成していく環境を整えた。

結果的に、上記の複数のプログラムに参加した生徒が、台湾フィールドワークにも参加し、課題研究Ⅱの核となるなど、自由度の高い活動の中でも擬制的部活動または委員会活動ともいえる実を備えることができたものと考えられる。

これを指定期間満了後の本校においてどのように制度的に位置づけていくかについて、引き続き模索を続けた上で結論を出していくことを、次年度の課題としたい。

#### 5 成果発表および普及の取組

続いて今年度生徒たちが中心となって行った、SG課題研究Ⅱの成果に関する対外的な発表、普及の取組について述べる。指定期間後半に差し掛かる中、今まで以上に成果の普及に注力することが求められ

る。今年度はiiiに述べるように、当初の研究開発計画に盛り込んでいた他の SGH、SSH 等と合同して行う成果発表会開催の第一歩として、ILC（国際リニアコライダー）誘致実現という目的を共有して活動を行っている県立高校間で成果を交流し合う場を立ち上げた。以下にその詳細を述べる。

### （1）SGH 全国フォーラム

2018年12月15日に東京で開催されたSGH全国フォーラムに2年生5名が参加した。いずれも台湾フィールドワークに参加した者で、英語によるポスターセッションではその際に得られた知見を含む探究の成果を、他のSGH校生徒と共有した。

### （2）マイプロジェクトアワード

標記は高校生が自ら取り組んだ課題解決型プロジェクトに関するプレゼンテーションを披露し合う学びの祭典として、文部科学省後援を受けて実施されている事業である。今年度からは新たに岩手県独自の予選大会が開催され、本校からも2チームが参加した。前年度文部科学大臣賞を受賞した生徒もエントリーするなど非常にハイレベルな大会となり、残念ながら昨年に続く全国大会出場はならなかったものの、他校の生徒の取組から大きな刺激を受ける、貴重な機会となった。

### （3）SGH・SSH等合同発表会

世界最先端の素粒子物理学の実験施設である ILC（国際リニアコライダー）の誘致は岩手県が掲げる県政課題の一つであり、その実現に向け、8つの県立高校（内SSH2校、SGH1校）をモデル校に指定し、各校毎に特色ある取組を促すことで若年層における機運の醸成と、国際的なプロジェクトの担い手の育成に努めてきた。

モデル校指定事業の2年目を迎えた今年度、指定校の一つであった本校が主管となり、岩手県科学ILC推進室と連携して、指定校の生徒が一堂に会し、取組の成果と課題を共有する成果交流会を立ち上げ、2019年2月19日に実施した。

交流会は大きく3つのパートから成る。はじめにトークセッションとして、高エネルギー加速器研究機構において広報担当、若手研究員として活躍され



図9 合同発表会後の交流

ている方お二人をお招きし、ILC 誘致事業の実際についてお話をうかがうトークセッションの部、続いて各モデル校の生徒が、自校の取組を発表するプレゼンテーションの部、そして学校の異なる生徒同士が小グループを形成し、1年間の活動の成果と課題を率直に交換し合うディスカッションの部である。

今回は ILC というテーマと対象を限定した形ではあるが、複数の SGH および SSH が、取組の成果を非指定校との間で共有し合う機会を設けることができた。

指定期間満了を迎える来年度には、今回の経験を土台として、より大規模かつ持続的な、探究的学習を行っている高校生同士の成果交流の場の形成に努めていきたい。

## 6 成果と課題

### （1）指導・連携体制について

今年度は6つの各グローバル・カテゴリに関する6人の外部指導者は踏襲しつつ、昨年度に引き続き盛岡市との提携をベースとして連携機関を拡大していった結果、今年度生徒たちが課題研究を通じて関わった国内の組織・機関は以下の56機関、のべ331人にのぼった。盛岡市との連携を機に、地域の教育資源の発掘は着実に進展している。前述のTOLICのように、世界展開を視野に入れている組織や機関との連携を深めていくことにより、生徒たちのアクションを一層グローバルなものへと高めていくことができるものと考えられる。

一方今年度から開始された台湾フィールドワークによって生まれた政治大学や同大学附属高級中学をはじめとする台湾の組織・機関との連携を恒常的な

ものとして、フィールドワーク参加者のみならず、本校の課題研究の取組全体へとその成果を還元していくシステムを整備することも現在取り組んでいる喫緊の課題である。

＜今年度課題研究Ⅱをご支援いただいた連携機関＞

i-サポいわて 秋田県立中央公園 浅沼農園 東屋  
岩手朝日テレビ 岩手医科大学 岩手観光会館  
岩手県庁観光課 岩手県庁農林水産部畜産課  
岩手大学 岩手ホテルアンドリゾート  
岩山パークランド 上田学童クラブ 上田公民館  
上田小学校 オガールプラザ オレンジ  
釜山市役所 ガロパン 勘六縁 小岩井農場  
高エネルギー加速器研究機構 ござ九 紫雲石硯  
J A全農いわて J T B盛岡 城西中学校  
紫波町役場 スターブランド 仙台市危機管理室  
高島屋 高松公園管理事務所 滝沢市風の子クラブ  
チロル 東北大学 恵 PCM 仁王児童センター  
ネクストコモンズラボ NOVA 盛岡校 パンプルムス  
日詰小学校 まつだ松林堂 松ぼっくり  
ママズオープン J R宮古駅 盛岡市社会福祉協議会  
盛岡市役所商工観光部 盛岡情報ビジネス専門学校  
盛岡タイムス 盛岡ふるさとガイド  
盛岡まちづくり株式会社 蘭々 リーベ  
龍泉洞観光会館 六月の鹿  
ロックハンドバトル開発チーム（敬称略）

ここに記して御礼申し上げます。

## （2）生徒の能力に関する質的変容について

1年間のSG課題研究Ⅱの取組を通して生徒の能力にいかなる質的変容が生じたか、今年度は主に2通りの方法で検証を行った。

まず一つ目は、毎年同じ調査項目で実施しているアウトプットに関する意識調査を通してである。現在の2年生が今年度に回答した結果を、昨年度同一の調査項目で行った際の回答状況と比較したものを、表2として掲げる。

昨年度と今年度の実践で大きく異なる点は視点の一層のグローバル化、そしてアクションの重視である。

前者について、調査項目2・3・7・9でポイントがいずれも向上しているのはその所産であろう。ただし、7について、現状は決して好ましい数字とはいえない。特に今年度から提携を開始した台湾の大学や高級中学を念頭に置き、希望すればすべての班がフランクに照会・連携できるような関係の構築を進めていかなければなるまい。

一方、後者のアクションの重視については、質問項目の1に如実にその影響が見て取れる。SG課題研究Ⅱの取組が、多くの生徒たちの社会との関わりの端緒となったことは明白であり、かつ前年度以上に多くの生徒がそれを好意的に受け止めていることは何より好ましいことである（質問項目5）。

ただし、その取組が生徒の進路意識に必ずしも結びついていないことは、残された課題の中で最も大きいものの一つである。質問項目6についていえば、たとえば、取組を通して新たな分野の知見を得た結果、取組以前想定していた進路との間で迷いが生じることとなった場合、生徒の進路意識に正の方向で影響を与えているのであろうが、回答としては否定的な「No」となる可能性もあることから、進路意識への影響の有無については、別な問いを立てて捕捉する必要がある。その点を措くにせよ、この数字からは、生徒の実践に対する意識があくまでも学校の「SG課題研究Ⅱ」の枠内に留まっていることを意味しているものと考えられる。質問項目4・8のように、自分たちの取組が持つ価値を外に向けて問いかけていく中で、彼らの取組に対する認識をより社会的にプラクティカルなレベルへと昇華させていくことができるのではなかろうか。

続いて、従来SG課題研究における個々の取組を経た生徒の変容の度合いについては、その都度ルーブリックを用いて評価することを行ってきたが、昨年度の2年生に対しては、年度末にポートフォリオの作成を試行した。今年度はそれをより深化させ、ルーブリック的要素も加味した形で、1年次からの取組を連続的に自己評価するポートフォリオを現在作成している。これにより、各取組を経た生徒達の能力的な変容に関する自己認識を可視化・前景化することが可能になるのではないかと期待される。その結果については次年度の本報告書において詳報する予定である。

## 7 おわりに

今年度は特にアクションプランを机上の空論に終わらせることなく、実現することに注力した実践を行った。あわせて過去3年間の実践の中で絶えずウイークポイントとして指摘されてきたプレゼンテーションのデリバリー能力の改善をはかるため、前年度までに比べて早いタイミングで専門の講座を開設することを試みた。

いずれにせよ効果は自明であり、特にプレゼンテーションへ向かう姿勢には劇的な改善が認められた。

他方で、その分十分に時間をかけられなかった先行研究の精読やポスターの構成力という点では、(前年度までに比べて大きな後退はないものの、前進した部分との落差という意味において) 大きな課題を残すところとなった。

以上のように、こちらが重視した取組内容が生徒の能力の伸張にストレートに反映されるという状況は、翻って、その前提としてのSG課題研究IIのプログラム自体が一定程度安定・成熟しつつあることを物語っているとも評価できよう。

今年度のトライアルアンドエラーの過程と結果を分析する中から、限られた人的・時間的・予算的リソースの枠内でよりバランスの取れた能力の伸張を図り得るプログラムを構築することで、持続可能な本校オリジナルの探究学習モデルの完成を目指していきたい。

質問項目	回答	H29	H30
1 自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組んだか	Yes	33%	61%
	No	67%	39%
2 自主的に留学や海外研修を行ったか	Yes	4%	9%
	No	96%	91%
3 将来留学したり国際的な仕事に就きたいか	Yes	42%	51%
	No	58%	49%
4 公的機関から表彰されたか。またはグローバルな社会課題・ビジネス課題に関する大会で入賞したか	Yes	9%	12%
	No	91%	88%
5 探究的な学習活動は好きか	Yes	69%	73%
	No	31%	27%
6 課題研究を通して自分の進路はより明確になったか	Yes	37%	28%
	No	63%	72%
7 課題研究を通して国外の機関や専門家と連携したか	Yes	0%	6%
	No	100%	94%
8 グローバルな社会課題・ビジネス課題に関する大会に参加したか	Yes	5%	5%
	No	95%	95%
9 高校卒業後、海外の大学へ留学・進学するか(予定を含む)	Yes	5%	11%
	No	95%	89%

表2 平成30年度2学年普通科生徒を対象として行ったSGH事業のアウトプットに関する意識調査結果

## IV SG 課題研究 III

### 1 研究開発全体における位置づけ

1年生を対象とするSG課題研究Iでは研究の基礎的方法を学び、2年生を対象とするSG課題研究IIでは、その成果を活用し、外部指導者と密に連携しつつ本格的な学術研究に挑む。3年生で取り組むSG課題研究IIIは、2年間の研究成果を英語でまとめ、相互にプレゼンテーションし合うことで、国際的な発信力を涵養しようという仮説の下で行われる、3年間にわたるSG課題研究の集大成となる取り組みである。

今年度のSG課題研究IIIにおいては、これまでの研究成果の発信が大きな課題となる。SGH 研究開発構想の目標の中から特に2つの課題を重要だと考えた。

第一に「グローバル課題の解決方法を探究し、その成果を世界へ向けて発信するとともに主体的に問題解決に向けた実践を行う姿勢を養う」ことである。昨年度までの課題研究の中で、地域からグローバル課題を考える活動を行ってきたが、研究をまとめていく中で、グローバルな課題と接続する（言い換えれば、持続可能な開発目標と関連させる）意識が少々弱くなっている。発表段階でグローバル課題と接続させるよう意識させることである。

第二に「他者との相互理解・協業に必要な傾聴力、共感力、質問力、説得力を育成し、自分の考えを分かりやすくかつ説得的に伝える力を身につける」ことである。これは今回の英語によるプレゼンテーションのデリバリー能力の向上をはかることである。

前年度に各班の研究成果は一度発表した中で、伝えること（デリバリー）をもう一度意識するこ

とで研究の見直しをはからせたい。その上で、コース別発表会や本発表会で岩手大学の外国人留学生を招聘し、必ず質疑応答をしてもらうこととする。生徒にもそのための準備をさせ、生徒の動機付けを高めたい。

また、昨年好評だった、英語プレゼンテーションの第一人者である村尾隆介氏に講習会を実施してもらい、生徒に、プレゼンテーションの具体的方策を含め心がけるべきことなどを伝えてもらい、技術の習熟をはかろうと考えた。

追記すると、3年間の総まとめとなる年になって、1・2年を続けて指導してきた担当者が転勤したことにより変更となった。年度初めは特に、反省と課題を引き継ぐ上で、マイナスからのスタートであった。

## 2 実施方法

### (1) 対象

3年生普通科 理数科\* 生徒全員 278名。

\*昨年度から理数科も課題研究IIIの対象としている。理数科は1・2年次は普通科の課題研究ではなく理数科研究を行っているが、理数科の自然科学的な課題研究も、英語で発表し共有することで、グローバルな価値を見出しうると判断するからである。

### (2) 形態

普通科全63班、理数科11班の計74班に分かれて実施する。昨年度は、普通科40班、理数科全8班の計48班だったが、フリーライダー問題（班の取り組みにただ乗りする者がいること）の改善に向けて前年度の課題研究IIにおいて各班の人数を減らしたことで、班の総数が多くなっている。

グループは前年度の課題研究班と同様、3 学年の正副担任を中心に、各コース 2 名ずつ教員を配置し、課題研究の指導・運営を行う。

### (3) 経過

#### (i) 2 学年末の取り組み

英語プレゼンテーションのもととなる和文発表原稿及びスライドは 2 学年で作成を済ませており、春季休業を活用して、和文の英訳を行なった。 外

国語である英語でプレゼンテーションを行う際には、いくつか留意すべきことがあるが、何よりも研究内容を聴衆に理解してもらうことを最優先としなければならない。日本語では容易に伝えられた内容も、もう一度構成を整理してから英語に直す必要があるため、フローチャートの作成を第一に行わせた。

以下、フローチャートの様式を添付する。

Flow Chart for Your Presentation in English				
1	Title			
2	Introduction	(1) Motivation	(2) Previous [Past] Research	(3) Hypothesis
				(4) Purpose
3	Analysis	(1) Materials / Equipment	(2) Method / Procedure / Process	(3) Results
			(i)	(ii)
			(i)	(ii)
			(i)	(ii)
			(i)	(ii)
			(i)	(ii)
4	Summary			
5	Further Information / Future Plan		※ 章Noは、「3 (4) (ii)」のように記述すること。	
6	Literature Cited / Reference	決まり文句なので、フローは必要なし。		
7	Acknowledgement	決まり文句なので、フローは必要なし。		

#### (ii) 3 学年の取り組み

3 学年における課題研究 III では、時数が限られていることもあり、本番を想定したプレゼンテーションの準備を重点的に行なう。以下、本番に向けての計画を掲載する。



回	月	日	内容	詳細	会場
0	3		0. 課題研究Ⅱの内容を改善 1. 日本語フロー完成 2. 英語フロー完成 3. 英語スライド完成 4. 英語プレゼン原稿完成	0～2 は、春休み前に班員全員で取り組む。 3～4 のスライドおよび原稿は班員で分担する。 春休み中に担当者が主となって、スライド、プレゼン原稿を完成させる。	各自
1	4	19	ガイダンス 各班打合せ	課題研究英語発表会のループリックを読み、今年度のゴールを確認する。 春休み中に各自が作成したものを寄り合わせる。 不足な点はGW中に手直しする。	白聖ホール
2	5	10	各班打合せ 英語論文提出	GW中に手直したものを寄り合わせる。 各班1名の代表者は、コンピューター室で、スライドやスクリプトを元に、論文の体裁にまとめ、提出する。 アブストラクトをレジюмеとする。	各拠点及びコンピューター室
3					
4		18	英語プレゼンテーション講習会	村尾隆介氏（希望郷いわて文化大使）	白聖ホール
5					
6			24	コース別英語発表会 リハーサル	デリバリー・スキルに充分配慮する。
7	31				
8	6	7	SG コース別英語発表会	各コースに留学生を招き、発表を聞いてもらい、質問もしてもらう。 6/28 に発表するコース代表及び理数科代表を選抜。	各拠点
9					
10	6	28	SG 課題研究英語発表会	来賓、外部指導者、留学生を招き、発表を聞いてもらい、質問もしてもらう。 SG 課題研究Ⅱの6つのコースと理数科から、代表1班ずつが発表。	白聖ホール
11					

最終ゴールを事前に提示し共有することで、各班のパフォーマンスやアウトカムの質が向上することをねらって、ガイダンスで下に掲載するルー

ブリックも提示した。内容は前年度までを踏襲しているが、一部変更した。取り消し線がある部分が訂正箇所である。

## H30 SG 課題研究 III

## SG 課題研究英語発表会用評価基準（ルーブリック）

基準	極めて良好である	概ね良好である	改善の余地がある	一層の努力を要する
点数	4	3	2	1
A 研究内容	新たな追調査結果を加え、一層充実した成果を発表できている。	昨年度不十分だった箇所を補うことができている。	英文化にあたり、一部の表現や構成を修正したが、内容そのものは深められていない。	昨年度の成果をそのまま英訳したことで、かえって理解が困難である。
B 説得力	十分な論拠とともに独創的・実効的成果をあげることができている。	十分な論拠をあげて自説を提案することができている。	独自の見解を提示することはできているが、論拠が不十分なところがある。	調べたことをただ列挙するだけにとどまっている。
C スライド作成	右に加えて、 <del>効果的にアニメーションを活用している</del> 。視覚的に聴衆を惹きつける工夫をしている。	右に加えて、効果的に図・表が用いられている。	スライドがシンプルでわかりやすく、構成も整理されている。	スライドが文字ばかりでわかりにくく、構成も整理されていない。
D デリバリー	右に加えて、聞き手を惹きつける工夫をしている。	右に加えて、効果的にジェスチャーやボディランゲージを用いている。	聞き手の方を見て発表しており、声量も充分である。	ただ原稿を読み上げており、声量も不十分である。
E 英語の活用	日本人・非日本人を問わず容易に理解できるような工夫をしている。	英語を的確に用いて成果発表を行っている。	おおむね理解できるが、英語の誤用や専門用語の多用など、理解しづらい点がある。	日本人・非日本人ともに理解が困難と思われる発表である。
F 協調性	誰が代表になっても、プレゼンテーションができる	右に加えて、各自が活発に意見を出し合い、内容を洗練した	全員が役割を分担し、作業を完遂した	一部の班員のみで作業を完遂した
G 主体性	活動に主体的に取り組んだうえ、世界や自身の進路を見つめ直すことができた。	英語力や研究内容を向上させる機会と捉え、主体的に探究した。	与えられて課題については十分に果たそうとした。	課題研究に取り組む意義を見出せなかった。

※1 基準 A ～ E は、他の班の発表を評価する際に使用します。良い点・改善点をコメント欄に記入しましょう。

※2 基準 F, G は、自己評価に使用します。

### (iii) 英語プレゼンテーション講習会

5月18日(金)、希望郷いわて文化大使を務める、スターブランド株式会社の村尾隆介氏を招き、英語プレゼンテーションに関する講習会を開いた。プレゼンテーション一般に関する内容、英語でプレゼンテーションを行う際に留意すべき点、そして聴衆を惹きつけかつ聴衆に訴えるプレゼンテーションの効果的な方法について、わかりやすく教えていただいた。生徒たちからの反響も大きく、デリバリー能力の向上という課題と向き合う上で、村尾氏の講習会は非常に効果的に作用した。なによりも、村尾氏の講習自体が楽しくまた知的好奇心を刺激する極上のプレゼンテーションであったため、素晴らしいロールモデルを目の当たりにし、生徒たちは高い動機付けを得られた。

会場で国際的な雰囲気を作ることができた。外国人留学生には以下の英語版のルーブリックをもとに、各班を評価してもらった。



### (iv) コース別英語発表会リハーサル

今年度も英語でプレゼンテーションを行う意義をコース別発表会、本発表会双方で高めるべく、教育コースでお世話になった岩手大学教育学部教授の山崎友子先生のお力を借りて、岩手大学の留学生を招くことにした。留学生には各班の発表後に必ず英語で質問をしてくれるようお願いをしていた。そのことは生徒たちにも事前に連絡し、その準備をするよう確認しておいた。

### (v) コース別英語発表会

岩手大学から11名の外国人留学生を招いた。また、岩手大学教育学部の山崎友子ゼミに所属する日本人学生9名もあわせて来ていただき、各コースに必ず外部のオーディエンスがいる状況を作った。外国人留学生のみならず、日本人の学生達にも英語で質問や意見を言うってもらうことで、各

## Global Inquiry 2018

## Rubric for Presentation in English

## Evaluation Points

tandard	Excellent	Good	Fair	Needs Improvement
Score	4	3	2	1
<b>A</b> Content	The topic is interesting and logical, supported by well-researched and organized facts, and is easy to understand.	The topic is interesting and easy to understand, with sufficient facts and organization.	It is partly hard to understand the logic and organization of the topic.	It is hard to understand the overall topic.
<b>B</b> Validity	Able to give a unique, practical opinion with sufficient supporting evidence.	Able to give their own opinion with sufficient data.	Able to give their own opinion with insufficient data.	Just introduce what they have researched.
<b>C</b> Visual Aid	<del>Animation, graphs and charts are effectively used.</del> Graphs and charts are visually interesting and impressive to the audience.	Graphs and charts are effectively shown.	It is simple and easy to see; arrangement is organized but needs more charts and graphs.	Too much text; arrangement is out of order.
<b>D</b> Delivery	Presenters are very confident and can hold the attention of the audience with effective use of gestures and body language; voice projection is loud and clear.	Presenters are mostly confident and gestures and body languages are effectively used; voice projection is loud and clear.	Pay attention to the audience with sufficient volume of the voice.	Just read the script with insufficient volume of the voice.
<b>E</b> Usage of English	It is easy to understand with a good command of English; simple vocabulary is used and technical terms are explained.	It is easy to understand with appropriate usage of English; some technical terms are not explained.	It is partly hard to understand with mistakes in English usage and too many technical terms are not explained.	It is hard to understand because of the poor English.

どのコースでも、村尾氏から伝授された英語プレゼンテーションのコツを随所に盛り込んだ発表が多かった。また、外国人留学生からの活発な発言と質問もあって、非常に盛り上がりを見せた。

選ばれた各コースの代表は次の通り。( )内は、前年度の課題研究Ⅱ発表会で代表となった班である。

街づくり：104 班（104 班）  
観光：203 班・211 班（212 班・215 班）  
貿易：303 班（303 班）  
教育：404 班（410 班・412 班）  
知の拠点：504 班（505 班）  
医療：607 班（609 班）  
理数科：708 班（708 班）

代表に昨年度の発表会と同じ班が選ばれたコースが 7 コース中 3 コース、新たな班が選ばれたのが 4 コースである。研究の質が発表の質を決めるのはもちろんだが、新たなプレゼンテーションを作成するに当たって新たな見せ方を工夫した班も多く、結果につながった。

#### (vi) 英語発表会

昨年度 SG 課題研究 II で取り組んだ成果を、英語でプレゼンテーションし、国際的な発信力・コミュニケーション能力をはじめとしたグローバル・リーダーに求められる資質を涵養することを目的とし、課題研究英語発表会を行った。

外部からは、岩手県教育委員会から松本諭指導主事、本校 SGH 事業の運営指導委員である遠藤洋一氏、留学生および日本人大学生を招待する上でお世話になった岩手大学名誉教授の山崎友子先生の 3 名の来賓をお迎えした。また、岩手大学からは 10 名の外国人留学生、6 名の日本人学生を招いた。

前回のコース別英語発表会及びコース代表選考会を勝ち抜いた代表全 7 班が、英語で堂々とプレゼンテーションを行った。各班のプレゼンテーションは、村尾氏に伝授していただいたコツを随所に駆使し、英語でのプレゼンテーションながら、

聴衆の興味関心をうまく引きつけることができた。

各班がプレゼンテーションを行った後には、外国人留学生を中心として英語で質問が投げかけられた。生徒達はその質問の主旨を聞き取り、懸命に回答した。留学生の国籍も、アメリカ、中国、ロシア、ナイジェリア、インドネシア、タイ、パキスタン、トルクメニスタン…と多様で、その国毎に発音が特徴的な英語でやりとりができたことも、グローバル社会における英語の位置づけを考えるよいきっかけとなった。

今回の発表会では、ルーブリックにのっとり、オーディエンス全員による評価を行い、優勝班を決定した。以下の通りである。

第 1 位 708 班（理数科代表）

‘Modeling and Analysis of Congestion Phenomena’

第 2 位 104 班（街づくり）

‘Come back game solves the problem of falling the rate of population of the young’

第 3 位 203 班（観光）

‘The Research of Agritourism Using “Country Sense” in Iwate’





### 3 評価

一連の活動を終えた後、SG 課題研究 III に取り組んだ 3 学年普通科理数科を対象に、ルーブリックによる自己評価を行った。以下に自己評価に用いたルーブリックと、それぞれの項目の回答率を掲げる。

項目	内容	全体	評価				全体評価 (昨年度比)			評価別 (昨年度比)							
			4	3	2	1	30年度	29年度	差	4	差	3	差	2	差	1	差
A	研究内容	3.04	24%	57%	18%	0%	3.04	3.14	-0.10	29%	-6%	56%	2%	14%	4%	1%	0%
B	説得力	3.06	23%	61%	15%	1%	3.06	3.14	-0.07	29%	-6%	56%	5%	14%	1%	1%	0%
C	スライド	3.20	34%	54%	11%	1%	3.20	3.38	-0.17	48%	-15%	42%	13%	9%	2%	1%	0%
D	デリバリー	2.67	12%	44%	42%	2%	2.67	3.00	-0.34	28%	-15%	47%	-3%	24%	18%	1%	0%
E	英語	3.27	38%	51%	11%	0%	3.27	3.24	0.03	35%	3%	54%	-3%	11%	0%	0%	0%
F	協調性	3.23	44%	36%	18%	2%	3.23	3.21	0.02	40%	4%	35%	1%	23%	-5%	2%	-1%
G	主体性	3.17	36%	48%	13%	3%	3.17	3.19	-0.02	37%	-1%	45%	3%	16%	-3%	1%	2%

上にも述べたが、「スライド」については、昨年度と異なる点として、評価の「4」の内容を新たに「視覚的に聴衆を惹きつける工夫をしている。」としている。

### 4 成果と課題

全ての項目が4点満点であり、平均点がいずれの項目も3点を超えているため、自己評価はおおむね高かったと言えよう。しかし、昨年度との比較で見ると、かなりの項目で評価を下げている。

課題研究Ⅲは、内容がほぼ英語によるプレゼンテーションに特化していることから、項目C・D・Eの「スライド」「デリバリー」「英語」の評価に注目したい。その中では特に「スライド」「デリバリー」で自己評価が昨年より大きく低下しているのが目につく。

上記したとおり、担当者の変更もあり昨年度の課題研究Ⅱとの連携が問題であったと見ることができる。が、その一方で「研究内容」や「説得力」

ではさほどの低下はなく、「研究内容」ではルーブリックの評価基準として「新たな追調査結果を加え」「昨年度不十分だった箇所を補う」という点をあげていることから考えても、今年度中に昨年度までの研究内容のブラッシュアップはできたが、プレゼンテーションの改善は不十分だったと自認する生徒が多かったと考えることができる。これは、一つには授業時間内ではプレゼンテーションの練習時間を十分に確保できず、同時に各班が自由時間にそれぞれ準備するにはやりにくい内容であったこと、また、プレゼンテーションの改善を行うための仕掛けが不十分だったことが原因だったと考える。

しかし、「英語」に関する評価はほぼ昨年並みであった。これは、プレゼンテーション後の質疑応答の準備を、英語科と連携して授業時間内に行ったせいでもあるだろう。ただ総じて、課題研究Ⅲの時数だけでは間に合わないことも多く、他科目と連携してデリバリー技術の向上を図ることが課

題となる。

その他の課題を明確にするため、以下に自由記述欄に寄せられた生徒の意見を記載する。(クラス毎に掲載)

### 3-1

- ・とても充実した活動だった。しかしそれを「発表しうるものにする力」また「発信する力」が足りていない。
- ・先生が介入しない主体的な活動だからこそ、本人たちのやる気にかかっている。
- ・活動を終えるまで、なかなか活動に意義を見出せなかった。最初「こう役立つ」という具体例を挙げてほしい。
- ・先生方に SG の活動自体に興味を持ってない方がいる。
- ・プレゼンの講演会を 2 年生の最初にやってほしかった。
- ・理想論になってしまった。テーマが大きすぎた。
- ・班で同じ方向を見据えて活動するのが難しい。個人の活動をメインに行ったほうがよい。
- ・外国人留学生と直接話す機会を増やしてほしい。

### 3-2

- ・人との出会いを大切にしてほしい。サマースクールや研修ですばらしい大人たちと出会い、アワードで活動的な同年代と出会うことができた。
- ・他の高校の発表を見て、意欲の違いに圧倒された。
- ・はじめのテーマ決めがとても大事。
- ・様々な活動に参加する場を与えてくれて感謝する。
- ・3年間同じチームのほうがより濃い研究ができると思う。
- ・盛岡市の行政に関わらずに、自由度の高いほうがよい。
- ・フィールドワークの場が遠く、交通費がかなりかかった。お金をかけて行った甲斐はあったが、遠出をする班には、少しでも補助金が出れば行きやすい。

### 3-3

- ・一高に入学した目的の一つが SGH だった。活動を通して予想以上に学ぶことがあり、とても楽しかった。
- ・興味ある分野を 3 年間追究できたことは、今後社会に出て行く上で役立つと思った。
- ・先輩方の資料があればよかった。1・2 年生間の交流(例えば 2 年が 1 年にアドバイスするなど)ができたらいい。
- ・ネットで調べればわかることをわざわざ聞きに行くだけのフィールドワークは無駄。
- ・やっていて辛かったし面倒くさかった。
- ・3 年間同じ先生に担当してほしい。

### 3-4

- ・多くの班の研究内容が、ネットで調べれば誰でも思いつく案だった。優勝した班のようなオリジナルな案を出せる

ようにすればよい。

- ・コンピュータ室のプリンターを使えるようにしてほしい。
- ・班を分ける際、テーマにもよるが、理系文系をできるだけ混ぜたほうがよい。

### 3-5

- ・過去に先輩がやったものを引き継ぐという形で活動をスタートしてもよいと思う。同じテーマを何年か続けてもおもしろい。
- ・講演会は学びが多かった。
- ・もっとプレゼンのスキルをあげたい。積極的に外部のコンテストに出れば、学びが深まる。
- ・大学での学びは PDCA のくり返しだと聞いた。一高で大学の学びでの先駆けができたことを本当に嬉しく思う。
- ・研究の中で、今まで普通だと思っていたことがいろいろくつがえされ、発見の連続だった。
- ・コースがすべて文系的なものに偏っている。
- ・やらされている感の生徒が多い。
- ・作業の提出締め切りを考査前や直後にしないでほしい。
- ・各班の人数が少なく、フィールドワークなどが大変で、参加できないと申し訳ないと感じた。班の人数を増やしたほうがよい。
- ・留学生からの質問に対応できないグループが数多く見られた。実践的な英語能力とは何なのか。

### 3-6

- ・忙しい中での研究だったが、だからこそやり終えての達成感があった。
- ・上位大会や発表・交流会などに参加する機会につながると、やる気も上がる。
- ・自分たちのグループはうまくいかなかったが、他のグループの発表を聞くだけでもすごくいい刺激になった。
- ・先生も生徒も、最終的な目標がわかっていないように感じた。
- ・サマースクールのような合宿はどのコースも参加すべき。

### 3-7 (理数科)

- ・取り組みを始める前に、まずそれによってどんな力を身につけることが目的なのか、何のためにやるのかを、もっと具体的に明確にすればよかった。
- ・自分たちで一生懸命もがいて、そしてたくさん専門の人や先生に頼ること。
- ・理数科は、実用性よりも研究内容を重視して評価すべきだが、SGH の方は、実用可能性や有用性が重要だと思う。
- ・理数科の研究は、夏休みにどれだけ取り組めたかが決め手になる。
- ・十分な授業時間が確保されていない。
- ・理数科の取り組みも英語で発表するということが知らされてなかった。

- ・調べ学習とインタビューに終始し、発展的独創的な提案に欠けている。
- ・グローバルとうたいながら、この地域についての問題に限定されることにつまらなさを感じた。
- ・岩手大学さんの協力をもらって、大学についてはもちろん、どう接しどう振る舞えばよいのか、逆にどう接してもらえたときうれしかったかを学べた。
- ・SGH だからといって誰もが海外を志向する必要はなく、どのように世界と関わるかにもっと重点を置くべき。

探究活動を進んで行う意欲がある者と、意欲を持ってない者との差が大きい。意欲的だった生徒の肯定的評価も多いのだが、否定的な評価も一定以上ある。意欲的に取り組んだ生徒から、意欲のない生徒と協同して研究を進めなければならないことの苦労や不満を語られることもあった。そこで「やる気のある生徒だけの班をつくりたい」、または「テーマへの意欲があれば個人の探究活動を認めていい」という意見が出てくる。課題を自分のものとして捉えることができない班員が一定数生まれてしまっていたという反省がある。

それらの否定的評価を行った者、言い換えれば「やる気」のない生徒の感想を見てみると、テーマ設定の問題としてとらえている生徒がいる。その生徒たちは各自のテーマを、そもそも「興味のないテーマ」だった、または「テーマ設定をよく考えなかった」と述べ、だから課題が自分のものにならなかったと振り返っている。

しかしSGH 課題研究を「グローバル課題の解決」をめざすためにローカルな問題に取り組む活動としてとらえるならば、テーマが自分の課題にならなかったのは、テーマ設定の問題ではなく、活動の意義づけができなかったから、と言えないだろうか。テーマが問題解決だという認識があって、そこに解決しなければならない問題があれば、それが必ずしも自分の元来の興味とそぐわなくても、

その意味を見出すことはできるはずだ。それらの生徒に関しては、今年度当初の目標であった、「各自の研究とグローバル課題の接続」ができなかったのだと反省する。

目標の確認と活動の意義づけは、探究活動においてこの上なく重要である。SGH 課題研究の新たなスタートにおいて、改めて確認したい。



## V 平成 30 年度 SG 海外フィールドワーク台湾研修

### 1 はじめに ～ポストンから台湾へ～

これまでポストンをフィールドに 3 回の海外研修を実施し、国際的な機関等との定常的な連携については一定の成果を得てきたところであるが、今後はより生徒個々が取り組む課題研究と連動した海外における現地調査等を重視するため、日本と同様のグローバル課題を多く抱えるアジア圏の台湾に研修先を変更し、研修内容の深化を図りたいと考え、研修先を変更した。

また、SGH 予算の縮小に伴い、生徒の研修費の負担軽減を図るとともに、SGH 指定終了後も継続的に海外研修を実施できる環境を模索することも変更理由の一つである。

### 2 なぜ今台湾なのか

#### (1) 最も身近な外国 台湾

岩手県を訪れる外国人の 5 6 % が台湾から

#### (2) 岩手県が台湾との交流を重視

- ・知事が定期便就航に向けトップセールス
- ・台湾への輸出促進のため県が支援
- ・教育長が防災教育をテーマに訪台

そこで盛岡一高との交流について言及

#### (3) 岩手と台湾との深い関係の歴史

台湾は日清戦争後、日本領土となるが、統治に当たり台湾総督を軍人とするか、民間人とするかが大きな課題であった。

当時外務省通商局長、原敬（盛岡市出身）は民間人とする立場を表明、大正 7 年 9 月、首相になってそれを実現し、民間人の後藤新平（水沢市出身）が台湾総督府民政長官として就任し大いに力を発揮した。台湾の基盤整備を推進した功績は、台湾の人たちに今も語り継がれている。

後藤新平が手がけた仕事の中に旧慣調査会を通じての調査事業がある。この調査会幹事長は、伊能嘉矩（遠野市出身）であった。伊能嘉矩は「台湾文化志」という大著を世に送っている。伊能の著作集は台湾研究者にとって必読の文献として国際的に評価されている。

新渡戸稲造（盛岡市出身）は台湾総督府に初めは技師として務め後に臨時糖務局長に昇任し、糖業を通じて台湾農業の振興に大貢献した。

岩手医科大学初代学長の三田定則（盛岡市出身）は戦前台北帝国大学に医学部を創設し初代学部長となり、後に総長となった。台湾医学の基礎づくりと発展に大いなる貢献をし、今も「医学の三田」と評されている。

このように、岩手の先人達が台湾の発展に大きく関わってきた。

### 岩手と台湾との深い関係の歴史



### 3 台湾研修にかかわる事前現地訪問

台湾での海外研修の実現に向け、前年度の 2 月に担当者が直接台湾を訪問し、現地の大学や高校に協力の依頼をした。

#### (1) 訪問日時

平成 30 年 2 月 22 日（木）～23 日（金）

#### (2) 訪問した大学及び高校

2 月 22 日（木） 花蓮 東華大学及び四維高級中学、慈濟大学付属高級中学

2 月 23 日（金） 台北 台湾大学、政治大学及び建国中学



### 国立政治大学での協力依頼

日本教育団体訪問申し込み表

団体名	岩手県立盛岡第一高等学校		
住所	岩手県盛岡市上田三丁目2番1号		
責任者	名前	校長 川上 圭一	
	メールアドレス	ptf58-k-kawakami@iwate-ed.jp	
連絡者	名前	佐藤 幸久	電話 019-623-4491
	メールアドレス	ptf2-yukihisa-sato@iwate-ed.jp	
訪問予定団体日程及び時間	1. 花蓮・東華大学: 2018年2月22日13時至14時 2. 花蓮・慈濟大学付属高級中学: 2018年2月22日14時至15時 3. 花蓮・四維高級中学: 2018年2月22日15時至16時 4. 台北・台湾大学: 2018年2月23日10時至11時 5. 台北・政治大学: 2018年2月23日11時至12時 6. 台北・建國中学: 2018年2月23日14時至15時		
団員名簿 (添付ファイル可)	役職名(仕事内容)	名前	性別
	副校長	坂本美知治	男
	教諭(SGH推進課)	佐藤幸久	男
団体紹介	本校は明治13年(1880年)の開校以来、本年で創立137周年を迎える男女共学の伝統校です。校訓の「忠実自強」(真心で自ら努め励むこと)「質実剛健」(飾り気がなく心がしっかりしていること)の精神を受け継ぐ幾多の先輩諸氏が様々な分野で活躍しています。創立100周年を機にスタートし、今日も続いている生徒海外派遣事業に加え、平成27年度には、文部科学省のスーパーグローバルハイスクール事業の指定を受け、生徒一人ひとりが以前にも増してグローバルな視野を備えることができるよう新たな取組にも着手しています。この成果をさらに発展させるべく、来年度から台湾での海外研修を計画しております。 ホームページ: <a href="http://www2.iwate-ed.jp/mo1-t/">http://www2.iwate-ed.jp/mo1-t/</a>		
交流形式及び内容	形式: 学校訪問 内容: 海外研修のための協力依頼		
スケジュールと交通手段	日期	行程	交通方式
	一日目(2月21日)	花巻-台北	飛行機
	二日目(2月22日)	台北-花蓮往復	鉄道
	三日目(2月23日)	台北市内滞在	タクシー等
追伸	現地大学及び高校への訪問の際に、担当者にご同行願えれば幸甚に存じます。		

\*台北駐日経済文化代表処(日本における大使館に該当する機関)へ提出した申し込み表

4 派遣生徒選考

派遣生徒選考に当たっては、3年間にわたりSG課題研究に取り組む明確な意思の有無を最優先とし、応募書類の審査、個人面接(自己紹介、これまで取り組んできた研究内容、海外研修で何を学びたいかなどについてプレゼンテーション)、校外での活動(ボランティア、フォーラム、シンポジウム、研究会への参加)も含め総合的に適性を判断し、派遣候補生徒を決定した。

右記の資料は、面接前に事前に配布した選考についての資料である。結果として、主体的に取り組むことができる、コミュニケーション能力の高い生徒を選考できた。

SG海外フィールドワークの選考について

SGH推進課

選考の方法および評価するものについては、募集要項のとおりです。

なお、SGH事業の趣旨に従い、今回の選考では自己PR(生徒の書類・プレゼン)を重視します。書類とプレゼンの評価規準については表のとおりですので、これから我々が求めるレベルを読み取り、準備を進めてください。  
 資料から情報を読み取る方も重視しているため、評価規準(資料)に関する質問には一切答えません。応募者ひとりひとりで準備を進めましょう。

この準備だけでも自分の力を高められるはずで、求められたレベルにどう応じられるか、筆記試験の点数では計り切れないあなたたちのポテンシャルに期待しています。

○書類について(個人面接日の全体説明終了後に提出を求めます)

1年生はSG課題研究Ⅰ、2年生はSG課題研究Ⅱで現在取り組んでいるフィールドワーク計画を説明する。

A3片面で様式は任意であり、様式で加減点は行わない。  
 PCで作成した印刷物でも手書きしたものでもよい。イラストを描いても写真も貼付してもかまわない。

○プレゼンテーションについて

本校HP所載の記事より、過去2回のSG海外フィールドワークのプログラムを理解し、力を入れて取り組みたいプログラムを選び、質問点や質問したいことおよび活動から得たものについてプレゼンテーションを行う。

制限時間は【3分以内】とし、PCやプロジェクトの使用は認めない。A3以内の紙の持ち込みと使用は認める(枚数不問、キーワードやイラストで紙芝居にして可)。ただし、紙の持ち込みによる加減点は行わない。

SG海外フィールドワーク選考規準(ルーブリック)

生徒の書類	評価項目	※各欄「+」は「あり」を意味する		
		A	B	C
探究可能性	A	PWとテーマの整合+ 仮説を検証するPW+	PWとテーマの整合+ 仮説を検証するPWになっ ていない、または「知るこ と」が目的となっている。	テーマの整合なし。 そのテーマでなぜそこに行 くのか、PWの意義が感じら れない。
	B	論拠を挙げた 情報の分析+	論拠を挙げた+ 単一の情報を集め込み、 収集した情報を分析・解釈 していない。	思い込み 意見や仮説を述べるだけで 根拠がない。
	C	PW事前調査+ PW計画の有効性+	PW事前調査+ PW計画とテーマとの関連 が深い、またはPW計画が現 実的でない。	PW事前調査不足。 資料やwebサイトで調べられ ることを調べていない。
	D	見出しの有効性+ 知的興味を表現する+	見出しの有効性+ この探求のどこがおもしろ いのか、要点が不明または伝 わらない。	見出しまでおもしろい。 見出しだけでも全体を 把握できる。
プレゼン	A	*当事者意識+ 自発的探求+	*当事者意識+ 疑問・質問が、覆れば解 決できるレベルである。	*当事者意識なし。 自分の探究心を深める疑 問・質問ができていない。
	B	社会や世間への貢献+ 上記の発展性+	社会や世間への貢献+ 課題解決や持続的発展へ の意識が見られない、また は説得力がない。	将来の社会貢献につなげる 意識が見られない。 関心が個人にとどまる。
	C	*ポイントフォーカス+ 対話的発信+	*ポイントフォーカス+ 伝えるばかりで、聞き手の思 考を促す工夫や努力がな されていない。	主題やメッセージを最初から言っ たので、最後まで聴かない という聴き手が少な い。
	D	3分以内+	3分以内+ 規定時間超過につき減点。	1分を超過。 失格(プレゼン0点)

5 SG海外フィールドワーク台湾研修概要

(1) 台湾研修が事業計画に及ぼす影響及び期待される効果

本校が設定した課題研究の6つのカテゴリに関連した岩手県が抱えるグローバル課題についての研究は、台北の政治大学、花蓮の東華大学との連携により、ボストン以上に深めていくことが可能である。また、現地におけるフィールドワークや現地高校生との共通のグローバル課題を通じたディスカッション等により、主体的、対話的で深い学びが可能となるものと捉えている。

(2) 研修目的

- i) 生徒個々の課題研究を深化と持続可能な交流
  - ・岩手県が抱えるグローバル課題についての研究を、台北の政治大学、花蓮の東華大学との連携により深める。(大学の教授による指導を受ける)
  - ・生徒個々が取り組む課題研究と連動した海外における現地調査を実施(台湾の留学生と協同でフィールドワークを行なう)
- ii) 一過性の交流ではなく一生涯続く関係の構築
  - ・現地高校生との共通のグローバル課題を通じた

ディスカッション（慈済大学付属高級中学・政治大学付属高級中学との交流）

(3) 日 時

平成30年11月10日（土）～11月24日（土）  
15日間

(4) 派遣者

2年生	阿部 祥子	五十嵐 優姫
	昆 亮太郎	石川 芽生
	工藤 朱莉	
1年生	大平 愛依	澤村 颯季
	内山 瑛葉	金村 璃歩
	吉田 美紅	沼崎 幹太
	松田 朱里	

引率者 佐藤幸久  
目時和哉

(5) おもな研修先および研修内容

i) 東華大学（花蓮市）

オリエンテーション、キャンパスツアー、  
特別講義への参加（大学生とのグループワーク）

ii) 慈済大学付属高級中学校（花蓮市）

歓迎セレモニー、授業参加、カンフー体験、  
交流会

iii) 政治大学（台北市）

オリエンテーション、キャンパスツアー、  
特別講義①～④、本校生徒によるプレゼンおよびその指導、フェアウェルパーティ

iv) 留学生との現地フィールドワーク（台北市内）

留学生とのフィールドワーク計画の作成、3  
班に分かれての市内フィールドワーク、フィール  
ドワークの成果まとめと発表

v) 政治大学付属高級中学校（台北市）

歓迎セレモニー、VR体験授業、拓本授業、  
動物園見学、キャンパスツアー、両校による課  
題研究プレゼン発表、フェアウェルパーティ

vi) JTB台湾

研修の成果を日本語でまとめたプレゼン

## 6 研修の成果と課題

今回の研修目的は、生徒個々が取り組む課題研究と連動した海外における現地調査を実施と、海外の協力校との継続的な関係構築の2つである。

台湾においては事前にアポイントメントを取る調

査は難しいということで、街頭でのアンケート調査が中心となった。果たしてうまくいくのかどうか心配したが、生徒の主体的な取り組みと留学生の協力により、実現できた。海外における現地調査を研究に反映させるという目的は達成できた。

花蓮市の慈済大学付属高級中学校との交流は充実したものであり、1日というわずかな時間でありながら、別れ際には涙を流す生徒が出るほど、密度の濃い交流ができた。慈済大学付属高級中学校の校長先生からは、相互交流を進めいずれば姉妹校にというお話もいただいた。海外の協力校との継続的な関係構築についても、成果があった。今度は受け入れ側として、国際交流に積極的にかかわる必要があるのではないだろうか。

しかし参加した生徒が、積極的に研修に取り組み、課題研究の内容、プレゼンにおいても成果を挙げ、生徒個々が大きく成長したことが何よりの成果である。

今回の研修では、研修先に対しての事前の研修目的の共有がうまくいかないところもあり、現地で戸惑うことも多々あった。研修先も含めた研修目的の共有が今後の課題である。しかし、今回経験したこと、培った人脈等は、次回の研修計画の作成に大きく反映できると考える。本校の主体的な研究計画の作成が可能になったことも今回の成果であり、次回研修にむけて準備していきたい。



台北駅構内の岩手の広告

## 6 経過報告

11月10日 第1日目

15時花巻空港集合、生徒たちは全員が余裕をもって到着していた。これから2週間、安心して見られそうである。

保護者の皆様に見送られながら、滞りなく手続きが進み機内へ。なじみのある花巻から出発するためかかには実感が湧かないものの、極めて個性的な機内食を食べるにつけて、台湾へ行くのだということを感じ知らされる。

ほぼ予定どおりに到着したものの、入国審査には長蛇の列。ホテルにたどり着いたのは現地時間の23時頃であった。

空港から台北までの小一時間ほどのドライブの間にも、目に飛び込んでくる夜景に生徒たちからは感嘆の声が上がり続け、テンションは高まる一方であるが、明日以降の濃密なプログラムに備え、この日はそのまま解散・就寝となった。

10月11日 第2日目

今日から本格的な台湾生活が始まることになった。本日の予想最高気温は30℃に迫るといって岩手県民にとっては信じがたいもの。

午前中はホテルに荷物を預け、地下鉄の乗り方練習も兼ねて故宮博物院へ。予定より少し早く出発し、3時間弱は確保できるよう努めたのだが、それでも足りないほどのボリュームだった。展示の中で清の次が中華民国に変わり、現在に至っている年表を見るにつけて、日本の中学校などで「清→中華民国→人民共共和国」などと暗記させられたのとは異なる歴史の中を台湾の人々は生きているのだということを感じ知らされる。

その後ホテル周辺で思い思いにランチ。日本語・英語ともに通じない店もある中、生徒たちは果敢にチャレンジをして、名物のおいしい牛肉麺などを食していた。

食後荷物を持って花蓮駅へ。列車が脱線する大事故が起きたまさにその路線ということでやや心配された鉄道での移動であったが、件の事故現場も気が付くと通り過ぎており、2時間余を経て何事もなく花蓮に到着した。

海沿いの町である花蓮はやはり海の幸が豊富であ



図1 故宮博物院前で初めての集合写真

り、この日は海鮮レストランで夕餉。ホテルに到着し解散した後、生徒たちは2日後花蓮の高校で行う学年毎のプレゼンテーションの準備に精を出していたようである。

いよいよ明日から本格的な大学生・高校生との交流、そして主題であるフィールドワークが展開していくこととなる。

11月12日 第3日目

花蓮における交流1日目は、バスで国立東華大学へ。東華大学は1990年代前半に設立された若い大学だが、文学部については台湾随一であり、近年は国際化にも力を入れているようである。

到着後、国際交流担当の職員と、ガイドをしてくださる学生の方々が歓迎のセレモニーを開いてくださった。生徒たちはやや緊張気味だったものの、続く大学案内に移ると、雄大な自然の中、野球場300個分に相当するという敷地に展開するキャンパスに歓声をあげながら、少しずつ大学生とのコミュニケーションを試みはじめる。

昼食をはさみ、午後は大学の教授による特別講義。50名程度の大学生たちとともに、日本と台湾が共通して抱える課題である高齢化に関して、2030年における自己をとりまく状況と、予想される困難に対して何をすべきかということ、グループワークを通して学んだ。同年代の台湾の学生たちと交流する初めての機会となったが、グループワークで知り合った学生と記念写真を撮り、それをSNSで交換したり、フィールドワークへ向けて調査内容に関する中国語の文章を添削してもらったり、早速意欲的に交流する姿が見られた。



図2 東華大学学生とのグループワーク

計画段階では少々物足りないのではと案じていたところもあったが、全体を通して見ても交流活動の初日に行う内容としてはちょうどよいボリュームだったのではないかと感じる。そしてこちらが予想していた以上に、大学の側もしっかりと歓迎・対応してくださっていた。

ホテルに戻り小休止した後、ホテル内のレストランで夕食。スタンダードな中華料理だったが、大変食べやすく、またボリュームもあり、ついつい食べ過ぎてしまう。

花蓮での短い滞在も明日までということで、本日はさらに、初めての台湾の夜市の散策。岩手で言うところの神子田の朝市が夜に開かれているようなイメージであり、周辺の住民や観光客で月曜の夜から大変にぎわっている。生徒たちは思い思いに食べ歩きをしたり、お土産を吟味したり、初の夜市散策を存分に満喫した模様。

明日はいよいよ本校生徒による初めてのプレゼンテーションを迎える。

11月13日 第4日目

花蓮最終日の今日はバスで慈済大学附属高級中学（日本でいう高校）へ。

慈済大学は大きな附属病院を抱える医学部を持つ大学で、幼稚園からのエスカレーター式。仏教系であるところに特色があり、その利他的精神に基づき、幼稚園でも先日のインドネシアの地震・津波被害に対するアクションを起こしたという。

到着してみると、玄関には中華民国と日本の国旗が飾られ、本日バディとして本校の生徒一人ひとりとペアを組んでくれる学生たちが歓待してくれた。



図3 慈済大附属高級中学におけるプレゼン

歓迎のセレモニーでは校長先生から歓迎のお言葉をいただいた後、両校生徒が自身の学校に関するプレゼンテーションを行った。本校では1年生が担当し、本校の概要をコンパクトに紹介してくれた。

その後記念品の交換と記念撮影を済ませ、3つのグループにわかれて午前中のプログラムである授業体験へ。Aグループは生物の実験で魚の解剖を、Bグループは第二外国語としての日本語の授業に日本語のスペシャリストとして参加、Cグループは台湾料理の調理実習と三者三様であった。報告者は主にCを参観していたが、授業は100%中国語で行われたものの、細やかに配慮していただき、大きな難もなくこなせていた（ちなみに本日のメニューは花蓮周辺でよく食べられているという野菜を用いた炒め物と、キクラゲ・唐辛子入りの卵焼きだった）。

昼食の弁当は仏教系の学校というだけあって、肉を一切使わないものだったが、日本の精進料理より見た目も鮮やかで、さっぱりとして食べやすい。

午後は本校生徒とバディの学生たち全員で「カンフー体験」へ。動きやすい恰好への着替えが求められたため、ハードな運動も覚悟していたものの、やはり1時間では到底カンフーの本質を伝えることはできないとのことで、先生の妙技を見守り、拍手を送る時間が大部分を占めていた。ただ、ヌンチャクを振り回して思い切り自分の身体を打撃することで、生徒たちはいくらかカンフーの神髄を味わえたのかもしれない。

最後に本校生徒によるプレゼンテーション。40分の時間が用意されていたので、2年生が岩手県の紹介を、さんさ踊り体験のアトラクション付きで行った。出発前は課題研究のプレゼン準備に追われ、こ

ちらの発表まで手が回るか心配していたものの、それが全くの杞憂であったと思わせるほどの堂々たるプレゼンテーションであった。台湾の学生たちもしっかりと踊りの輪に加わってくれ、予想した以上の大成功に終わった。それに対し、台湾の学生からもダンスや本日の感想のスピーチの披露があり、あっという間に全行程が終了、別れの時を迎えることになる。

本校の側では俄かに号泣し始める者、それにつられて涙する者（引率者含む）、それを見送る学生さん側も走り出すバスを追いかけていつまでも見守ってくれる者と、今朝会って、たった数時間しか共有していないとは思えないほど濃密な別れの場が展開された。

個人的な印象ではあるが、欧米圏の高校生とはお互いがここまで深く短時間で歩み寄ることはできないのではないかとも思う。それぞれがそれほど流暢でなくともでき得る限りの英語で意思を交わし合い、別れを惜しむ。並々ならぬ歴史的因縁を持つ日本と台湾の高校生が、これだけフラットな関係で交歓できたということに、大きな感動を覚えた。

学校を出たバスは花蓮の駅へ向かい、再び鉄路で台北へ。これから10日間強の我々のベースキャンプとなる政治大学の寮に到着したのは八時を回る頃。その様子についてはまた改めて紹介したい。

11月14日 第5日目

今日から政治大学での特別講義。一日の始まりはドミトリー初の朝食から。各部屋に届けられるということで、どんなものがお出ましするのか待ち構えていると、届いたのは小さい小箱とクッキー、そして紅茶。昨日までのバイキングと比べると見劣りするの否めないものの、この後の展開をふまえると、けだし適量であった。

午前中は10時からドミトリー一階の会議室にて、政治大学でのプログラムのコーディネーターの方々より、ドミトリーの使い方と政治大学の概要に関するオリエンテーション。政治大学は台湾大学と並ぶ国立大学の雄で、特に文系が強いということから、日本における一橋大学を彷彿とさせる。

説明に続きその政治大学の附属ドミトリーである宿所の案内。ドミトリーとはいえ、実質ホテルと変

わらない設備・清潔さである。ランドリーも各階にあり、洗濯・乾燥ともに一回40円程度。早速洗濯にいそしむ者多数。

寮内の案内が終わると、続いてはキャンパスツアーへ。出がけにタピオカミルクティーをサービスしていただき、それを片手に構内を歩くという心憎い仕掛け。しかもそのミルクティーが朝食の少なさを補って余りある味とボリュームであった。

政治大学の敷地はあまりにも広大過ぎて、山の上のキャンパスとの間にシャトルバスが運行されているとのことであった（片道約4円）。

周辺には大学生向けの食堂が立ち並び、その中にはマクドナルド・セブンイレブン・ファミリーマートに吉野家と、日本でもおなじみのチェーン店が立ち並び、食事探しに苦労することはなさそうである。

寮に帰り着くと昼食にどっさりとピザが届く。14人にはちょっと多いかという量のピザたちをやっと半分強片付けたかなという頃になって、朝食よりもはるかに多い量のサラダ+サンドイッチのボックスが一人一個ずつ投入され、我々日本人は本日も台湾風おもてなしの豪快さを思い知らされることになる。

午後には政治大学でソーシャルメディアからVRまで先端的な社会学を専門としているリン先生による初めての講義+生徒のプレゼンを迎えた。最初に2年阿部・1年内山班が、コミュニティの再構築におけるSNSと郷土芸能の可能性について、続いて2年工藤・1年大平班が、インバウンド対策におけるスポーツとSNSの活用可能性についてプレゼンを行った。両班ともに、日本での練習ではたどたどしかった10分に及ぶ英語原稿によるプレゼンを、それなりに流暢にこなせるようになっていた。見えないところで練習を積み重ねてきた証であろう。

その後はリン先生による講義に移る。台湾におけるSNSの実態を詳細かつ多面的に講義していただいた。日本でも現在の政治の在り方が「劇場型」などと揶揄されているが、台湾では劇を演じる場がすでにSNS上に移行しつつあるようだ。また台湾において全体の約1割に及ぶ人々のSNSを利用する動機が、「周りに取り残されないようにするため」という、潜在的な強制性から来ているという指摘については、日本（の高校生）にもそのまま当てはまるのではないかと思われた。



図4 リン先生による講義

この講義の間、絶え間なく注ぐ英語のシャワーを浴びつけ、終了後はみな脳が疲労困憊していた。しかしながら、この困難さを味わうことこそが海外研修の醍醐味の一つである。生徒たちにはひるまずにこのシャワーに飛び込んでいってほしい。

11月15日 第6日目

朝食の後、政治大学のキャンパスに移動し、丸一日の特別講義へ突入。

午前中は日・台・中の関係史を専門としている石原忠浩先生による「日台関係の発展と現状」に関するレクチャー。冒頭では2年石川・1年澤村班によるインバウンド対策におけるSNSの活用をテーマとしたプレゼンテーション。相手を見ながら話す、問いかけをする、隣同士の思考を促すなど、こちらでは特に指導していない聴き手への配慮が随所に散りばめられた堂々たるプレゼンテーションであった。生徒の潜在能力の高さと、見えないところでの努力がよく伝わってくる。

続く講義の部では、歴史を軸として日台関係の基礎的展開を分かりやすく教えていただいた。個人的になぜ（日本から一方的に国交断交までしているのに）台湾の人々がこれほど親日なのかというのが長らく疑問だったが、戦後（日本の統治からの解放後）、国民党という外来の人々による支配を経験している台湾では、それに対する反発から日本統治時代が「昔はよかった」と懐古されたことで、韓国や中国に比べて反日感情が薄いという説明をいただき、長らく抱えてきた疑問が一気に氷解した思いだった。

午後は京都大学の博士号を持つ李先生による、「婚姻・職場における男女平等に関する日台比較」をテ



図5 政治大学におけるプレゼン

ーマとした講義。冒頭では金村・松田の一年生コンビが、性差に配慮したワークライフバランスの実現に関するプレゼンテーションを行った。2年生は昨年度の課題研究で、既にフィールドワークからプレゼンテーションまで、一連の流れを経験しているが、その経験を持たない1年生が独力でプレゼンを1から準備するには、色々な苦労があったであろう。それを乗り越えた経験を糧に、学校に戻った後も学年の課題研究を牽引していってほしいものである。

プレゼン後の講義では日本と台湾、それぞれの社会における女性の役割・生き方の違いについて、興味深い講演をいただいた。共働きの多い台湾では、日本における「男性は皿洗いを、女性は調理を」というような性差に基づく役割分担はさほどなく、とにかく効率を重視して家庭内での仕事が割り振りされるということであった。

本日はお二人の先生ともに日本語が堪能ということで、生徒たちは昨日以上に積極的な質疑やフィールドワークを見越した情報収集を行っていた。生徒たちにとって、日本では基本的にインターネットなどの世界であった台湾が、少しずつ実体としてその輪郭をとらえることができるようになってきている気がする。

講義終了後はドミトリー周辺で思い思いの時間を過ごすことに。今まで落ち着いて歩くことがなかった政治大学周辺の散策や、メンバー間の交流に多くの時間を充てることができた。

11月16日 第7日目

政治大学プログラム最終日。

午前中は「日常生活の小さな違いから民族性の差

を垣間見る」という題で、言語学を専門にされている葉先生から講義を受けた。本日は特別に先生の下で勉強している政治大学の学生8人も同席し、講義の合間に彼らとの交流を深めることもできた。

冒頭には2年五十嵐・1年吉田班による、空き家を活用したコミュニティスペースの設立を軸としたローカルなコミュニティの再構築に関する提案が。アニメーションの細部まで凝って作られたスライドをもとに、前日同様高水準のデリバリーが展開された。ただしよくよくその後の講義を聞いてみると、個人の独立性が強い台湾では、そもそもローカルな共同体自体の存在が希薄であるという。だからこそ新たな共助モデルとして提案可能なのかもしれないが、こういった日本にはなかなか掴みきれない肌感覚を直接学ぶことができるということが海外FWを行うことの意義なのだろうと思う。

そこから葉先生の講義へ。先生の専門は前述のとおり言語学であるが、ある集団の思考・ふるまいは、母語の特性により強く影響づけられるという「サピア=ウォーフ仮説」なるものに基づいて、形を重んじる日本（語）とそうでない台湾（中国語）という二分法から、両者の衣食住の特徴の由来を見事に説明し切っていた。先生自身が東北大学で学位を取得し、日本・日本語に精通しているだけあって、説明は非常に明快で、生徒たちは大いに知的好奇心を刺激されていた。

そして最後に全体の締めくくりとして2年昆・1年沼崎班による、6次産業化やテクノロジーを活用したワークライフバランス実現の可能性に関するプレゼンテーション。

特に2年生の昆は、一切原稿を見ずに流暢な英語で伝えきり、日本ではややとどたどしいところもあった沼崎も、負けじと食らいついていた。プログラムのまとめとなる堂々としたプレゼンテーションであった。

この午前をもって、政治大学の先生方による講義と本校生徒によるプレゼンテーションの部は終了となり、午後はコーディネーターを務めていただいた二人の女性の職員の方と、フェアウェルティーパーティーへ。

会場はバスとロープウェーを乗り継いで小1時間ほどかけて行った猫空というエリア。山地の寒冷な

気候を利用して栽培されているお茶が有名で、山頂周辺には多くの茶寮が点在している。そこで昼食兼お茶会を。

二人のコーディネーターの方には、本当に丁寧な対応をしていただいた。特に見た目も中身もパワフルな方は、政治大学に勤める前はヨルダンでアラビア語を学び、難民キャンプでも働いていたという。（それ以前もウクライナやロシアなど各地を転々とされたそうである。）「そこではタフにならなきゃ生きていけないのよ。」そんな風におっしゃっていたのが印象的だった。「だから（世界のあちこちを渡り歩いてきた）私は、出会った子供たちにどんどん外に出ていきなさいと言っています。」そんな風に語るグローバルな背景を持つ彼女との出会いも、一つのこの旅の幸運だったのではないかと思う。

15日の研修も早7日が経過し、折り返しを迎える。そのタイミングで、本研修の要でもあるFWによいよ明日から突入。後半ではどんな出会いが待ち構えているのか楽しみである。

11月17日 第8日目

本日は一週間を経て初めての本格的な雨降りの日となり、予想最高気温も23℃止まり。とはいえ盛岡の2倍ほどもある。

3日ぶりに会うガイドの黄さんと、8時にドミトリーを出発。台北市内の貸会議室にて、本日から始まるフィールドワークプログラムの顔合わせを行う。日本人・台湾人・フランス人それぞれ1人、合わせて3名の方がコーディネーターに、そして台北市内の大学に通う3人の留学生の方々が、ツアーリーダーとして生徒のフィールドワークに同行する。

3人の留学生は出身国（アメリカ・インド・ベトナム）も所属する大学もバラバラ。台湾だけでなく世界各地の国の状況もあわせて知れるように、との配慮のようである。

生徒は4人ずつ3つのグループに分かれ、それぞれに一人留学生がツアーリーダーとして加わる。フィールドワークを行うに当たり、よりしっかりとチームビルディングを行うため、終日会議室において、英語によるグループワークを行った。

まず午前中は前半の研修の振り返りを兼ねたアイスブレイクを経て、3人のグループリーダーそれぞれ



れに対し、自分たちの問題意識とフィールドワークの計画についてプレゼンを行う。予定していなかった突然のプレゼンということで少々戸惑ったものの、何とかこなすことができたのは昨日までのプレゼン練習の成果によるものであろう。

その後コーディネーターより、台湾に関する基礎知識のレクチャー。生徒たちが掲げたテーマに関連する内容が網羅されており、配慮いただいていることが感じられた。

ここで昼食時間になり、生徒たちはグループ毎に、リーダーとともに昼食場所を求め周辺を散策。報告者が同行した班は2・3軒候補を巡った後、パイコー麵が看板の中華料理屋に。日本ではもっぱらパイコー麵が有名だが、台湾ではピビンバみたいなご飯の上にパイコー（豚のから揚げ）を乗せて食べる、パイコー飯なるものもある。

昼食を終えて戻ってくると、いよいよ本題であるフィールドワークの計画へ。改めて解決すべき課題を確認し、その解決へ向けた仮説を提示、その仮説を検証するために台湾で何をすべきかを、これまでの一週間の経験を踏まえて再構成した。

そしてそれに従って、グループ毎に3日間のフィールドワークのプランを作成、グループ毎に発表し、全体で共有して本日の全行程が終了となった。

昨日の講義にあったとおり、形・予定にこだわる日本人に対して、それにとらわれない台湾の人々。突然の予定変更や、出身国特有のクセのある英語の聞き取りに悪戦苦闘しながらも、自分たちが行いたいことを実現していくことによって、生徒たちはグローバルな世界の中で生き抜くためのタフさを獲得していくことと期待したい。



図6 フィールドワーク計画の策定

帰りは台北の街中で解散し、思い思いに散策しながら、郊外にある政治大学のドミトリーへ。21時の点呼時には皆しっかりと集合していた。

11月18日 第9日目

気が付けばこの旅も半分以上のスケジュールを消化したことになる。今日から本格的なフィールドワークが始まる。8時過ぎにドミトリーを出発し、待ち合わせの駅へ。そこから3つのグループに分かれ、ツアーリーダーのガイドで、それぞれの計画に沿って台北市内各地で調査を行う。

本日は報告者が同行した阿部・五十嵐・内山・吉田班の一日を紹介する。

このグループのテーマはコミュニティ形成である。一方の班は伝統的な産業や芸能を活用したコミュニティ形成の可能性について、もう一方の班は希薄といわれる台湾の地縁的コミュニティへの帰属意識の実態について聞き取り調査を行った。

両班ともに調査を希望する内容をスケッチブックに中国語や英語で記した上で、該当する答えの欄にシールを貼ってもらうという形を取る。

路上で見ず知らずの人に声をかけて何かを調査するというようなことは、大人ですら経験したことのある方が少ないであろう。出発前は異国の地での街頭調査が本当に遂行できるものか随分と気を揉んだが、意外なほどスムーズに入っていくことができた。

聞き取りを行う場所の選定も適切であった。偶然ではあるが、全てのグループが最初に選んだのは大安森林公園という台北を代表する公園の一つ。自然豊か（あちこちを野生のリスが走り回っている）であり、かつ子供用の遊具も充実しているということ



図7 大安森林公園での聞き取り調査

で、日曜ともなれば多くの家族連れや学生の団体、老夫婦まで、あらゆる年齢層の人々が集う。

ツアーリーダーから「座っている（時間がありそうな）人たちをターゲットにせよ」というヒントを得て、実行した結果それが大当たり。ほとんど断られることなく、一時間程度の間には20人近くの方々から回答をいただくことができた。その後台湾博物館で台湾の自然史・歴史（当該博物館の前身の設立者の一人ということで本県出身の後藤新平の像も飾られていた）双方を学んだ上で、剥皮寮歴史街区という清朝の面影を残す町並みが残る地区へ。そこでひよんなことから台湾の人々に本校の第10応援歌を披露することに。これがその後の展開を大きく左右するものになるとは誰も予想だにできなかった。

周辺で昼食を摂った後に、台湾最大の繁華街である西門へ。若者を中心にあらゆる世代の人々がごった返すこの地区でも聞き取りを行う予定だったが、選挙を一週間後に控えた日曜日ということで、そこかしこでイベントが行われており、とてもじゃないけれど行きかう人々を呼び止められるような雰囲気ではない。ここでの調査を諦めかけたその時、聞き取りに必要な2冊のスケッチブックのうち1冊が無くなっていることが判明。この広大な都市の中で見つけるのは不可能だと、絶望的な気分になった。しかしよくよく考えてみると手放すタイミングは一つだけ。第10応援歌を披露したときである。

場所がほぼ特定されたことで、まずはプランに沿って最後の目的地である「中正記念堂」に向かい、全行程が終了した後スケッチブックの回収に向かうことに。中正記念堂はいってしまえば蒋介石を礼賛する、イデオロギー的要素の強い場所であるが、彼なしでは国民党も現在の台湾も恐らくは存在しなかったのも事実。それだけに国家が総力を挙げてその顕彰を行っている場所である。台湾人の気概が具現化されているような、この国を理解する上では訪問必須のスポットなのであろう。その見学を終え、一度すべての班がスタート地点に集合し、本日のプログラムが終了となった後、この班はいそいそとスケッチブックを忘れたと思しき場所へ。到着したのは閉館時間間際のいざシャッターを下ろさんとするまさにその時であった。幸いにも無事スケッチブックを回収。安堵の涙を流す者も。

どのグループも多かれ少なかれちょっとしたトラブルに見舞われる、あるいは思ったように調査を遂行できなかった場面もあったはずである。しかし、それすらも糧にして、明日はよりよいフィールドワークの1日を過ごせることができると確信している。

11月19日 第10日目

2日目のフィールドワークは、2年石川・工藤、1年大平・澤村班に同行する。このグループは観光による岩手のグローバル化をテーマとしており、その具体的な方策としてSNSの活用やスポーツを通じた交流促進、外国人にもやさしいサインの普及などを仮説として掲げている。

この日のスタートは台湾の東大に当たる国立台湾大学。若者から意識調査をするのが目的である。

ツアーリーダーのセレナ（女性、ベトナム出身）はなかなかアグレッシブで、今日と明日でいったいどれくらいのデータが欲しいのかを聞くと、それを実現すべく徹底して聞き取りを遂行する。まず初めに案内されたのがいわゆる学食。食事をしている人たちを片っ端からつかまえて協力を求める。前日の森林公園でもそうであったが、座っている人に声をかけた方が答えてくれる確率が圧倒的に高い。

学食でひとしきり聞き取りを行うと、続いては講義棟へ。おもむろに入った教室で生徒に講義が何時から始まるか聞くセレナ。開始まではやや時間があるようで、早めに来て自習したり軽食を摂ったりしている生徒が多数。次なる対象は彼らである。急に現れた制服姿の日本人たちにやや戸惑いながらも、多くの学生さんたちが快く協力して下さった。

最後に、職員を対象に調査をしたいと話す工藤を連れたセレナは、大学の学生課へ。そこにいた職員に工藤が用意したアンケート用紙を配り、多数の大学職員から一度に回答を得ることに成功する。

こうして石川・澤村班は2日で100以上のデータを、工藤・大平班も工藤が用意したアンケート用紙がなくなるほどの成果を収め、台湾大学を後にした。

続いて台北市の新しいシンボルとなっている「台北101」へ。500m以上という、東京タワーとスカイツリーの中間の大きさのタワーである。89階までのエレベーターの速さがギネス記録にもなったことで

知られている。乗ってみると確かに早い。突風が吹きすさぶ屋上からは、巨大都市台北が一望できた。

そしてそのままフードコートで昼食と少しだけ自由散策のショッピングも。まさに日本のスカイツリー周辺のような感じで、日本人はじめ外国人観光客がそこかしこに居た。

その後ほど近いところにある四四南村という、退役軍人のコミュニティがそのまま残り、観光スポットとして活用されている場所へ。来歴も見た目もまさに盛岡市内の桜山地区という趣である。由来を説明した展示施設があいにく休館日に当たっていたため、写真を撮ったりする程度で終わったが、今こうして振り返ってみるとこの経験もまた盛岡のインバウンド対策へのヒントになりうるのかもしれない。

これにて17時までのフィールドワークは終了であったが、大平・工藤の柔道部コンビは自主調査として台湾大学を再訪し、柔道部の練習に参加することを通して、台湾における柔道の実態を調査した。

柔道場がある総合体育館は、野球のドームを思わせる壮大な建物で、たった3人で乗り込んでいくとなると、否が応でも緊張してしまう。

訪れた柔道場は冷房を備え、2面分の試合場を伴う立派なものであった。40人の所属者がいるという大所帯の主将は意外なことに女性。背格好も大平と近く、最初こそ互いに緊張していたものの、いざ稽古が始まるとすぐに打ち解けることができた。稽古は少々異なるところはあれ、基本的には日本のものと大きな違いはなかった。最後の研究の時間には、大平が大学生に背負い投げを教える場面も見られた。

幸い日本語を話せる学生が何人かいたため、稽古後にはしっかり盛岡一高柔道部の宣伝も忘れない。



図8 台湾大学柔道部での調査兼交流

顧問である教授をはじめ、みなさんに歓迎していただき、最後はお土産の記念品とともに木曜日の稽古にもまたおいでというお誘いまで頂戴して帰ってきた。スポーツは容易に国と国との壁を越えられるということ、身をもって実感する機会となった。

彼女の奮闘がきっかけとなり、いつの日か、今度は日本で台湾の学生を迎える日がくれば、柔道部顧問の一人としてもこれほど嬉しいことはない。

11月20日 第11日目

15日間という短くない期間の海外研修も今日を含めて残すところ5日。本日は残る1班の2年昆、1年金村・沼崎・松田のグループに同行。男子グループは働き方改革の視点から、女子グループは女性の活躍できる社会づくりの視点から、21世紀のライフモデルを探究することをテーマにしている。

このグループのリーダーは、アメリカはテキサス出身のオースティン。英語のほかに中国語、そして実は（最後まで生徒の前では隠していたが）日本語も自在に操り、無尽蔵のコミュニケーション能力でフィールドワークを遂行していく彼は、生徒たちのヒーローであった。

最終日は聞き取りよりも巡検を重視した設計となっており、台北の中心部から小一時間ほど電車で走った、淡水という風光明媚な観光地へ。

海のような大河に面する「黄金水岸」とよばれる美しい岸边には、夜市のような屋台が軒を連ね、そこを20分ほどかけてゆっくり散策していくと、1600年代にスペインが設けた城をベースとして、オランダ、清と改修を重ねて今に至ったその名も「紅毛城」（かつて中国人が西洋人を「紅毛人」とよんだことにちなむ）という史跡に至る。

我々が到着する頃にはすっかり好天となり、暑いくらいの日差しの中、日本統治下ではイギリスの公使館として使用されていたという建物群を見学した。展示にはありがたいことに日本語のキャプション付き。それだけ多くの日本人が訪れるということなのであろう。

見学を終えると岸边の商店街に戻り、30cmもあろうかという巨大なソフト（日本円にして約140円）をほおぼったり、随所で我々の鼻腔を刺激する「臭豆腐」（その強烈なにおいは納豆の比ではない）に初

挑戦したりと、台湾の歴史や食文化、観光のあり方に対する理解を深める半日となった。

そして本日はそれで終わらず、午後の半日を使い、4日間にわたるフィールドワークのまとめを行う。まずはグループ単位で各自が体験したフィールドワークの振り返り。これまでのツアーリーダーとの英語によるやりとりで幾分慣れてきたのか、初日よりスムーズに英語でのグループワークが進んでいく。それが一段落すると、続いてはフィールドワークのまとめのプレゼンテーション準備へ。我々は翌日以降に控えている最後の交流プログラム、政治大学附属高級中学校への訪問の中で、これまで行ってきた一連の研究の集大成となるプレゼンテーションを行うことになっている。その準備も兼ねて、日本で作ってきた調査計画までのプレゼンテーションに、結果と考察を加える作業を行った。

満足いくものを作ろうとすると、用意された1時間の枠では到底足りず、どのグループもぎりぎりまで（というか当初の予定を越えて）粘って作業を行っていた。

当初はほんの1時間でプレゼンを用意するのは難しいだろうと考えていたが、全てのグループが与えられた時間を最大限に活用して、プレゼンの体裁を調えるところまで漕ぎつけられていた。そしてその内容も、地域のコミュニティに対する帰属意識が、若者とそれ以上で明確に区別されることや、低賃金長時間労働が指摘される台湾で、意外に待遇に対する不満を覚えていないこと、共同体の核となるイベントとしては芸能や産業よりも食を通じた交流に興味を示していることなど、実際に生の声を聞いてみなければわからないような新たな知見に富んだものばかりであった。この後時間をかけてどれほど完成度を高められるかが楽しみである。

プレゼンとそれに対するツアーリーダーたちからのコメントが終了すると、いよいよ4日間苦楽を共にしたリーダーたちとお別れの時。いずれのグループも思い思いに持ち寄った贈り物を手渡し、写真を一緒に撮りながら、別れを惜しんでいた。

全体を通して途中いくらかのハプニングもあったものの、最初から最後までそつなくさらっとこなすよりも、ぶつかったりもがいたり悪戦苦闘しながら乗り越えた（今はまだ乗り越えたという実感が無い

かもしれないが）経験があるからこそ、最後の最後にお互いをより深く理解し合えたはずだと強く信じている。そして最後まで投げ出さずに向き合い続けた12人のことを、引率者として心から誇りに思う。

11月21日 第12日目

帰国まであと4日。盛岡は初雪だったそうであるが、こちらは最高気温が約30℃とまだまだ真夏のような毎日が続く中、政治大学附属高級中学での交流プログラムがはじまった。

我々が到着すると玄関ではすでに20名弱の生徒さん方が待ってくださっており、我々を歓迎してくれた。そのまま歓迎式が始まり、向こうの校長先生、こちらからの代表者が相互にスピーチ。続いて政治大附属高校の代表生徒が、英語での学校紹介と日本語での歓迎の挨拶をしてくれた。あまりにも流暢な日本語を話すので声をかけたところ、父が日本人とのことであった。

次は本校生徒によるプレゼンテーション。時間が少しあるということで、急遽学校および岩手の紹介を行うことになった。突然ではあったが、花蓮の高校で一度経験していたこともあり、生徒たちはこなれた感じで現地の生徒を巻き込みながら一緒に郷土芸能であるさんさ踊りを披露、冒頭から和やかな雰囲気での交流となった。

その後は附属高校の授業体験。1時間目はVR体験の授業であった。VRとは仮想現実の略であり、アイマスクのような眼鏡をかけて見るとそこは仮想の世界。エレベーターに乗ってドアが開くとそこは超高層ビルの外で、わずかばかり張り出した細長い棒の上を歩き出す。下を見るとき目がくらむ高さ。当然見る向きを変えれば風景が変わり、おそるおそる歩き出すものの、多くの生徒は足がすくんでうまく歩けない。さらに前に進むとついに地上へ落下。落下の怖さで悲鳴を上げる者も。

また、体験者が見えている景色を、まわりの生徒はモニターで見ながら体験者の動きを注視するという構図。何とも楽しいものであった。災害時の避難シミュレーションに関するものも体験できた。実際の授業では、今回体験したゲーム的な利用でなく、危険な薬物を使う化学実験の試験をVRで行うなど、様々な分野でVRを活用しているそうだ。日本でこの

ような取組をしている学校はどれくらいあるのだろうか。大変先進的であった。

2時間目は拓本をとる授業を受ける。校舎外のテラスの埋め込まれている石の刻印を拓本として写し取る作業を行った。完成したものはお土産としてそれぞれの生徒のもとへ。作業後の時間では台湾と日本の生徒同士が写し取った漢字の意味を英語で説明しあうなど大いに盛り上がっていた。相手の深い知識に触れ、互いに尊敬しあう場面も見られた。

午前中の交流を終えると昼食に。今日のメニューは巨大なチキンとタラのフライがご飯の上のった弁当。迫力満点である。一緒に授業を受けた生徒も自分の弁当を持参し、共にランチタイムを過ごした。

その後、午後の時間帯は動物園へ場所を移しての交流となった。私たちが滞在しているドミトリーの最寄り駅が「動物園駅」。台北市立の非常に広大な動物園で、ガイドさんいわく「ゆっくり見たら二日かかる」とのことである。それも納得してしまうくらいの広さ。しかし、日本の動物園に比べ、動物を探す難易度が非常に高い。大きいものならまだ見つけやすいが、小型になるとはっきり目視できる方が少ないくらいに分かりづらさである。それと、園内にセブンイレブンやマックなど、他の企業が入り込んで商売をしているところなんかも、日本の感覚でいくと新鮮に映る。

そんな動物園で、まずは1時間ほどかけて台湾固有の動物たちを、園の専門のガイドの案内で見て回る。説明は中国語のため、同行した附属高校の生徒たちが英語で通訳してくれた。予定の時間が経過したところで、グループに分かれてそれぞれ自由に園内を散策しながら親睦を深める。ほぼ3時間歩き通しでかなり疲れたことと思うが、最初の頃は本校



図9 VRを導入した授業風景

生徒、附属高校生徒それぞれが固まって移動していたのが、帰ってくる頃には打ち解けた者同士肩を並べて歩いて来たのを見る限り、充実した時間を過ごせたものと思われる。

そしていよいよ明日は全体を通して、高校生・大学生との交流プログラムの最後となる1日。帰ってきた生徒たちはグループ毎にプレゼンのスライドや原稿を作成し、少しでも多くのデータを求めて聞き取りに赴いた者も。

この研修の集大成を見せてくれること、そして願わくは今体調が思わしくない生徒たちも、順調に快方に向かい、たとえ一部だけでも最後の交流に参加できることをただただ祈るばかりである。

11月23日 第13日目

台湾生活も残り3日。最も案じられたのが体調不良者の回復具合である。朝に検温すると、3名中2人は平熱だったため朝から全体に合流することに。1名だけは未だやや高め熱があったため、宿舎に残り薬を飲みながら昼まで様子を見ることとした。

その他の者たちは午前中から政治大学附属高校において2日目の交流に突入。最初は2~3人のグループに分かれてのキャンパスツアー。ダンスレッスンのための部屋（壁がガラス張りの部屋）があり驚いていたところ、附属高校の生徒が音楽をかけ、一人ずつ見事なダンスを披露。一高生にもお声がかかり、照れながらも即興ダンスを披露し、場が大いに盛り上がっていた。次に図書館へ。その規模もまた驚くべきもの。大きさからいうと日本の小さな公立の図書館と同規模程度。中階段で繋がる2フロアの図書館で、広い自修（自習ではない）室もあった。また、教員専用エリアもある。見学先でその都度集合写真を撮り、一回りしたところで見学終了。

次の時間は数学の授業。ホストチューデントたちのHR教室で受講した。テーマは「実係数多項式」。スマートフォンの「Desmos」というグラフ作成ソフトを使い授業を進めていた。本校の生徒も周りの生徒とコミュニケーションをとりながら積極的に授業に参加していた。数学の先生は若く、とても生徒とフレンドリーな雰囲気。台湾の授業は日本とは違い飲食、スマホOK。通訳の黄さんによれば、これが台湾では当たり前とか。それでも大学受験は日本以

上に厳しく、しかし難関大に合格できれば将来は安泰ということのようである。

そのあとは、ホールに戻りプレゼンの準備。最後の発表を成功させるべく、直前まで原稿チェックなどの準備に余念がない様子。そしてほどなくランチタイム。本日のメニューはピザ。附属高校の生徒と一緒に立食の形でそれぞれが何種類ものピザをつまんで食べていた。宅配ピザは台湾でも大人気らしく、値段を聞くと大きいサイズが1枚2,000円程度と、日本とさほど変わらないようである。飲み物はコーラとSprite。日本ではすっかりシェアを失ったSpriteが、台湾ではNo.1であるのも面白い。附属高校の生徒があまりにもハイテンションなもので、体調が万全でない生徒にとっては、息つく間もないランチタイムであったかもしれない。

皆の昼食が終わる頃、最後のプレゼンには何としても参加したいという強い意思を受けて、残る1名と報告者もタクシーで高校へ。最後の交流プログラムである、双方のプレゼンの部へ突入した。こちらからは6つのグループがそれぞれ今回のフィールドワークの成果を発表、台湾の生徒たちは、台湾の食・観光スポット・遊びを紹介するプレゼンをお返ししてくれた。

台湾の生徒たちのプレゼンを聞く態度は、日本では想像がつかないほどの自由さ。さすが個人主義の国である。型にはまるのがいいか悪いかは別として、本校の生徒たちの他者の話を聞く態度は例外的に立派なのだなど実感させられる。しかしそんな台湾の生徒たちにも悪気はないのであろう。最後は雨に濡れながらバス停まで押しかけ、別れを惜しんでくれたのだから。

そんな聞き手の様子に面くらいなながらも、本校の生徒たちのプレゼンは大変すばらしいものであった。どれもがかつて指導を担当したSGH一期生たちの、3年次における英語プレゼンの質を遥かに上回るクオリティを有していた。何より素晴らしいのが、それをほぼ自らが持てる力とモチベーションだけで成し遂げたことである。特に本当であればまだまだ宿舎で休養が必要であろうにも関わらず、ぶっつけ本番で堂々たるプレゼンを披露してくれた組が残る体力を振り絞るように行った発表をみていると、熱いものがこみあげてきた。



図10 政治大学附属高級中学でのプレゼン

残念ながら大事をとってプレゼン終了後に体調不良組3名は速やかに宿舎に戻り再度休養をとることになった。満足のいく交流ができなかったことは3人にとって不本意であったかもしれないが、この先の人生でも待ち構えている様々な難関をクリアしていけるようなタフさを身につけられたはずである。そして彼らを気遣い、最後は即興の出し物（ダンス＋合唱）を彼らの分まで完遂してくる残りのメンバー。二週間を経て12人はしっかりと一つのチームになることができた。

11月24日 第14日目

危ぶまれた生徒たちの健康状態だが、幸い全員がおおむね回復。余力のある者から順次宿舎を出発し、集合時間の10:45まで最後の台北市内自由散策を行う。調子を崩していた者も宿舎で休養をとり、残る全員で市内へ向けて出発。帰国前最後の活動は最初から最後まで14人全員で行うことができた。

本日最初の活動はJTB台湾における最後の振り返り。この14人が最初にじっくり顔を合わせた保護者説明会の際にご講演いただいた林田社長の前でグループ毎に最後のプレゼンテーション。日本人に対して日本語でプレゼンをしたこともあってか、中身に対する講評としては、おそらく今までで最も生徒たちのためになる助言をいただけたように感じる。

昼過ぎにJTBを後にし、台北駅へ。そこで小一時間の自由時間。思い思いに昼食を摂ったりお土産を買ったり。そして最後のプログラムである九份・十分ツアーへ。

九份・十分は台北市内から車で小一時間ほど東シナ海方面に向けて走ったところにある山間の集落で

ある。十份は炭鉱、九份は金鉱としてかつて栄えていた町とのこと。それが現在では十份は気球を飛ばして願掛けをするパワースポット、九份は千と千尋の神隠しのモデルの一つとなった異国情緒あふれる提灯街として日本人にも定番の観光地となっている。(修学旅行の高校生をはじめ、いたるところで日本人に出会った。)

我々はまず十份から。2グループに分かれ、4つの側面にそれぞれの願い事を記した気球を空に放つ。この気球揚げが行われているのは現役で使用されている線路の真上。私たちが滞在していた間にも二度ほど電車がやってきて、その度にそれまで線路上で気球を揚げていた人たちは蜘蛛の子を散らすように線路から逃げていく。日本では到底考えられない光景である。

そして陽も落ちてくるタイミングで最後の目的地九份へ。山地の傾斜に従って作られた細い道を大量の人が行き来しているの、ところどころ人の大渋滞に。そんなわけで当初は14人一行で行動していたのが、途中同じ日本から来ている修学旅行の団体に割り込まれ、離れ離れに。結局分かれた時点で一緒にいた者同士で集合時間まで自由散策することに。

報告者は途中で偶然出くわした生徒2名と本日二度目の小籠包などを食べ、臭豆腐の激臭にむせながら「千と千尋」の世界を歩き回った。

帰る頃には雨も本降りとなり、びしょ濡れになってバスに帰るとそこはまた極寒地獄(曇り止めのためにエアコンを入れる必要があるのだが、こちらの車には暖房がついていないため、必然的に冷房をかけることになる)。体調不良だったものが再び悪化しないかと一抹の不安が過ったものの、無事に宿舍まで帰着することができた。

そして台湾最後の夜はドミトリーの会議室をお借りして、一人ずつこれまでの14日間を振り返るスピーチを。しみりとさせられる場面があったかと思えば、爆笑に包まれる瞬間もあり、この14日間を凝縮したような1時間はあっという間に過ぎていった。

この14人の出会いに心から感謝するとともに、14人が同じような気持ちを抱いていることを、異口同音に確認しあえたことは、何より幸せなことなのであろうと思う。

保護者の皆様、学校の皆様をはじめ、この14人で

の旅を実現させていただきった全ての方に改めて深く御礼申し上げる。

11月24日 第15日目

本研修もついに最終日を迎えた。初日、着陸に向けて高度を下げる飛行機から初めて台湾の街の灯りを見た時が、はるか昔のように感じられる。

I-house とよばれる政治大学の国際学生寮とも今日でお別れ。帰りの飛行機で聞いた話では、滞在中寮に戻ることを「家に帰る」などと言うなど、もはや我が家扱いしていた者もいたとか。それくらい快適な寮生活であった。

寮での朝食は毎朝7:30に各部屋に届けられる。配膳する係の方は返事がないと執拗にノックを繰り返してくださるので、否が応でもこの時間には目を覚ますことになっている。しかしこの日だけは溜まりに溜まった疲労のためか、その直後、二人そろって眠りに落ちてしまった部屋があったという。これも後々折に触れて振り返るいい思い出になるだろう。

当初入りきらない荷物を郵送できないかという申し出もあり、やや心配された荷造りであったが、皆しっかりとスーツケースと手荷物に収めることができ、来る時よりもかなり重量感を増したスーツケースとともにドミトリーを後にする。バスへ向かう途中にある小学校には朝から長蛇の列ができています。今日は日本における統一地方選のような選挙の日に当たるようで、私たちが滞在した期間中、街中至る所に候補者のポスターや看板があふれていて選挙ムード一色であった(日本では絶対落選するだろうと思われる忍者のコスプレ姿を惜しげもなく披露しているおばちゃん候補者もいた)。その結果を知らずに帰るのだと思うとそれもまた寂しい気持ちになる。

政治大学のコーディネーターの方が最後まで見送ってくれた。約10日間、台北における研修のベースキャンプとなった地を後にすると、いよいよ台湾を去るんだという実感がわいてくる。

空港までは小一時間のドライブ。積もる話や終わらない荷造り、遊び足りないゲームやらで睡眠時間を削られたであろう生徒たちの多くはこの間に体力回復に努める。空港に着くとすぐにやってくる緊張の瞬間。重量がオーバーしていると超過料金を徴収されてしまう荷物チェックである。しかし15日間を

ともにした15人目のメンバーともいえる通訳の黄さんの計らいもあり、すんなりとチェックインカウンターを通過することに成功。我々のどんなワガママにもいつも笑顔で対応してくれた黄さん。本当にあちこちで出会いに恵まれた15日間であった。

出国検査（既に無人化・オートメーション化が進んでいて逆に戸惑ってしまう）を無事にパスした後、しばしの自由時間にめいめい残った台湾ドルを消化。さらに増えた荷物を抱え、花巻行きの直行便へ。気流の関係で帰りは行きよりも1時間も早く到着する。とはいえお昼を挟むために、この研修最後の食事として機内食の提供を受ける。初日の機内食で我々に大きな衝撃を与えた八角という調味料との邂逅を覚悟していたものの、出てきたのは非常にマイルドな味付けの海鮮ビーフン。美味しいのだけれどちょっとだけ肩透かしをくらったような気がする。そんなことを話している間にも、飛行機はどんどん岩手、花巻へ向けて進んでいく。見覚えのあるただっぴろい景色、寒々しい冬の入り口の空。そんな見慣れた光景が目飛び込んでくると、間もなく飛行機は花巻空港の滑走路に滑り込んでいた。

荷物を受け取りロビーに出ると、お迎えに来てくださったご家族の皆様と副校長先生。最後は団長と引率者から一言ご挨拶して、一本締めで研修の一切が終了。皆それぞれにご家族の皆様と土産話に花を咲かせながら三々五々と帰途についていった。

短い言葉で締めるにはあまりの密度の濃い15日間だったため、ここでの小括は割愛させていただくが、まずは改めて13人のメンバーたち、この研修を陰日向で支えてくださった皆様、そして何より小さいけれどもものすごく懐の深い台湾、そこで出会った全ての人、出来事に感謝したい。謝謝！



図11 空港での帰着報告

## 7 事後の取組

帰着後、台湾フィールドワークに参加した生徒たちは、現地調査から得た知見をそれぞれが行っているSG課題研究にフィードバックするとともに、国外調査を通してみえた成果と課題について、積極的に対外発信を行った。

帰国後、平成30年度に生徒達が行った主な発表は以下のとおりである。

- (1) SGH全国高校生フォーラム  
ポスターセッション [英語]
- (2) TOLIC (東北ライフサイエンス機器クラスター) カンファレンス  
プレゼンテーション [英語・日本語]
- (3) 平成30年度岩手県立盛岡第一高等学校SG課題研究発表会  
プレゼンテーション [英語・日本語]
- (4) 2019 東北地区SGH課題研究発表フォーラム  
プレゼンテーション [英語]

このうち、SGH全国高校生フォーラムでの発表に際し、生徒が作成したポスターを次項に掲げる。

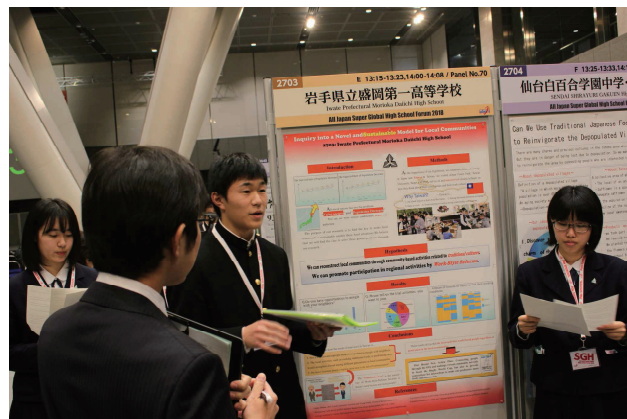


図12 SGH全国フォーラムでの発表



# Inquiry into a Novel and Sustainable Model for Local Communities

2703: Iwate Prefectural Morioka Daiichi High School



## Introduction



Advanced nations face two big problems. **"Aging society"** and **"Population Decrease"**. You can see more serious conditions in **Iwate**, our prefecture.

The purpose of our research is to find the key to make local communities sustainable amidst these hard situations. We believe that we will find the clue to solve these global problems through our research.

## Methods

As the inspections of our hypotheses, we conducted fieldwork survey in Japan and **Taiwan**. In Taiwan, we visited Daan Forest Park, Taiwan University, Taipei City Hall, and so on and **interviewed** citizens in Taipei on how they think about local communities and their work culture.

### Why Taiwan?

—Taiwan is...

1. An island region in East Asia like Japan.
2. Facing the same problems as Japan.
3. Easy to visit.
4. Iwate is trying to build a strong relationship with Taiwan.



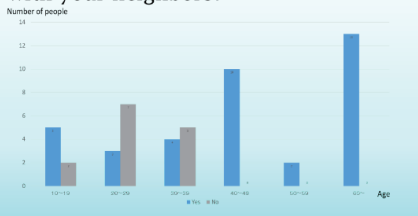
## Hypothesis

We can reconstruct local communities through community-based activities related to **traditional cultures**.

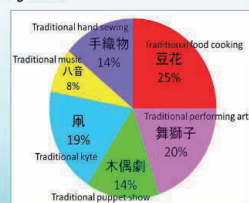
We can promote participation in regional activities by **Work-Style Reforms**.

## Results

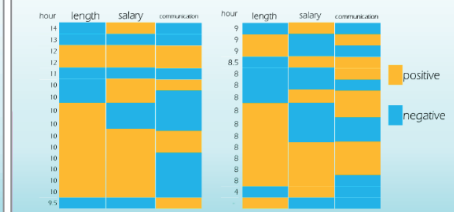
Q. Do you have opportunities to mingle with your neighbors?



Q. Please tell us the trial activities you want to join.



Attitude of citizens in Taipei toward their working conditions



## Conclusions

What we learn from the result of interviews in Taiwan is...

1. Not a few Taiwanese people think it's important to mingle with neighbors.
2. The local activities, such as cooking traditional foods or performing arts, would strengthen a bond among different generations in local communities.
3. The factor Taiwanese people complain about most is the lack of "communication".

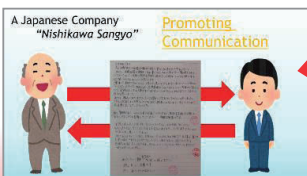
These results tell us that **the local activities would bond people regardless of generation in the local communities**.



**Our Brand New Action Plan: Connecting people through the SNS and making a virtual community not only to boost the Rugby World Cup, but also to provide connections for interactions to make our prefecture more lively and sustainable.**



The **"communication"** is the easiest way of Work-Style-Reform because it doesn't need money nor more people!



## References

- Keiko Hatano. 2014. Local Community Activities and Young People. Journal of Social Science 65(1)
- Population Census in 2015. <http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2015/kekka/kihon2/pdf/gaiyou.pdf>
- Housing and Land Survey in 2013. Statistics Bureau. [www.stat.go.jp/data/jyutaku/2013/10\\_1.html](http://www.stat.go.jp/data/jyutaku/2013/10_1.html)
- Population Projection for Japan. 2017. National Institute of Population and Social Security Research
- Average worktime in Taiwan. The Central News Agency. <http://japan.cna.com.tw/news/aeco/201610060010.aspx>

## VI Global English Communication

### 1 概要

本校 1, 2 学年の英語のカリキュラムは、コミュニケーション英語 I, II (以下「C 英」) 4 単位、英語表現 I, II (以下「英表」) 2 単位の計 6 単位で構成されている。

C 英では、4 単位の内 3 単位を日本人外国語教員(以下「JTL」) 単独で、1 単位を外国語指導助手(以下「ALT」) との Team Teaching (以下「TT」) で指導する。本校では、後者の TT を Global English Communication (以下「GEC」) と名指し、将来のグローバル・リーダーに必要な資質を養うべく、指導内容及び指導法を研究開発している。

ALT との TT では、これまでは教科書の各課で扱われる題材を地球規模の問題に敷衍し、独自の教材を開発し、グローバル・リーダーに必要となる資質と英語力を養うことを企図してきた。昨年度はディベートを GEC の活動内容の主軸に置いたが、今年度は過去に開発してきたグローバル課題を英語で学習する CLIL\*的なプログラムと、ディベート活動のより効果的なカリキュラム配置を探るべく、以下のような段階的な導入を試みた。

\* CLIL は、Content and Language Integrated Learning の略称です。教科科目やテーマの内容 (content) の学習と外国語 (language) の学習を組み合わせた学習 (指導) の総称で、日本では、「クリル」あるいは「内容言語統合型学習」として呼ばれ定着しつつあります。… CLIL の主な特徴は、学習内容 (content) の理解に重きを置き、学習者の思考や学習スキル (cognition) に焦点を当て、学習者のコミュニケーション能力 (communication) の育成や、学習者の文化 (culture) あるいは相互文化 (Interculture) の意識を高める点にあると言えるでしょう。

笹島茂「日本 CLIL 教育学会」

<https://www.j-clil.com/clil> (2019 年 2 月 5 日)

1 学年	1 期	1. CLIL (Global Issue: Gender Equality) 2. CLIL (Global Issue: Washoku – Japanese Traditional Food)
	2 期	1) 価値観を問うミニ・ディベート*を実施し、肯定側立論、反対側立論といった、ディベートを行う上で必須の立論作成について習熟する。 2) 価値観を問うミニ・ディベートを実施し、肯定側立論、反対側立論、反対側反駁、立論側反駁といった、ディベートの基本的な形式に慣れる。
	3 期	3) 教科書の題材から論題を抽出し、政策を問うディベート (十分に準備を行うプレパレイトリー・ディベート*) を実施する。肯定側立論、反対側立論、反対側反駁、立論側反駁といった本格的なディベートの形式に慣れる。 論題: "Pet culture should be abolished"
	4 期	1. CLIL (Global Issue: Healing the World through Music)
2 年生	1 期	教科書の題材から論題を抽出し、スピーチを実施した。 論題: My Inspirational Person
	2 期	教科書の題材から論題を抽出し、価値観を問うディベートを実施。ここでは、ディフェンスを導入した。また、ジャッジの重要性についても強調した。 論題: All high school students should have an after-school job.
	3 期	教科書の題材から論題を抽出した。論題 1 では、ジャッジの方法論についての習熟をはかった。論題 2 では政策を問うディベート (十分に準備を行うプレパレイトリー・ディベート) にも挑戦。 論題 1: Better to study in small rural high school than bigger high school. 論題 2: University education should be free in Japan.
	4 期	教科書の題材から論題を抽出し、模擬国連ディスカッション・ドラマを実施する。 論題: To create solution to world hunger

\* 価値観を問うミニ・ディベート

論題例:

- 1) Summer is better than winter
- 2) Bento is better than school lunch
- 3) Tea is better than coffee
- 4) Cats are better than dogs
- 5) Sushi is the best Japanese dish
- 6) Japanese food is better than Western food for breakfast
- 7) Teachers should stop giving homework to high school students
- 8) High school students should have less English classes in school
- 9) We should all become vegetarian

\* プレパレイトリー・ディベート

ここではパラメンタリー・ディベートと区別するために用いる。論題を事前に共有し、十分に準備時間を設けて実施する、政策決定型ディベート。

2 パフォーマンス・テストについて

1 学年においては、1, 4 期は、グローバル課題を英語で学ぶ CLIL を実施し、プレゼンテーションを評価対象とした。2, 3 期ではディベートのパフォーマンスを評価対象とした。後者では JTE と ALT、そして Judge 役の生徒の評価を根拠に、ディベートの評価を行った。2 学年においては、1 期はスピーチのパフォーマンスを、2, 3 期ではディベートのパフォーマンスを、4 期は模擬国連ディスカッション・ドラマのパフォーマンスを評価した。以下にディベートの評価規準を掲載する。

<p>1) 形式に則ってスピーチを行うことができる。(知識・理解)</p> <p>A: 学んだ表現を適切に用いて話すことができる。</p> <p>B: 曖昧な表現になることがある。</p> <p>C: 適切な表現ではない。</p>
<p>2) 限られた時間を有効に使って、論理的に話すことができる。(表現)</p> <p>A: 主張を十分に説明する理由を二つ述べるができる。</p> <p>B: 主張を十分に説明する理由を一つ述べるができる。</p> <p>C: 理由が主張を十分に説明できていない。</p>

3 ALT による評価

2 学年理数科も含めて、GEC の対象となっている全

てのクラスを指導する ALT に、今年一年間 CLIL とディベートに取り組んだ生徒たちがどのように変容したか、所感を述べてもらった。

Classes with the ALT is viewed as an opportunity for students to apply the grammar and vocabulary points they learn in classes with the JTE. They are mostly content-focused where students form their own opinions on a topic, discuss these opinions with others, and brainstorm ideas for further development (in turn, conceiving and answering essential questions) in order to form a developed opinion on a debate resolution. This method of teaching creates less talking time for the teachers and more space for students' self-expression. Students are motivated because they can express themselves on an idea of their own choice and as freely as they like. The disadvantage of this model is that it depends on each individual's enthusiasm. Students who are not as enthusiastic do not try to develop their ideas as much as their peers.

The freshmen students this year are more expressive with their ideas and are not afraid to communicate a different opinion on a belief. With that said, they responded especially well to debate-style lessons. Part of this is due to the gradual progression of topics starting from light, relatable resolutions that do not require a lot of background information to policy questions rooted in Japanese culture. All of these questions understandably do not have a clear-cut answer to create a more interesting discussion with their peers.

Starting with simple topics built the students' motivation and confidence in sharing opinions. It is important to make them feel comfortable with throwing opinions around because as they move up to the second grade, they will have to speak about more controversial topics that may require them to be more critical

of their own and other's ideas.

The second-year's classes are roughly the same except for the topics covered. To develop the students' thinking skills further, we implemented debate judging in the latter half of the second term and throughout the third term. Interestingly, by letting the students evaluate their peers in debate, students think more carefully about their constructive speeches. During post-debate discussions where evaluators share commendable arguments and points for improvement with the students, debaters discover how they can approach the topic differently, thereby effectively widening their thought horizons. The school year closes with a transition from debate to discussion and dialogue. Rather than nitpick faults in arguments and compete, students negotiate critically and create compromise to find the best possible solution to a problem.

#### 4 模擬国連ディスカッション・ドラマ

昨年度同様、二学年の最後の活動として、模擬国連をディスカッション・ドラマ形式にした活動を実施した。標準的なスクリプトの例を掲載する。

Theme: Finding a Solution to WORLD HUNGER (Script)

*Chairperson:* Now I would like to start the discussion for solving world hunger. First, the representative of Kenya, please tell us your opinion.

*Kenya:* In our country, the situation of acute malnutrition is serious. This is because there are only a few varieties of cultivated crops harvested yearly and there is a food shortage brought by the drought. In 2017, thanks to UNICEF, about 30,000 severely malnourished children became healthy, but we need more support.

*Vietnam:* Our food problem seems to be the same as those seen in many Asian

developing countries. Both the rate of child obesity and the rate of child malnutrition is high. The cause of child malnutrition is that traditional food such as Vietnamese pho isn't healthy enough. Similarly, the variety of cultivated crops is limited as well, like in Kenya's situation. *Japan:* Based on the activity of UNICEF in Kenya, I realize that support from outside is effective. Cultivated crops will be the key in solving this problem.

*Chairperson:* Indeed. How do the developing countries feel about this?

*Cuba:* Yes, when we were under the Soviet Union, crop production in large farms flourished. We exported sugarcane and corn. However, due to the Soviet demolition in 1991, our export decreased significantly. The production of sugarcane for export decreased by 5.75 million from 1991 to 2013.

*Myanmar:* In our country, growth of the logistics industry is greatly delayed. There are few overland routes and waterways, so there isn't enough food on the markets. Adults in developed countries on the daily consume 2000 calories but on the other hand, adults in developing countries consume only 103 calories.

*Italy:* I remember the New Economic Policy that you presented last November 2017.

*Myanmar:* Oh yes, thank you. In the policy, we wrote that we would develop agricultural industry, livestock industry, fishery industry, and methods to stabilize food self-sufficiency and to promote our export.

*Chairperson:* Following these situations in developing countries, please present your opinions, developed countries.

*Japan:* In my country, food self-sufficiency rate is low. In other words, 68% of food in Japan is imported, but 50% of exported goods is wasted. It means that we waste 11 trillion yen of food.

*America:* In our country, food waste and food loss is the problem. Today, in America,

21% of waste in the incinerators is food.

*Kenya:* 21%?!

*America:* Yes, really. To improve this situation, we are carrying out the program named US Food Loss and Waste 2030 Champions. The goal is to reduce 50% of food waste and food loss.

*Chairperson:* Does anyone have any new ideas?

*Myanmar:* How about donating surplus of good food that will just otherwise be dumped into landfills? We can reduce food waste and improve the problem of malnutrition and hunger in developing countries that need food.

*Vietnam:* It is an effective idea, but how do we prepare the cost of transport?

*Italy:* We developed countries should bear it. The food problem isn't just the country's problem. It is a global problem.

*America:* I agree, I will agree to shoulder the fees.

*Japan:* Our government agrees, too.

*Cuba:* But what if the food donation goal amount is reached? What happens then? Do we keep depending on your government for donations?

*Japan:* Then we should dispatch volunteers. That is the best way. While receiving donations, experts of produce or industry will be dispatched to teach expertise in food production and strengthen the foundation of food self-sufficiency together.

*Vietnam:* Sounds good. The country will become lively and local people will be able to continue it even if the volunteers go back to their countries.

*Italy:* By the way, we were awarded 1st place in the ranking of the healthiest country in the world. Meals that use fresh fruits and vegetables was the main factor. We can add that to the expertise that volunteers will teach the locals.

*Kenya:* Let's do it. We may learn tips about living healthily that way.

*Chairperson:* Then let's take a vote on it. To solve world hunger, we should donate food and dispatch volunteers to developing countries. If you agree with these ideas, please raise your hand.

(All members raise their hands.)

*Chairperson:* So does everyone agree with this idea?

*All:* Yes.

*Chairperson:* All right, then we shall end this discussion. Thank you everyone for your hard work today.

論理的な飛躍が多かった昨年度のスクリプトと比べると、議論に深まりが見え、論理展開が妥当になっている。この水準を保ったまま、本プロジェクトの実施時期を前倒しできれば、スクリプトのない、生の模擬国連ディスカッションを年度末に実施できるのではないかと期待が高まる。

## 5 GTEC

平成30年7月3日(火)に全学年が一斉に「GTEC or Students Advancedタイプ」を受検した。成績概況は以下の通り。(比較のため、昨年度の結果と並置。また、GECの効果を見るため、GECを開講していなかった2015年度の3年生のデータも掲載する)

過去2年間の報告書でも述べた通り、GEC特にディベート活動が最も効果を発揮するのは、Writingのようである。今年度は1年生が、ディベートの導入時期を2期に設定したため、7月上旬のGTECではWritingにはその成果が現れない。次年度の伸びを期待している。また、今年度入学生は大学入学共通テスト(新テスト)に切り替わる一期生となる。英語については外部テストの評価導入に対応するべく、今年度から初めて、GTECのSpeakingテストを全員に受検させた。比較対象がないため、次年度の結果を見て、経年比較で伸びが見られることを期待するしかないが、一応結果を以下に記載する。

2017										2018									
Results		1st Year Students		2nd Year Students		3rd Year Students		3rd Year Students		Results		1st Year Students		2nd Year Students		3rd Year Students		3rd Year Students	
		Score	Grade	Score	Grade	Score	Grade	Score	Grade			Score	Grade	Score	Grade	Score	Grade	Score	Grade
Total		472.5	4	522.4	5	548.7	5	549.6	5	Total		467.2	4	518.0	4	553.8	5	549.6	5
Reading		164.0	4	192.1	5	209.6	5	210.9	5	Reading		165.1	4	191.3	5	210.0	5	210.9	5
(WPM)		74.9		91.0		100.8		101.3		(WPM)		75.4		90.8		101.1		101.3	
Listening		183.3	4	204.6	5	215.8	5	216.4	5	Listening		182.4	4	203.0	5	217.0	5	216.4	5
Writing		125.2	4	125.7	4	123.4	4	122.3	4	Writing		119.7	4	123.7	4	126.8	4	122.3	4
Grade	Score	単純	累積	単純	累積	単純	累積	単純	累積	Grade	Score	単純	累積	単純	累積	単純	累積	単純	累積
7	710 ~	1	1	6	6	7	7	11	11	7	710 ~	1	1	3	3	14	14	11	11
6	610 ~	5	7	29	35	48	55	46	57	6	610 ~	8	9	27	30	44	58	46	57
5	520 ~	42	49	81	116	114	169	112	169	5	520 ~	39	48	91	121	109	167	112	169
4	440 ~	156	205	135	251	175	244	88	257	4	440 ~	129	177	114	235	79	246	88	257
3	380 ~	70	275	24	275	17	261	11	268	3	380 ~	86	263	27	262	14	260	11	268
2	300 ~	4	279	3	278	3	264	4	272	2	300 ~	15	278	3	265	0	260	4	272
1	0 ~	0	279	0	278	1	265	0	272	1	0 ~	0	278	0	265	0	260	0	272

Speaking		2018	
Grade	Score	単純	累積
7	170	2	2
6	150 ~	5	7
5	130 ~	47	54
4	110 ~	123	177
3	90 ~	94	271
2	70 ~	9	280
1	0 ~	0	280

の動機付けに活用しているアメリカの NPO について報じた英文を導入として、身近な東日本大震災や過去のハイチの地震津波において、物理的に音楽が果たした役割とその力の大きさに思いを馳せる機会を設けた。音楽にもひとを救う力がある、という認識を共有した上で、グローバル課題を取り扱いながら、英文で歌詞を作り、その歌唱をクラス毎に発表するという活動を行った。歌詞の作成もさることながら、互いの発表を笑顔で鑑賞する姿に、「共感」というキーワードが体现されていると感ぜられた。以下、生徒の作品例を 2 点掲載する。

## 6 最後に

昨年度の報告に、「将来のグローバル・リーダーに必要な資質は、グローバルな課題に関与する多国籍の人々の個々の意見を尊重しながら、実現可能性と実行可能性の高い解決策を議論し合う中で、各人の意見を収斂していく交渉術でもある」と述べた。GEC の対象となる 1, 2 学年で長期的視野からカリキュラムをデザインする際、昨年度までのディベート特化では、そもそもグローバル課題への共感的理解を段階的に深めることができないのではないか、ということ、敢えて初心に立ち返り、CLIL とディベート活動を均等に織り交ぜることとした。

今年度の 1 学年では、期を限定した上でディベートを実施したが、年度を追うに従って指導方法が洗練されてきており、1 年 3 期に実施したプレパレイトリー・ディベートのパフォーマンスの質は非常に高かった。ディベート以外の他の言語活動を行う余地が、十分に残されていると考えられる。

1 年 4 期に実施した CLIL では、音楽が認知症患者

e.g. 1

Disposal of Food

We have become greedier over time  
We take things for granted, we do not appreciate  
What we have, so we waste food  
Don't you know much food they waste?  
The more we think of only ourselves, the more we waste food

We have to become less greedier  
Don't take things for granted, we should appreciate  
What we have  
Why don't you reconsider the action about disposing of food  
The more we think of everyone, the more we value the food

e.g. 2

Present Situation of Hunger

In the developing countries

A lot of people are hungry

But People never lack food in Japan

Don't you think it's happy thing?

In the developing countries

A lot of food is thrown away

But people are seeking food in Africa

Don't you think it's strange thing?

今後も CLIL、各種ディベート活動といった多様な言語活動を取り入れ多面的に指導することによって、高度な英語運用能力とグローバル課題への共感的な深い理解と批判的思考を同時に育成し、グローバル・リーダーの資質を向上させていきたい。また、次年度に譲る課題としては、GEC 最後のプロジェクトに位置づけている模擬国連ディスカッション・ドラマを3期に前倒し、4期にはスクリプト無しで生の模擬国連ディスカッションを実施することである。非常に難しい取り組みではあるが、SGH 指定最終年度にぜひ挑戦してみたい課題である。

## Ⅶ グローバル現代社会

### 1 概要

本校では1学年において公民科「現代社会」が2単位の必修科目として設定されている。SGHの研究開発におけるカリキュラム改革の一環として、従来の現代社会に代替する新たな科目として「グローバル現代社会」を開講している。

「現代社会」の内容の最後には、「共に生きる社会を目指して」という、課題追究による学習活動が設定されている。具体的には、「持続可能な社会の形成に参画するという観点から課題を探究する活動を通して、現代社会に対する理解を深めさせるとともに、現代に生きる人間としての在り方生き方について考察を深めさせる。」と学習指導要領で示されている。本年度1学年で行っている「SG課題研究Ⅰ」では、「地方創生」をテーマに、地域課題の発見についてグループごとに調査研究活動を行った。この「SG課題研究Ⅰ」の内容は、上記に示した「現代社会」の内容と共通する部分が多いと考える。

この点を踏まえ、今年度は「現代社会」政治・経済分野において「SG課題研究Ⅰ」と連携し、取り組んだ実践を「現代社会」の学習内容を深化させて政策としてまとめる学習活動を行った。具体的には、「地域づくりのための政策を考えよう」と題し、グループで考えた政策を立案し、発表する実践を行った。

本稿では、この政策立案演習について紹介し、成果と課題について報告する。

### 2 政策立案演習の内容

#### (1) 課題の提示

演習の実施に先立ち、岩手県が現在作成している「岩手県次期総合計画—長期ビジョン—（中間案）」の概要を説明し、「SG課題研究Ⅰ」との関連性について考察させた。この計画では、「東日本大震災津波の経験に基づき、引き続き復興に取り組みながら、お互いに幸福を守り育てる希望郷いわて」を基本目標としている。これを踏まえ、一人ひとりの幸福度を高めるために、岩手県が現在抱えている課題をとりあげ、その解決策を考え、提案することを学習課題に設定した。具体的には、グループごとに①とりあげる政策を決定し、②何が問題となっているか、

その原因や背景を調査し、③課題解決のために何をどうすればいいか、財源についても触れながら具体的に提案した文書を、A4判2枚以内で作成させた。グループは原則として「SG課題研究Ⅰ」のグループとした。

#### (2) 課題追究学習の実際

上記の内容に基づき生徒はグループごとに政策課題を設定し、調査活動を行うことになるが、その際に教員が説明したことは以下のとおりである。

①取り上げる政策の決定にあたっては、現在の社会で起こっているさまざまな課題について、何がどのように問題となっているのか、誰（何）が困っているのか、世の中にどのような不便が生じているのかなど、政策課題をめぐる原因や背景の一つについてまとめること。

②政策課題の原因や背景については、自分たちが取り上げた政策課題が取り上げるべき重要な課題であることを示すために、複数取り上げること。

③政策の具体案については、上記の問題を解決するために、誰（どこ）が、何を、どのように、いつまでに取り組めばよいか、具体的に書くこと。この政策を実行することで、とりあげた政策課題がどのように解決し、地域社会や住民の幸福な生活にどのように寄与するのかなどといった、政策を実行することによる効果についてまとめること。

一方、政策をすすめるためにはコスト（お金、人、時間）がかかる。すばらしい政策でも、莫大な費用が準備できないのであれば現実的ではない。政策を実行しようとするだけでお金の必要なのか、そのお金をどのように調達するのか、大まかでよいので経費と財源案を示すこと。以上の3点である。

授業時数については、課題提示とグループ分けで1時間、政策課題の検討とグループ内での役割分担で1時間、政策案の作成で1時間を確保し、実際の調査にあたっては授業外の時間で行わせた。「SG課題研究Ⅰ」のフィールドワークや研究成果を活用してもよいこととした。

#### (3) 政策案と発表会

完成した政策案のうち、SG課題研究と関連が深い内容は以下のとおりである。紙幅の関係で一部のみの紹介となることをご容赦願いたい。



①結婚・子育て支援

- ・くつろぎの場を作る

②子どもの貧困対策

- ・食品ロスを減らして、貧困家庭を減らす！！

③働き方改革

- ・岩手県における働き方改革の現状と課題解決に向けた取り組み
- ・岩手県の自殺率減少を目指した政策について

④仕事とキャリア形成

- ・岩手県の働く女性を守る
- ・高校生の授業へ地元の職業体験の導入

⑤食と農の連携

- ・生活習慣病の改善
- ・農業の後継者不足の解消
- ・中規模農家への経済的支援
- ・岩手で働く若者や農業に携わる若者の減少
- ・岩手の水産業の現状と今後の展望

⑥盛岡ブランド

- ・伝えたい！私達の町の工芸品

⑦移住・定住促進

- ・自転車レーンの設置
- ・盛岡市内の交通量の減少
- ・交通系ICカードの導入の奨励
- ・岩手県における土地の活用と観光産業
- ・雇用確保と観光客増加に向けた岩山宣伝・改良計画
- ・人口流出を防止する大学
- ・廃校の活用

⑧共生社会と国際社会

- ・ジェンダーの差別の是正

⑨その他

- ・岩手県内における学力の現状と向上案
- ・高等学校における昼寝の推奨

発表は3分、質疑応答1分を予定していたが、ほとんどのグループで4分程度の発表、5分程度の質疑応答が行われ、関心の高さがうかがわれた。

(4) 新聞投稿による地域社会への発信

「SG課題研究I」および「グローバル現代社会」の学びの成果について、新聞への読者欄への投稿を紹介したところ、主に地域紙である岩手日報に投稿した生徒が15名程度投稿した。その一部は下記のとおり「岩手日報」声欄の「日報論壇」に掲載された。

「子どもの貧困対策探る」(2019年2月16日付)

「岩手発信 伝統工芸軸に」(2019年2月28日付)

「保育園を義務化すべき」(2019年3月2日付)

「地元の農産物知ろう」(2019年3月9日付)

3 成果と課題

「SG課題研究I」の内容と「グローバル現代社会」の課題追究学習と連携させることにより、現代社会で学習した課題追究学習の方法や学び方について生徒の学びをより深めさせることができたと考える。「SG課題研究I」においてもプレゼンテーションや報告書の作成は行っているが、現代社会で学習した人権や地方自治に関する内容を生かして考察できたことがその成果としてあげられる。さらに、プレゼンテーションだけではなく、それに基づいた質疑応答の時間を確保することによって、自分たちの取り組みや研究に不足する内容や新たな視点を得ることにつながったと考える。生徒のふりかえりにもこれらに関する内容がみられる。

一方、「グローバル現代社会」として、自分たちが取り組んできたテーマがどのように世界と関わっていくのか考察させることが不十分なまま学習活動を終えたことは課題となった。「地方創生」という地域に密着した課題を取り上げたゆえに、扱うテーマによっては世界規模の問題とどのように連関しているのかが不明瞭であったことがあげられる。この点については、来年度以降の課題としたい。



発表会における質疑応答の様子

## VIII SGH と ICT 活用

### 1 目的

課題研究における「主体的・対話的で深い学び」の姿勢を ICT 活用によってサポートすることにより、活動の質の向上と効率化を図ることを目的とする。

### 2 前年度までの取り組み

前年度までに以下の2点を検証した。

- (1) 授業支援ソフト「Metamoji Classroom」を用いて ICT が各教科での学びにどのような効果をもたらすか。
- (2) 情報共有・成果物の提出・相互評価などに Excel Online によるアンケート機能を用いて、集計作業の効率化と即時フィードバックを実現する。

ICT 活用の利点を確認できた一方で様々な課題も見えてきた中で、オープンソースの e-ラーニングツールである「Moodle」の利用を進めることとした。

### 3 学校生活サポートサイトの開設

前述の「Moodle」というシステムを用いて、平成30年度5月より「盛岡一高学校生活サポートサイト（以下、サポートサイトとする）」として開設し、主に生徒・教員間での情報共有に活用することとした。

なお、サポートサイトは学校生活全般で活用してきたが、本稿では SGH の活動に関する部分のみをまとめることとする。

#### (1) サポートサイトの概要

外部のサーバーに「Moodle」というシステムを置き、アカウントとパスワードによってアクセスが制限できるサイトを構築する。教員はサイト内をブラウザ上で編集することができるほか、個人で所有するスマートフォンや PC からアクセスできる。生徒は自身のスマートフォンなどからアクセスする。

「Moodle」は e-ラーニング用のプラットフォームなので、掲示板、アンケート、ファイル提出、小テスト、課題等への評価機能などが実装されている。SGH の活動においては主に掲示板、アンケートの機能を活用した。

#### (2) 活用例

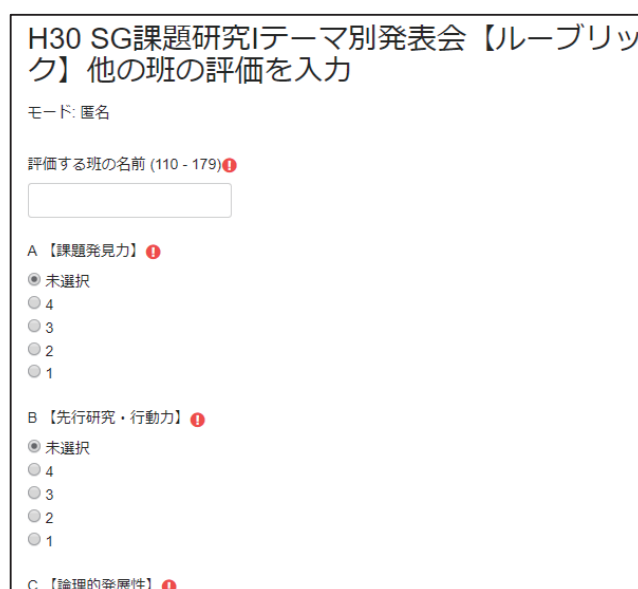
サポートサイト内に SG 課題研究(第3期・第4期)のコースを作り、それぞれの学年でアクセスできるようにしてある。



【ログイン後のコース選択画面】



【コース内トップメニュー】



【発表後の評価入力画面】

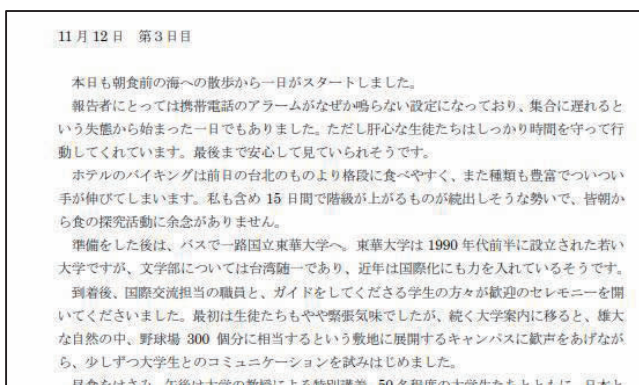
活動時の連絡やフィールドワークの報告などをサポートサイトで行い、教員→生徒の連絡や生徒→教員

の情報収集で効率化を図ることができた。

また、11/10(土)～24(土)に行われた海外フィールドワークの際には現地から直接サポートサイトに情報を掲載することで、日本にいる生徒や保護者が当日の活動の様子をいち早く知ることができた。特に保護者からは自分の子供の活躍を詳しく知ることができるとともに、安全に活動していることが分かってよかったとの感想をいただいた。



【報告掲示板にアップされる現地での様子】



【毎日アップされる現地からの報告】

#### 4 成果と課題

ICT 活用の利点は、「情報を得たい人が得たいときにアクセスできること」「場所を問わずに情報共有できること」などがあげられる。本校での課題研究はクラスの枠を超えてグループを作り研究を進めていくので、授業時間以外にも相談したり議論したりする必要がある。皆が集まれなくても議論や相談が活発に行える環境としてサポートサイトは有用であると考えられる。また、活動後の報告書提出や発表会の評価など、デジタルデータの収集をサポートサイトから行うことで教員の負担が激減するとともに、即時フィードバックが可能となった。1年生の校内発表会後の評価は、のべ1900件のデータがサポートサイト上で入力されたが、終了10分後には点数集計が完了した。入力作業などに費やしていた時間を生徒に向き合う時間に代えることができるようになると思われる。

課題はシステムのメンテナンスと持続可能な運営体制である。教員の ICT スキル向上は必須であるが、苦手だから使わないのではなく、とりあえずやってみるという気持ちをもって学校全体で取り組んでいく。その中でネットワークやクラウドの知識、わかりやすく効果的なページ作りのスキルなどを習得していくことが大切である。また、校内の通信環境の整備も必要である。今年度は生徒所有のスマートフォンを活用したが、データ通信料は生徒負担であった。次年度は Wi-Fi 環境の整備を予定している。サポートサイトと Wi-Fi が揃うと相乗効果でより活発な研究が行われるだろう。

研究活動に必要な ICT 環境は徐々に整いつつある。次はこれらの環境を生かしてより活発な研究活動が行われるような手立てを考えていきたい。

## IX 成果発表ディベート

SGH 指定に伴い、3年前の平成27年4月から、英語部員を中心に英語ディベート大会出場を目的とした活動を始めた。10月末に実施される県大会では、昨年度から参加校が増加したため、12月に行われる全国大会（今年度が13回目の開催）出場権が準優勝までに拡大された。昨年度は県大会で準優勝を果たし、初めて全国大会の舞台に進んだ。強豪校を相手に2勝をおさめ、出場校64校中総合31位と健闘した。

今年度の論題は、「日本国は、本人の意思による積極的安楽死を合法化するべきである。是か非か。」である。昨年度の「移民政策の緩和の是非」同様、英語でディベートを行うには、非常に難しい論題であった。しかし、今年度は全国大会に出場した経験とそこで得られた人脈を駆使し、全国の強豪校とスカイプでの練習試合を何度も重ねた。また顧問やALTの強力な支援の下、反駁までも想定した準備を入念に行い、本番に臨んだ。大会結果は以下の通り。

第6回岩手県 Kenji Cup 高校生英語ディベート大会  
10月17日（水）@岩手県総合教育センター

	Aff	勝敗	Neg	勝敗
1回戦	盛岡第一 A	勝	花巻南 A	負
2回戦	花巻北 A	負	盛岡第一 A	勝
準決勝	盛岡第一 A	勝	一関第一 B	負
決勝	盛岡第一 A	勝	一関第一 A	負

	Aff	勝敗	Neg	勝敗
1回戦	盛岡第一 B	勝	不來方 A	負
2回戦	盛岡北 B	負	盛岡第一 B	勝
準決勝	盛岡第一 B	負	一関第一 B	勝

盛岡一高 A チーム 4 勝 0 敗で初優勝

（全国大会出場権獲得）

盛岡一高 B チーム 2 勝 1 敗で第 3 位

今年度は県内先進校の一関一高に勝利し、念願の初優勝を果たすことができた。また B チームも 3 位入賞を果たし、本校英語部全体の競技力が高められている証となった。4 年を経て蓄積されてきたノウハウを活かし、普段から質の高い活動を行ってきたその努力が、今花開いてきた様相である。

第 13 回全国高校生英語ディベート大会 in 福井  
12月15日（土）、16日（日）@福井工業大学

	Aff	勝敗	Neg	勝敗
1回戦	盛岡第一	負	並木	勝
2回戦	一条	負	盛岡第一	勝
3回戦	盛岡第一	勝	泉丘	負
4回戦	守山	勝	盛岡第一	負
5回戦	盛岡第一	勝	宇部	負

22 位 / 64 校（3 勝 2 敗）

2 年連続 2 回目の出場。予選では全国の強豪校を相手に 3 勝をおさめ、昨年度の 31 位から躍進し、総合 22 位となった。これは岩手県勢、東北勢で最高位である。また、ボランティアのチェアパーソンを務めたりと、大会運営の補助を積極的に行ったため、初めて「ベストサポーター賞」をいただいた。ディベーターだけでなく、盛岡一高英語部として活躍できた、素晴らしい大会となった。

今後の方針

来年度の論題に何が選ばれようと、高度な英語運用能力と論理的思考力を駆使してディベートが行えるよう、多様なテーマで日常的に練習に取り組んでいる。1 年生ではプレパレイトリー・ディベートの型を、実際に立論や反駁を行いながら理解し定着する導入を行う。2 年生では、1 年生で学習したことを復習し、より高度な論題で実践を積んだ。また、他の生徒の試合をジャッジすることにも挑戦した。英語を聞く姿勢を養い、論理的思考を刺激するような授業展開を試みている。

そして 3 年生では、事前に準備を充分に行うプレパレイトリー・ディベートだけではなく、その場で論題を公開し短い準備時間でディベートを行う即興性の高いパラメンタリー・ディベートを、GEC の授業と連動して行うという 3 年間を見通した、年度進行のカリキュラムが確立してきた。これを財産としながら、今後もディベート活動を通じた英語運用能力の増強と、論理的思考力の育成方法の改善深化に努めていきたい。

## X 生徒海外派遣事業「白聖の翼」

### 1 概要

創立 100 周年を記念して発足した生徒海外派遣事業「白聖の翼」は、昭和 54 年度にスタートし、平成 29 年度で 39 回目となった。

平成 28 年度に続き、英国ロンドンから西へ 100km ほど離れた場所にあるコッツウォルズ地方を訪問した。主たる研修先も同様にレンコム・カレッジ（小中高一貫の私立学校）である。2 年連続で訪問したことによって、本校生も相手校も昨年以上に交流を深めたいという強い気持ちで満ちた、約 1 ヶ月間のプログラムとなった。

レンコム・カレッジでの研修では、主に英国文化を教材にした英語学習のほか、物理、生物、数学、芸術、体育などの授業に参加することができた。時には、周辺トリップが用意され、シェイクスピア生誕の地ストラトフォードやオックスフォード大学散策など、そこへ実際に行かなければ体験できないようなことを肌で感じることができた。プログラム終盤の日英文化比較についての英語スピーチでは、研修成果をホストファミリーやレンコム・カレッジの生徒や先生方に立派に発表し、英語力にも自信がついたと思う。

現地スタッフのコッツウォルズ・ウインド・アカデミー（CWA）が全面的にサポートしていただき、安心して研修を送ることができた。日本人スタッフが一日中帯同してくれ、ホストスクールとの連絡調整や周辺トリップのコーディネートもしてもらったので、引率教員の心的負担は軽減された。引率された先生方もラグビーの国際試合を観戦するなど、それぞれ思い出に残る旅になった。

海外派遣研修「白聖の翼」において、長年、白聖同窓会から多大なるご支援をいただいている。また、ここ 4 年間は岩手県高校生留学促進事業からも補助金を交付していただいている。スーパーグローバルハイスクール指定校として、県民からの期待も多く寄せられているが、「白聖の翼」派遣生が、世界を舞台に活躍できるグローバルリーダーとして今後大きく飛躍することを期待する。

### 2 派遣期間

平成 30 年 3 月 2 日（金）～3 月 28 日（水）

### 3 派遣先

イギリス コッツウォルズ地方レンコム村  
主たる研修先：レンコム・カレッジ  
オックスフォード大学

### 4 派遣者

2 年生	小林 未来	及川 怜奈
	八重樫 海	
1 年生	村上 結菜	鷺津 加子
	和田 采女	長谷部 大翔
	中森 彩美	藤本 翔
	山本 花	
引率者	中野 俊一（英語）	
	菅原 将成（国語）	

### 5 派遣先の概要

#### (1) 派遣先

第 38 回から引き続き、イングランド南西部コッツウォルズ地方で研修を行った。広大な草原で羊が草を食み、コッツウォルドストーンと言われる蜂蜜色の石灰岩で組み上げられた家が散在する丘陵地帯は、そこに住む人々のみならず、ロンドンなど都会に住む人々からも保養地として古くから親しまれ、「イギリス人の心のふるさと」と言われる景観の美しい土地である。また、シェイクスピアの故郷であるストラトフォードや世界最高峰の大学がある街として名高いオックスフォード、ローマ人の保養地として栄えたところの名残を今なお残すバースなど、歴史的にも価値ある場所が数多く、イギリスの、ひいてはヨーロッパの歴史・文化に触れるには最適な研修先である。



イングランド南西部コッツウォルズ地方の風景

#### (2) 主たる研修先

コッツウォルズの中核都市チェルトナムから車で

30分ほど山道を進むと、丘の上に城郭のような美しい建物がある。それが昨年度に引き続き研修を受け入れてくださったレンコム・カレッジである。レンコム・カレッジは、イギリスでも数少ないパブリックスクール（小・中・高一貫の私立学校）であり、また、児童・生徒の半数以上が学内の寮で生活するボーディングスクールでもある。1学年は40人～50人程度であり、そのため一人ひとりの子どもにきめ細かで充実した教育が提供されていた。

そのようなすばらしい環境の中で、午前中の英語研修からはじまり、午後は各教科の授業を体験したり、各種の学校行事に参加してレンコム生とのふれあいを深めたり、貸し切りバスに乗ってコッツウォルズ地方の街をめぐるなど、大変充実した日々を送った。また、ホームステイ先も、豊かで温かく、フレンドリーな家庭ばかりであり、派遣生は、学校だけではできない貴重な体験ができた様子である。

綿密なプログラムのなかで、語学のみならず、異文化に触れて自己を深める絶好の機会となったことと確信している。



レンコム・カレッジでの交流

### (3) その他研修先

約3週間のレンコム・カレッジでの研修を終えた後、バスでロンドンへ移動し、1日目はガイドの方の案内つきで、バッキンガム宮殿からウェストミンスター周辺の散策と、大英博物館見学をした。バッキンガム宮殿では、衛兵の交代式を見学。ちょうどこの日から衣替えし、お馴染みの赤と黒の衣装に。大英博物館は広大であり、すべて見て回ることはとてもできなかった。2日目は終日、3日目は午前中ロンドン自主研修を行った。中にはピカデリーでミュージカルを堪能した生徒もいた様子。その後ヒースロー国際空港から帰路に就いた。



バッキンガム宮殿

## 6 費用

(1) 旅費総額（一人分）	638,170 円
内訳	
国内旅費	34,330 円
国外旅費	603,840 円
(2) 白聖振興会による補助	250,000 円
(3) いわて高校生留学促進事業による補助	60,000 円
(4) 生徒自己負担	328,170 円
(5) その他経費（額は任意）	
・小遣い	100,000 円程
・旅行任意保険	20,000 円程度

## 7 平成30年度生徒海外派遣事業「白聖の翼」

今後も本事業は継続して実施され、平成30年度も平成29年度と同じイギリス・レンコム・カレッジ（コッツウォルズ地方）を中心に研修が行われる。

派遣日程は平成31年3月2日（土）～27日（水）までの27日間である。その詳細については5年次の本書において報告する。

## X I 運営指導委員会

### 1 開催日時

平成 31 年 2 月 25 日(月)13:20～15:00

### 2 参加者

[運営指導委員]

遠藤洋一委員長 佐々木修一委員

※当日欠席の谷村邦久委員・佐藤智子委員については、委任状をいただいた。

[管理機関]

岩手県教育委員会松本諭指導主事 田鎖伸也  
指導主事

[指定校]

川上圭一校長 坂本美知治副校長 阿部圭次  
副校長

SGH 推進課員及び事務担当職員 5 名

### 3 議事

平成 30 年度の取り組み状況および  
最終年度となる来年度の展望について

#### (1)[指定校]より概況説明

##### ア 今年度の総括

課題研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの学年ごとに今年度の活動を総括すると、Ⅰでは今年度から盛岡市の大幅な協力を得て地域の問題に主体的に取り組んだ。Ⅱでは前年度からの研究を深化発展させてアクションを起こしていった。Ⅲでは3年間の取り組みの内容を英語でプレゼンテーションした。ⅠからⅢを通して、前年度からの反省と課題をもとに、研究成果とプレゼンの二つの点で、大きな質の向上が見られた。

また、海外フィールドワークの訪問先が、前年までのアメリカ・ボストンから、今年度は台湾に変わった。実際に訪れた感想として、ボストンでは、生徒の課題研究を深化させるという意味では弱いところがあったが、台湾では、生徒それぞれの研究に関して実際に現地でフィールドワークできるチャンスがあり、研究も発展させることができた。フィールドワークでは、事前にアポイントメントを取るのが難しく心配していたが、現地では、生徒は街頭でアンケ

ートを取るなどして研究活動を行い、英語でまとめてプレゼンテーションを行うところまで持っていった。盛岡市として交流のある慈済大学附属高級中学とは、滞在期間は短かったが、心の交流までできたように思う。何より生徒たちが、前向きに臨機応変に対応してくれた。

台湾は予算的にも持続可能かと思う。来年度の予算措置が終わった後どうするかは今後考えていかなければならない。

##### イ 課題研究Ⅰについて

昨年度から、「地域創生プログラム」という形で盛岡市の全面的な支援を受けて、地域の問題を、現在まさにその問題と取り組んでいる大人たちとともに考えるという取り組みを行ってきた。次年度の課題研究Ⅱにおいて、各自のテーマをグローバルに広げるための土台として、「ローカル」を意識した。

夏休みには、盛岡市内でフィールドワークを行った。盛岡市にも関係先を紹介してもらうなどして、現場に出て行った。生徒の立場からはなかなか思いつき得ない現場、例えば子供食堂でボランティアを行うなど、新たな展開があった。また11月の研修旅行では、新たに研修旅行先の京都でフィールドワークを行った。例えば京都で行った調査を盛岡と比較して問題を相対化するなどの取り組みを行った。1月には発表会を行った。代表選考会では、マイプロジェクトアワードを主催しているNPO法人「カタリバ」に協力していただき、すべての班でフィールドバックを行い、次年度の「アクション」を意識した活動を行った。

年度末にはポートフォリオを試作した。今年度報告できる成果は、夏休みのFWの学びと研修旅行の学びの二つがあるが、それよりも、報告と報告をつなぐ各生徒のストーリーや気づき・学びの過程を記録させたいと考えた。

##### ウ 課題研究Ⅱについて

重視したのは以下の2点。第一に、これまではアクションプランを提示するのみで終わってしまったのを、とりあえずアクションし

てみるのところまで持っていく。第二に発信力の向上。これも前年度までの課題であった。

前者においては、前年度の1年生の班を原則的に踏襲して、年度当初からまずアクションしてみる仕掛けをつくった。

後者は、11月に、昨年度までは3年生だけを対象としていた村尾隆介氏によるプレゼンテーションの講習会を行った。スライドの構成と親しみやすい語りという点で、プレゼンテーション力を大きく向上できた。

ただ、今日も午前中御覧いただいたが、ポスターセッションの中身は学術的にはまだまだ評価できない水準であり、そこはうまく指導できなかったと言える。

全体に、こちらの指導のかけ方や比重によって、取り組みと結果には大きな差が出ることがわかった。しかし1年間はやはり短く、研究内容を先輩から後輩へリレーしていくような形で積み重ねていけるようであれば望ましい。

補足として3点。①可能ならばすべての生徒が、台湾の大学と交流できるシステムがあればいい。本校の「国外の機関との連携」力はもともと低いということもある。台湾研修の参加生徒の活躍がめざましいことも理由の一つである。②今年度 ILC 6校が集まった発表会を成功させたが、参加生徒以外にも他校生の取り組みを知らせる場を設けたいし、他校と協同して取り組みたい。③部活動のように、授業時間外に取り組む形ができればいい。盛岡市などの外部の企画を、生徒にはそのたびごとに紹介し、その都度参加できる生徒が参加してきた。部活動という体裁をとらなくても可能だろうと考える。

## エ 課題研究Ⅲについて

担当者が今年度変わったことで、前年度からの課題の把握と継続性において問題があったスタートだった。

それでも第一にグローバル課題への解決方法を意識して研究をまとめること、第二に英語によるプレゼンテーション能力と質疑応答する力の向上をテーマに取り組んだ。

前者の課題は十分果たせたとはいえない。前年度の研究内容で、グローバルな課題と接続する意識が弱いものをまとめ直す作業を行わせようとしたが、単純な英作文のみを行い、研究内容のブラッシュアップには至らない班が多かった。

後者は、プレゼンテーションに関する講習会と、英語の授業時間を利用して質疑応答のレッスンをしてもらって準備した。

コース別発表会と本発表会のどちらにおいても、前年度同様、岩手大学国際課と教育学部の協力を得て、多くの留学生とゼミ学生に参加してもらった。留学生とゼミ学生には事前に、各班の発表後に英語で質疑応答をしてもらうように依頼した。必ずしも英語ネイティブではない留学生による質疑は生徒にとっても難しい点があったが、逆にこれからの国際社会における英語の重要性を実感できる機会ともなった。

## (2) [指定校]より決算について

研修が台湾に変更されたことで、生徒の個人負担が4割程度に削減された。また現地での移動費用が少なくなったことで、研修そのものに集中できた。

タブレット端末は来年度10月末までの契約である。更新はしない。大型プリンタについては更新を行う予定。

## (3) [指定校]よりこれまでの課題と今後の展望について

来年は最終年度である。総まとめの年であると同時に今後組織としてどうしていくかを決める年である。SGH指定が終わった後の継続性を考えたい。

大学だけでなく盛岡市など外部の方の協力を受けて成果も出ているが、外部との交渉・外部からの協力依頼への対応など、現在の人員で継続できる仕事量ではない。組織としてどう対応していくか、いろいろな対応を考えたい。

現行の課題研究のテーマは6つだが、指定が外れた後には、いくつかを精選するなど、今後



の具体的な継続についても考えなければならない。

#### 4 指導・助言

##### 4 (1)[運営指導委員]より指導・助言

遠藤洋一氏

問題解決には、P P D A C サイクルが重要だ。生徒の問題解決のフレームだけでなく、本校の SGH 事業においても、そのサイクルを使って取り組み、「ポスト SGH」を見極めなくてはならない。来年度早々に検討すべきである。文科省では、今後 Advanced と Regional に分けて考えているようだ。授業全体の SGH 化という観点もある。文科省の動きを見ることも重要だが、本校はどうするか。事業継続の形を、どこでどのような形で決めていくのか、決めてもらいたい。

佐々木修一氏

地域問題を自分ごとにするのは、とても難しい。大学生の指導の中で私も日々苦勞している。また、問題と課題は違う。最初に問題があり、その解決のために取り組むひとつひとつを課題と言う。課題としてのアクションは重要だし、アクションプランを考えるのはとても重要。その点で見ると、課題研究の中で、カタリバさんの協力を得ながら行うワークショップは素晴らしい取り組みで、今後もすすめてほしい。

##### (2)[管理機関]より指導・助言

松本諭指導主事

発表会を見てきたが、研究内容・プレゼンテーション力ともに、レベルが年々向上している。本校の県内における使命から考えて、今後実施される探究活動における他校のモデルという役目も果たしてほしい。予算については、今年度「ポスト SGH」を見込んだ予算を請求したが、あいにく予算措置ができなかった。来年度はなんとかかしたいと考える。本校もがんばってほしい。

(様式1) 300720提出

平成31年度教育課程

学校名 岩手県立盛岡第一高等学校

課程別 全日制 本分校別 本校

学科名 普通科

教科	科目	学年 コース 標準 単位数	1年		2年		3年		備考
				文系	理系	文系	理系		
国語	国語総合	4	5						現代文B、古典Bは2・3年分割履修。
	現代文B	4		2	2	2	2		
	古典B	4		3	3	2	2		
地理 歴史	世界史A	2			2	▽5			3年文系の学校設定科目は2年で履修したBを付した科目と同じ科目を履修。 理系B科目は2・3年分割履修。  学校設定科目 学校設定科目 学校設定科目
	世界史B	4		4		3	▽5	■②	
	日本史A	2				□2			
	日本史B	4		■4	■3			■②	
	地理A	2				□2			
	地理B	4		■4	■3			■②	
	世界史探究	4					◎4		
	日本史探究	4					◎4		
地理探究	4					◎4			
公民	現代社会	2	2						
	倫理	2					2	◎4	
	政治・経済	2					2		
数学	数学I	3	3						1年次は数学I・A終了後に数学IIを履修。数学IIは文系は1・2・3年、理系は1・2年分割履修。2年理系は数学II・B終了後に数学IIIを履修。数学IIIは2・3年分割履修。文系数学Bは2・3年分割履修。
	数学II	4	1	4		3	2		
	数学III	5				1		6	
	数学A	2	2						
	数学B	2		2		2	1		
理科	物理基礎	2	2						2年文系の学校設定科目は、化学基礎又は地学基礎履修後に履修し、2・3年分割履修。 2年理系の化学は、化学基礎履修後に履修。理系の物理・化学・生物は2・3年分割履修。  学校設定科目（物理・化学中心） 学校設定科目（生物・地学中心）
	物理	4				▲3		▲3	
	化学基礎	2		▲2		2			
	化学	4				2		3	
	生物基礎	2	2						
	生物	4				▲3		▲3	
	地学基礎	2		▲2					
	自然科学A	5		△2			△3		
自然科学B	5		△2			△3			
保健 体育	体育	7~8	3	2	2		2	2	
	保健	2	1	1	1				
芸術	音楽I	2	●2						II・IIIを付した科目は各々に対応するIを付した科目の継続履修。
	音楽II	2		●1		●1			
	音楽III	2						◎4	
	美術I	2	●2						
	美術II	2		●1		●1			
	美術III	2						◎4	
	書道I	2	●2						
	書道II	2		●1		●1			
書道III	2						◎4		
外国語	コミュニケーション英語I	3	4						英語表現IIは2・3年分割履修。
	コミュニケーション英語II	4		4		4			
	コミュニケーション英語III	4					4	4	
	英語表現I	2	2					2	
	英語表現II	4		2		2	2	2	
家庭 情報	家庭基礎	2	2						
	情報の科学	2	2						
共通教科・科目の単位数の計			33	33	33	26	26		
ホームルーム活動			1	1	1	1	1		
SG総合学習			1	1	1	1	1		
合計			35	35	35	28	28		
備考			1. 各学年・コースにおいて、●、■、□、▲、△から1科目ずつ、▽から1グループずつ、◎から2グループ（芸術からは1科目のみ）を選択し履修する。 2. 3年文系で、◎から芸術を選択できるのは、芸術系大学を専願する者に限る。						

平成31年度教育課程

1

学校名 岩手県立盛岡第一高等学校

課程別 全日制 本分校別 本校

学科名 理数科

学 年 コ ー ス			1年	2年	3年	備 考
教 科	科 目	標準単位数				
国 語	国語総合	4	5			現代文B、古典Bは2・3年分割履修。
	現代文B	4		2	2	
	古典B	4		3	2	
地理歴史	世界史A	2		2		地理Bは2・3年分割履修。
	地理B	4		3	2	
公 民	現代社会	2	2			
保健体育	体育	7~8	3	2	2	
	保健	2	1	1		
芸 術	音楽I	2	●2			
	美術I	2	●2			
	書道I	2	●2			
外 国 語	コミュニケーション英語I	3	4			英語表現IIは2・3年分割履修。
	コミュニケーション英語II	4		4		
	コミュニケーション英語III	4			4	
	英語表現I	2	2			
	英語表現II	4		2	2	
家 庭	家庭基礎	2	2			
情 報	情報の科学	2	2			
共通教科・科目の単位数の計			23	19	14	
理 数	理数数学I	4~8	4			理数数学I終了後に理数数学IIを履修。 理数数学IIは1・2・3年分割履修。 理数数学特論は1・2・3年分割履修。 理数物理は1・2・3年分割履修。 理数化学は2・3年分割履修。 理数生物は1・2・3年分割履修。 理数地学は2・3年分割履修。
	理数数学II	8~14	1	4	3	
	理数数学特論	3~10	1	2	3	
	理数物理	3~8	2	▲3	▲3	
	理数化学	3~8		4	3	
	理数生物	3~8	2	▲3	▲3	
	理数地学	3~8		▲3	▲3	
課題研究	1~4		2			
専門教科・科目の単位数の計			10	15	12	
ホームルーム活動			1	1	1	
総合的な学習の時間					1	2年次は課題研究を履修。
総合的な探究の時間			1			
合 計			35	35	28	
備 考			1. 各学年において●、▲から1科目ずつ選択し履修する。			



平成 27 年度指定 スーパーグローバルハイスクール  
研究開発実施報告書 第 4 年次  
平成 31 年 3 月発行

岩手県立盛岡第一高等学校  
〒020-8515 岩手県盛岡市上田 3 丁目 2 番 1 号  
TEL 019-623-4491 FAX 019-654-4227  
URL <http://www2.iwate-ed.jp/mol-h>

